
後藤詩門短編集

後藤詩門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

後藤詩門短編集

【Nコード】

N3249E

【作者名】

後藤詩門

【あらすじ】

2000文字未満の短編集です。ブラックジョークが多めかも…

…

第一話 白米

日本人で良かった、と思えるのは一体どんな時なのだろう？

私の場合それは、白米を食べた時だ。

とりわけ、長い海外旅行から帰ってきて、やっと白米を食べれた時にそう感じますねえ。

ちよつと大袈裟？ とんでもない！ 考えてもみて下さいよ。

例えば、アメリカに一週間ばかり出張したとします。

あそこでは、やれハンバーガーだのフライドチキンだの……油まみれの料理ばかり。

肉料理以外の飯はないのか？ と思うくらい肉ばかりなんです。

(まあ、高級料理店は違うかもしれませんが、私のようなしがないサラリーマンの行ける店は大衆食堂レベルの店ですから)

付け合わせに出るジャガイモも、フライしてあるんですよ。

私なら一年でメタボになる自信があるくらい。まったく酷い食事なんだ。

そんな所に一週間もいてごらん下さい。

普通の日本人ならうんざりしますよ。

少なくとも私はそうでした。

そんな油まみれの食事から離れ、ようやく日本に帰国できたら…

…さて、あなたならどうします？

アツサリした日本料理を食わせてくれる飯屋に直行しますよね？

そこで何の料理を頼むかは人それぞれです。
でも必ず、白米は食べるでしょ？
そして熱々の白米を漬物と一緒に喉の奥に掻き込むんです。

その時、自然と……

「はあ、日本人で良かったなあ」

って、満足げなため息と共に呟いてしまっんじゃないありませんか！
普通の日本人ならそうなるに違いありません。
分かっていただけでしたか？

さて、実は私。

今まさに海外旅行から帰って来たところでした……
行きつけの店（成田空港にほど近い小料理屋）で食事している
真っ最中なんですよ。

そして、熱々の白米を漬物と一緒に掻き込んだばかり。
本当に日本人に生まれて良かったなあ、と痛感しておる次第であります。

それにしても、ここの白米はなんてうまいんだ。
新潟産のコシヒカリかな？

少しお腹も膨れ、久しぶりの和食に満足した私は、上機嫌で店の
大将に尋ねました。

「大将、うまい米だねえ。どこ産なんだい？」

「へえ、ありがとうございます。カリフォルニアでさあ」

「……………」

まあ、その、なんだ。

アメリカも捨てたもんじゃないですなあ。

第一話 告白

「河本先生、好きです！」

「ま、まて井上！ お前、自分が何を言ってるのか分かっているのか？」

「分かってます！ いけないことだっただけのことくらい。でも……でも、私、先生のこと大好きなんです」

「ま、ま、まて！ 気持ちは嬉しいが……それは駄目だ」

私立鯨釜学園の教師、河本は焦っていた。

放課後の人気のない教室で、ミニスカート姿の可愛い教え子と二人つきり。

それだけで心臓がバクバクする状況だというのに、まさか告白されるなんて……

もう、どうにかなりそうだった。

正直、河本はモテる男ではない。

いや、はつきり言ってモテない。

女性とまともに付き合ったことなど皆無に等しい。

童貞は商売女に捧げた。

大学を卒業する直前のこと。五十を過ぎたくらいのおばさんが相手だった。

イク時に「母ちゃん！」と叫んだ。

終わったあとそのおばさんに大笑いされた事は、記憶から消しきれない苦い思い出である。

そんな河本だからこそ、このシチュエーションには焦ってしまうのだ。

このまま教え子とズルズル行ってしまうそうで……

(いかんいかん、何を考えているんだ俺は！)

そもそもどうして、こんな事になってしまったのだろうか？

河本は焦る頭で思案する。

そしてすぐに(この学園の教育方針が悪いのだ)と、結論づけた。

初代学園長の理念は自由な校風。

そのため、生徒が少くらいハメをはずしても、教師は何も言えない。

制服も自由。何人かの生徒は詰め襟の学ランをきちんと着用しているが、その他は思い思いの服装を楽しんでいた。

そして中には、この井上のように際どいミニスカートに化粧を施した、高校生とは思えぬ姿で登校してくる者もいるのだ。

河本はそんな学園の教育方針を苦々しく思う。

だが今……

赤いルージュを塗った教え子の唇が目前に迫る状況に立たされると、河本の顔はだらしなく歪んでしまうのだ。

彼がもっと女性に免疫があればこうはならなかったかもしれない。時すでに遅し。

ついに河本の理性を吹き飛ばす一言を井上が言った。

「私の初めては……先生に……あ・げ・る」

小悪魔的な微笑を浮かべる教え子の言葉に、教師の我慢は限界に

達した。

「い、いいのか？」

「……うん」

その日、暗くなった教室で二人は結ばれた。河本に悔いはない。

たとえこの学園が男子校であり、井上が美形ではあるがれっきとした男だとしても……

第三話 愛情

「小夜子さんのお茶は美味しいですよねえ。どうしたらこんなに上手に入れられるんですか？」

同僚の男子社員の質問に私は答えた。

「あら、お茶くみに技術なんていらないわ。お茶をお出しする相手に愛情さえあれば良いのよ」

「へえ……愛情ですか」

よほど感心したのか呆然としている彼の様子に、私は笑いを禁じえなかった。

そう、お茶くみは技術じゃない、愛情なのだ。

これが私の10年に及ぶOL生活で導き出した結論。

私の名前は葛城小夜子^{かじのひまり}。都内の設計会社に勤務しているOLだ。自分で言うのも何だが工藤静香似の28歳。

そんな私の入れるお茶は男子社員の評判だった。

皆が美味しいと言って飲んでくれる。

少し照れるが、冒頭でも言った通り特別な技術がいるわけではない。

お茶くみの対象となる相手に、多少の愛情があれば良いだけの話。

例えば、ムカつく小川の禿げちゃびん（課長）には熱々のお茶を出す。

ただし、沸点を僅かに下回る温度まで冷ましてあげる。
それが私の愛情。

それからお茶の量は、表面張力を効かせて縁のギリギリにまで入れる。

そして……

「ごめんなさい課長、入れすぎちゃって」

と、なるべく可愛らしく謝る。

すると、禿げは大袈裟に手を振りながらこう言うのだ。

「ああ、いいですいいです。喉が渴いていたからちようどいい」

それからすぐに、分厚い唇を湯飲みにつけてずっとすすする。

沸点を僅かに下回る熱々のお茶を……

当然ながら、「熱っちい！」となるわけだ。

わははは、ザマミロ〜。

さて、逆にキムタク似の衣笠君には完璧なお茶を出す。温度、香り、濃度全てがまさに理想。

だって、私のお嬢さんになる可能性がある人なんだもん。

禿げに出したみたいなお湯で火傷させるわけにはいかないでしょ？

これが私の愛情。

そして、それ以外の男子社員にはぬるめのお茶を出す。

禿げに大量の熱湯を使うし、衣笠君のお茶は完璧さを求めるあまり何度も入れ直したりするから、どうしても最後はお湯が足りなくなるの。

だからそんな時には迷わず水を継ぎ足すことにしている。

どうでもいい不細工男子社員にはこの程度で十分。
あいつらにお茶の善し悪しなんか分かる筈がない。
課長みたく火傷するよりかはマシでしょ？　これが私の愛情。

私のお茶は社内で評判のお茶。

ちなみに会社の名前は葛城設計事務所。

私のパパが社長だけど……それが何か？

第 四話 魔人

ランプというものがこの国に普及してない以上、魔人に選択の余地はなかった。

彼は己れの住処としてランプに似た物……つまりタコツボを選んだのだ。

これが失敗のもと。

そもそもタコツボとは海中にある。

だから、彼の住むツボが人の手に渡る事は滅多にない。

されど魔人の仕事は人間の願いを3回かなえること。

つまり彼は、この国に来てまだ一度も、仕事にありつけないでいたのだ。

そろそろ魔人の国の友人達からは、あいつは二トじゃないかと噂される始末。

早く何とかせねばと彼は考え始めていた……

そんなある日、彼のタコツボが偶然にも漁師の網に引っかかった。

超ラッキー！

これ幸いとばかりに、彼はタコツボから飛び出す。

「わははは、わしはランプ……じゃなくてタコツボの魔人じゃ！

何でもお前の願い事を3つかなえてやるう！」

3年ぶりの仕事に気合いが入る。

一方、漁師の方は突然タコツボから出てきた大男に、腰をぬかして驚いていた。

「ひ、ひい、ば、化け物じゃ〜！」

「化け物じゃない、タコツボの魔人！」

少しムキになって言い返す魔人。

だが、漁師は脅えた様子で首を振る。

「そ、そんなの聞いた事がねえだ〜」

「ちっ、3年も海に引きこもりだったからなあ。知名度が低くなつてやがる……まあいい、とにかく願いを言ってくれ。何でも3つかなえてやるから」

「へっ？ 3つも願いをかなえてくれるんけ？ ひよっとしてあんた神様が！」

「だからあ、タコツボの……ってもういいよ、神様で。早く願いを言え！ こっちは仕事したくてウズウズしてるんだ」

強引に話を進める魔人。ようやく漁師から願いを引き出せた。

「じゃあもう、最初は……金！ 金をくれ！」

漁師が言った。

「良かるう」

魔人は手を振って空中に一万円札を一枚作り出し、漁師に渡す。

「へっ、何これ？」

「金だが」

「ちょっと待て！ 金って……一万円札が一枚だけ？ そりゃ無しにしてくれ！」

魔人は暫く黙っていたが、すぐにこう言った。

「……よし、ちょっと待ってやったぞ。これで2つ目の願いはかなえた。それから3つ目は最初の願いを無しにすることであったな。それもかなえてやるぞ」

そう言うと魔人は手を一振り。

あっという間に漁師が握るあの一万円札が消えた。

「それではな」

こうして彼はタコツボに戻った。

そして3つの願い事をかなえてもらった漁師は、腹立ち紛れにタコツボを勢いよく海に放り込む。

魔人のツボはまた海底深くへ沈んでいったのだった。

あれから3年が経過した。以来彼のタコツボは、人間の手に一度も渡る事なくいまだ沈んでいる。

そろそろ転職かなと魔人は考え始めていた。

第 五話 暗示

自殺した。

今さつき。

手首を切った。

リストカットっていうみたい。

うまく切れなくて、何度もやり直した。

とっても痛い。

死にそうなくらい痛い。

7回目でやっと切れた。血がたくさん出た。

成功したんだ……ようやく死ねるとほっとする。

えっ、死にたかったの私？

よく分からない。

だんだん意識がなくなってくる。

凄く眠い。

このまま、眠ろう。

そう決めた。

でも、なかなか眠れない。

眠いのに……眠れない。

どうして？

強い力が私を引っ張る。

誰かが私をこの地に留めようともしているみたい。

浴室が私の血潮で真っ赤に染まる。

だって私は、お風呂に入りながら自殺したのだ。

もうすぐ体の中の血が全部無くなる。

風呂場の浴槽が一杯になるくらい、私の血はたくさん出るのだ。

そうすれば、私はやっと死ねる……

私が死んだらママは悲しむ？
ううん、きつと悲しまない。
私がないほうがママは嬉しい。

でも友達には悲しんでくれる。

私には仲の良い友達が何人もいるのだから。

パパもきつと悲しんでくれる。

ママと離婚してからもう何年もあつてないけど。

でも、私はパパが大好きだから。

学校の先生だつて近所のおばさんだつて、みんなみんな悲しんでくれる。

仲よしなもの、きつと私のために泣いてくれる。

ごめんね、みんな。

でも、どうしようもなかった。

何故、私は自殺したんだろう？

それは、まったく分からない。

ただ、お風呂に入った時に、何故か置いてたママの剃刀。
その剃刀を見た瞬間、ああ自殺しなきゃって思った。

でも……

死にたくない。

死にたくないよう。

ママ、助けて。

そこでじつと見てないで、私を助けて。

真っ赤に染まった浴室に、白い裸体で横たわる私を、どうかママ助けて下さい。

私が死ねば、再婚しやすいのは分かっている。

私も、もう12歳。

大人の事情は理解してる。

だけどママ、それは酷いよ。あんまりだよ。

毎日、毎日、私に囁くママの声。

毎晩、毎晩、私を駆り立てるママの言葉。

大学の先生をしているママはとっても忙しい。

今までお話してくれる事も、私の話を聞いてくれることもなかったから……

だから、嬉しかった。

近頃、ママが話してくれるのがとってもとっても楽しかった。

だけど、違ったのね。

ママは私が好きになったから話してくれたたんじゃなかった。

むしろ、もっともっと嫌いになったから私とお話するようになったのだ。

この日のために……

ねえ、ママ。そうでしょ？

ママは大学の先生。

心理学っていろいろを教えている。

第 六話 呪い（前書き）

ヒントは文頭に隠されている。

第 六話 呪い

お前は昔から本当に胃腸の弱い子供でねえ。とうとう胃潰瘍になつちやうなんて……しかも、お父さんも一緒に。きつと恐ろしい呪いにかかつてるんだって思ってたわよ、あたしは。でもねえ、あんな事が原因だなんて……驚いたわ。

その頃はねえ、お前はようやく離乳食離れして、普通の食事ができるようになっていたんだよ。

ろ線バスの運転手をしていたお父さんは、夕食を家族と一緒に食べるマイホームパパでさ、きちんと定時に帰ってきては、お前の食事の手伝いをするのを楽しみにしていたんだ。お前は末っ子だしね、それはそれは可愛がっていたんだよ。

し六時中、つきつきりでお前の面倒見てくれたんだよ、あの頃のお父さんは。

いた飯って言うのかい？ 子供の頃のお前はパスタやらピザやらが大好物でねえ、お父さんはお前が好きなものを手当たり次第に買い集めては、食べさせてあげてたの。それは感謝しなくちゃいけないわよ礼二。でも……

のみ込みやすいようにお父さんはよく、ちよいと嚙んでからお前にあげてただけど……あれが悪かったとはねえ。

ろう若男女、日本の家族はこうしてみんな育ってきたもんなんだ。

いやあ、それが悪い事だなんて……思いもしないじゃないか？

口移しなんて親ならみんなやってる事なんだよ。

そんなに怒らないでよう、礼二。母さんも悪かったなって反省してるんだから……でも一番悪いのはお父さんだって事は忘れないでね。あたしは、共犯者ってくらいの立場。それにしても、お腹すいたわね。

れい凍ミカン食べる、礼二？ あっ、そうかそうか！ 駄目だったわね。

はっ、はっ、はっ、ごめんね礼二。これはあたしが食べとくわ。

ピーナッツも駄目なの？ まあ当然か、冷凍ミカンも食べれないくらいだもんね……じゃあこれもお母さんが食べてあげる。

ロクでなし？ やあねえ、それを言うなら人でなしよ。ロクでなしは今のお父さん。定年退職してからは本当に我が家の粗大ゴミになってしまって……役場で引き取ってもらえないかしら？

リンゴジュースはどうかしら？ 手術が終わるまでは飲み物も一切飲めないの？ じゃあ、これもあたしが……っえ？ いい加減にしる？ もう、だから怒らないですよ。

きれやすいわねえ、現代っ子は。誰に似たのかしら、まったく。

ん？ お母さんだって？ 馬鹿、何言ってるのこの子は。そんなわけないじゃない。お前はお父さん似です。だって、胃弱なところなんかそっくりじゃない。

をっと、いけない、もうこんな時間だわ。

うっかりしてた。

つまらない言い合いしてる場合じゃないのよ。

さマーバーゲンが始まる時間！ 2丁目のデパートだね。

れいじ、それじゃあお母さんもう行くわ。手術くらいお前一人でも大丈夫よね？

たしか、お父さんの手術もお前と同じ時間だから、終わる頃には帰ってくる。

ことは、夏物ワンピースを狙っているのよ……って、あれ？
お腹痛いわね……あつ、痛い、痛い、痛い！

と、といれに行かなきゃ……でもこの痛みはなに？ ただの腹痛じゃないわ。もしかしたら、お前と同じで……お父さんの恐ろしい呪いにかかったのかも！ あ、あの、禿おやじめえ……って、いたたた。こんなこと言ってる場合じゃない。か、看護婦さん助けてえ、私もお父さんの恐ろしい呪いにかかったわあ！

第 六話 呪い（後書き）

恐ろしい呪い、それはピロリ菌をつつされたこと……でしたあ。つ
てつまらない物書いてしまった orz

第七話 5m

5メートル。それが私とストーカーとの距離だった。

私の名前は花園香、はなそのかおり都内の区役所に勤める28歳の公務員である。

私が初めてストーカーの存在に気づいたのはひと月ほど前、仕事帰りにコンビニへ寄った時だった。

その時、私は背中ごしに熱い視線を感じていた。

不安に駆られその視線の主を探す私。

すると……

そこにいたのは40前後の渋めの男。

古臭いトレンチコートに身を包み、上気した顔でじっと私を見つ

めている。

(やだあ！)

心の中で悲鳴をあげる私。

すぐに分かった。彼は間違いなく私のストーカー。

女の第六感である。

そして、それから一カ月後……

私の推理は正しかった。

男は毎日私の前に現れるようになったのだ。

朝出勤する私の後を5メートルほど離れてついてくる彼。

付かず離れず、ずっとその距離。

帰宅の時も同じ。5メートル後ろから熱い視線を送ってくるのだ。

夜は電柱の影に隠れて私の部屋を見張る。

明かりが消えるまで待つてみたい。
でも、彼が何か悪さをするわけではない。
いつも5メートル離れた所で、私を見ているだけのストーカー。
普通なら警察に訴えるのだろうか……
私は違った。

私は昔から、どこか陰のある男が好みである。
つい最近まで好きだった男は、父親が犯罪組織のボスという暗い
陰を持っていた。

彼は隠していたが私には分かる。
そんな男に私はたまらなく惹かれるのだ。

そう、いつしか私は……この犯罪者に恋をしていた。
でも、私は彼の名前すら知らない女。

その差5メートルの距離はなかなか縮まりそうになかった。
何とかこの差を縮めたい。

私は一計を案じた。

(そうだ、彼の後をつければいいんだわ。そうすれば彼の事をもっ
とよく知れるはず！)

男は私の部屋の明かりが消えるとすぐに、どこかへと去っていく
様子。

その後をつければ良いのだ。

実は私……その手の尾行には自信があった。
さっそく実行に移す事にする。

部屋の明かりを消すと急いで勝手口から外に出る。
彼はちょうど去るところだった。

すぐに後をつける。もちろんバレないように5メートルほど距離を
おく。

手馴れたものである。

すると彼は私の尾行に気づくことなく、ある建物に入っていった。それは……何と警視庁！

私は焦った。

どういうこと？

急いで彼の後に続く。

すると、建物の中で彼が偉そうな警官と話をしているのが見えた。聞き耳をたてる私。

彼は言った。

「警視総監。御子息をつけまわしていた例の女ストーカーのひと月に及ぶ尾行が終了しました……」

第 八話 博士

私は東都大学で薬学とつくだいがくを研究している科学者、幕ノ内博士まくのうちにである。
実は今、画期的な薬品開発をしているところ。

どんな薬かつて？

それは……何でも人に言う事を聞かせる事ができるという夢のよ
うな薬である！

それも、単純な要求だけじゃない。複雑な要求にもこちらの思い
のままに相手を動かせる優れものなのだ。

例えばそうだな……君には、幼い頃に憧れた初恋の女性がいると
しよう。

10年後、駅で偶然にも彼女と出会う。

少し老けたが、まだまだ綺麗だ。

二言三言、話をする君。

結婚もして幸せそうな彼女。

だけど……そう、だけどだ。

内心、君は面白くはない。

だってそうだろ？

自分の方が、彼女の事を先に好きになつたはずなのに。
なぜ、彼女は自分を選ばなかったのだ？

あの頃の気持ちがあつくと湧き上がる。

ああ、好きだ。

今でも僕はこの人が大好きなんだ。

できることなら、この人と結婚したい。

でも……旦那がいるんじゃない。

普通ならここであきらめる。

しかしだ、この薬があれば事態は一変する。

君は初恋の彼女をあきらめる必要はなくなるのだ！

しかもその場ですぐに、君は難なく憧れの女性を手に入れる。薬は一瞬で効く。

その日の晩は、夜景の綺麗なホテルのラウンジで仲良くグラスを傾けるのだ。

一方、彼女の元旦那は哀れにも冷たく捨てられる事になる。なにせ彼女は君の思いのままに動くのだから……そして薬の効果は計算上、一生続く。

彼女は永遠に君のもの。どうだ、素晴らしいだろう。

しかも、用途はこれだけじゃないぞ。

上手く使えば世界一の大金持ちにもなれるし、世界中の政治家も思い通りに動かせる。

女も富も権力も……全てが望み通り。

まるでファウストになって、悪魔メフィストフェレスに何でも願いを叶えてもらっているみたいだろ？

この薬さえあればそれが可能なのだ。

そこで私はこの薬をファウストの薬と名づけた。

なに、馬鹿げている？

そんな事は出来っこないだろ？

ところがどっこい、実験はもう最終段階だ。

マウスによるテストでは完璧なデータを叩き出した。

いよいよ人間を使って実験する時がきたのだ！

さて、このファウストの薬の価値を考えると……この実験は極秘に行われなければならない。

もし、邪悪な者が手にすれば世界は破滅する。

それにこの薬の精製は非常に難しく、一度に僅かな量しかとれな

い貴重品なため、実験も多くはこなせない。

そこで私は実験サンプルとして自分自身を用いる事に決めた。そして記録係として、助手の水野君を用いる事にする。二人だけでこの世紀の発明を検証することにしたのだ。

水野君はブサイクな顔立ちではあるが、誠実で優しく男気のある若者。

何故か女にモテるのが不思議だ。

まあ、それもこれも彼の人が成せる業なのであろう。

しかも、彼は金持ちである。

私の研究に自らの私財を投げ打って助けてくれたりもする。

彼は信頼できる。

いや、彼しか信用できない。

さあ、二人でファウストの薬の最終実験を始めよう。

「では、博士。薬をお飲みください！」

「うむ」

助手の水野君に促され、私は目の前のビーカーに注がれた青色の液体を飲み干した。

体がぼかぼかしてきて、だんだん意識が朦朧とする。

計算通りだ。

靄のかかったような頭ではあったが、実験は成功したなと確信する。

そう、私はついに行ったのだ……

そして、私は意識を失った。

「……さてと」

虚ろな瞳で立ちつくす幕ノ内に、助手の水野が近づいてきた。

その顔にはこれ以上無いくらいの皮肉な笑みが浮かんでいる。

悪魔メフィストフェレスもかくやと思われるほどの悪そうな顔だ。

彼は言った。

「やれやれ、またしても成功したか。素晴らしい！ それにしても……何度も僕にこの薬をくださって、本当にご苦労様ですねぇ博士。じゃあ今回も全てを忘れて一から薬を作り直して下さいな。僕はできたばかりのこの薬を使って、最近気になる真知子ちゃんを落とすとしますよ。それから……またどこかの銀行の頭取をたらし込んで僕の口座に大金を振り込ませておきましょうかね。次の研究資金のためにも。あつと、忘れちゃいけない。いいですか博士、他の事は忘れてもこれだけは忘れちゃいけませんよ。僕はブサイクな顔立ちではありませんけど、誠実で優しく男気のある若者です。女性にモテるのが不思議でしょうが、まあ、それもこれも僕の人柄が成せる業と思ってください。僕は博士の研究に自らの私財を投げ打って助けてあげるほどなんですから、信頼できますよ。いや、信頼できるのは僕だけです。だから実験はこれからも二人だけで……」

第九話 仲間

男は行きずりの女と寝る事が多かった。

それも、商売女ではなく素人を好んだ。

えり好みはしない。どんな相手とでも喜んで寝た。

え？

その男は凄いブサイクなのだろうだって？

とんでもない。

彼は最高にイケメンである。

子供の頃から女の子によくモテた。

そして、今でもよくモテる。まるでホストのような男前なのである。

少し痩せ型で優しい色男。そんな印象を相手に与える。

芸能事務所にスカウトされたこともあるくらい。

だから……この男に言い寄ってくる女は多かった。

そして、その中には当然ながらいい女も腐るほどいる。男はいくらでも相手を選べるのだ。

だが……彼はそうはしない。

少しでもチャンスがあれば誰とでもすぐに応じた。

えり好みなど全くない。

彼を知る者は皆、不思議に思う。

昔はこうじゃなかった、と。

だが今じゃ、自分の母親より年上だろうが、下は未成年だろうがお構い無し。どんなにブサイクでもいいのだ。

穴があれば誰でも良い、そんなスタンスであった。

さて……ベッドの上での彼は、外見と違い野性的である。ホテルに入るや否やすぐに女性を求める。シャワーを浴びる暇など彼は女に与えない。一分一秒も惜しむのだ。

そして、その激しいセックスは1時間でも2時間でも変わることなく続くのであった。

最後は女の方がクタクタになって失神してしまうほど。

男と寝た女は朝まで心地良い疲れに抱かれ、決して目覚めることはない。

そんな、ベッドでのびる相手の女性を見て、男は満足げな表情を浮かべる。

そしてそれから、男はすくっと立ち上がると、すぐにそのホテルを立ち去るのだ。

一枚のカードを女の枕元に置いて……

カードには何と書かれているのだった？

そのカードにはこう書かれている。

【ようこそ、HIVの世界へ！】と。

そう、彼はエイズ患者。

3年前に最愛の恋人からウイルスをうつされてしまった。

男の恋人は浮気をしていた。そして、その浮気相手の男にHIVウイルスをうつされてしまっていた。

彼女は2年前に死んだ。

以来……彼は女を恨み、復讐の鬼と化したのである。

それで、こうして今日も彼は女を求めてさまよい歩くのであった。

さて、そんな彼の前に一人の女性が現れた。

男はえり好みはしない。だが……

今回の女は極上であった。

男はさっそくモーションをかけてみた。
すると、女はあっさりとおケーする。

男はニヤリと笑う。全く女ってやつはどうしようもない馬鹿ばかりだ、と呟きながら。

ホテルに行くとさっそくセックスが始まった。

意外にも女の方が積極的である。

シャワーも浴びずに求めてくる女は珍しい。

でも、男には好都合である。

さっそく、野性的な行為に励む。

しかし、今夜は意外な事ばかり続く日であった。

何と女の方も、かなり野性的なセックスをしてきたのである。

戦いは3時間にも及んだ。

男は久しぶりに疲れを覚えた。

こりゃあ、まずいな……

そんな呟きを漏らしたのは、ホテルに入ってから3時間35分後のこと。男の敗北であった。

しかし、彼の目的は相手を失神させることではない。

最終的な目標は……相手にHIVを感染させることである。

もう、コンドームもつけずに何度も本番行為におよんでいた。

これで十分である。

朝、女が枕元に置かれたカードを見て愕然とするという他愛もない遊びができないのは残念ではあるが……今日は仕方がない。

セックスが終わったあと、男は心地良い疲れに抱かれベッドの上に寝転んだ。

そして、朝まで目覚めることはなかったのである。

そして、朝。

目覚めた男は、ベッドの上に相手の女がいない事に気がついた。彼女はもう出かけたあと。

全く凄い女だ。

男は感心する。

あれだけ激しい運動をしたというのに……自分より早く目覚めるとは。

女ながら天晴れだな。男はニヤリと笑う。

それから、筋肉痛になった腰をさすりつつ、男は洗顔のためベツドを降りた。

そして、鏡の前に立った時……男は愕然としたのである。

何故なら……

その鏡には何と、真っ赤なルージユで彼へのメッセージが書かれていたからだ。

そこにはこう書いてある。

【ようこそ、ホモの世界へ！】と。

洗面台を見ると、そこにはひげ剃りの後と見られる細かなヒゲが無数に散らばる……

間違いない。彼女は、いや、彼は男だったのだ！

いわゆるミスターレディー。

もしくはニューハーフ。

男は動揺を隠せなかった。

彼にその気は全くない。それなのにあの女、いや男のせいでエイ

ズのみならずホモの世界にも足を踏み入れてしまった。

自分のことは棚に上げて彼はこの裏切りに怒りを覚えた。

そして、忌々しげにこう叫んだのである。

「畜生、女に続き男にも騙されるとは！ 見てろよ、これからは男とも寝てやるからな！」と。

第十話 欠点

私の名前は北枕きたまくら霊子と言います。

突然だけど、相談があります。

実は私には致命的な欠点があつて……それは、人見知りをする事なんです。

これは私の仕事柄絶対に許されないこと。

自分でもなんとかしたいと思うんだけど、どうにもならないもどかしさを日々感じています。

例えば、ある日のこと……

私は不動産会社がイチ押ししているマンションにて、お客様をお待ちしていました。

緊張しながら待つっていると、新人営業マンの金石かねいし君が若い夫婦を連れてきたのです。

真面目そうな旦那様と可愛い若奥様でした。

私の先輩に言わせると絶好のカモ。言い方は悪いけど、私たちにとつてお得意様になる相手。

それなのに……

私ときたら、まったくダメなんです。お客様の姿を見ただけで心臓はバクバク、胃はシクシク。

まあ、そんなものどこにもないんですけど……とにかく緊張して仕事にならないんです。

そうなる私はそのくさと隠れるしかない。

その日は天井裏にある適当なスペースで体育座りをして落ち込ん

でした。

ああ、いやだいやだいやだ！　こんな性格なんとかしたい。
私は八つ当たり気味にその場で地団太を踏んだのです。
まだ新しいマンション全体がブルブル震えるほど……

「や、やだあ、何よこれ？」

「ポルターガイスト現象か？」

お客様の二人が気味悪そうに天井を見上げて言いました。
でも、不動産会社の金石君は馴れたものです。

「ああ、大丈夫。まったく無害なやつですから安心してですよ。このマンションの屋上から飛び降り自殺した女の幽霊なんですけどね、凄くシャイで誰にも姿を見せないんです。たまにラップ現象をおこすくらいで……逆にこれが面白いつてことで人気ができてね。だからこそ、このマンションはイチ押しなんです」

はあ、本当なら幽霊がでるマンションなんて安くならなきゃおかしいんですけどねえ。

私は幽霊失格です。

そこで、ご相談なんですけど……

私、今の仕事（幽霊）を辞めて元の仕事（人間）に戻ろうかと思
うんですけど、どうしたら蘇れますでしょうか？

第十一話 子供

「ねえ……子供、欲しい？」

そう言いかけて薫は口をつぐんだ。

そんなことは言わずもがなである。

洗濯物をたたむ薫のとなりで、寝転がりながらテレビを見ている彼。

相変わらず巨人選手のプレーに一喜一憂している。

まるで少年みたいに野球が大好きな彼。

キャッチボールができる息子でもいれば、毎日でも公園に出て遊んでくれるに違いない。

その脇でお弁当を広げ微笑みながら見守る自分。

そんな光景を思い浮かべた薫は、たたみかけの彼のパジャマを膝に下ろし、流れ落ちた一粒の涙をそつと拭った。

いや、もちろん彼は子供が欲しいなどと一度も言った事はない。

あえて避けているのではと思えるほど。

だけど……公園で遊んでいる子供たちに優しげな眼差しを送る彼の姿を見ると「ああ、この人は本当に子供が好きなんだなあ。きつと自分の子供も欲しいんだらうなあ」と、薫は考えてしまうのだ。

できることなら産んであげたい。

でも、それは無理な話であった。

薫は決して子供を産む事ができぬ体。太陽が西からのぼることがないように彼女も絶対に身ごもる事はできないのだ。

世の中には、我が子を殺して平気な顔をしている鬼のような親もいるというのに……神様は不公平としか思えない。

こればかりはどうしようもないと諦めるしかないのだろう。

しかし……それでも子供が欲しいと薫は心の底から願うのだ。

たった一人で良い。親子三人で愛のある家庭を築きたい。

いっそのこと……彼が浮気して隠し子でも作ってくれたらいいの

にとさえ薫は思う。

そして、その子を引き取って自分が育てる。

実際このアイデアを彼に話してみようかしら、と喉にまででかかった事もある。

しかし、これも現実味のない話だと諦めていた。

彼は真面目な人なのだ。薫を深く愛してくれている。

浮気するなどとんでもない。話をするだけ無駄だった。

では、どうする？

その答えは一つしかないように薫には思えた。

考えるのも汚らわしいが……自分で何とかするしかない。

幸い、まだ切り取ってはいないし、その能力もある。

顔だってイケメンだ。

その気になれば馬鹿な女をひっかけて、はらませる事も可能。

その赤ちゃんだけを奪い取り、女の方はさっさと捨ててやればいい。

薫は生まれながらのニューハーフ。

そして一応、両刀使いでもある……

第十二話 diet

ある独裁者が治める国の科学者たちが、飼うだけでダイエットができる犬種をつくりました。

その名もズバリ、ダイエット犬！

近頃、太り気味の独裁者には朗報です。

さっそく自分の大きな屋敷で飼うことに決めました。
ただ……

このダイエット犬を飼うには幾つかの条件があつたのです。

科学者たちは言いました。

「まずダイエット犬と同じ食事をとっていただきます」

「なに、犬と同じ餌を食えだど？」

「はい、そうすることで犬のパワーがより発揮できるのです」

「ふん、まあ良い。ならば犬にも俺と同じ豪華な食事を与えよう」

「申し上げにくいのですが、この犬は野菜しか食べません。そこで將軍様のお食事の方を変えていただきたいのですが」

野菜しか食べないなんて変な犬だな、と独裁者は思いましたがダイエットのためなら仕方ありません。

「ふん、まあ良いだろう」

「ありがとうございます。では次に……」

科学者は言いました。

「ダイエット犬は一日二回の散歩が必要です。それも飼い主である將軍様自らに行っていていただきます」

「他の者ではだめなのか？」

「はい、そうしませんとダイエットパワーが激減いたします」

独裁者は内心、めんどくさいなあと感じましたがダイエットのためです。

そのことも了解しました。

「さて、最後に……実はこの犬、寂しがり屋で常に群れで行動しな

ければなりません。そこで、雄と雌のつがいで飼育していただきたいのですが」

「ふん、この際一匹も二匹も同じことだ。良いだろう」

こうしてとある国の独裁者は、科学者たちが連れてきたダイエツト犬を飼い始めたのでした。

すると、どうでしょう。

野菜しか食べないダイエツト犬と同じ食事を取り、毎日二回一緒に散歩しているうちに独裁者は見る見る痩せていきました。

素晴らしい効果です。

でも一つ困った事が……

実はこの二匹のダイエツト犬に子犬が生まれたことでした。

子犬たちはあつという間に大きくなり、次々に新たな子供をつくります。

わずか数年で100匹を超える群れになったのでした。

一人で面倒を見ていた独裁者もこれには遂にキレてしまいます。

「ええい、もう我慢ならんわ。この犬たちをどこか遠くに捨ててこい！」

「しかし將軍様、犬には帰巢本能がありますから……またすぐに戻ってきますよ？」

「ならば、絶対に戻れない宇宙にでも捨ててこい！」

「ははっ」

こうして……とある独裁者が治める国では宇宙開発が始まりました。

このお話は、北の將軍様が激やせ！ 及び謎の飛翔体が日本上空を通過！ という驚くべき報道がなされる一年前のこと……

第十三話 変身

なんてことだ！

俺はいつたいたいどうしたというのだ？

つい先日まで緑色のベッドの上でゴロゴロ、ゴロゴロ、ゴロゴロ、食っちゃ寝、食っちゃ寝を繰り返していたというのに……

なぜか今、体がまったく動かないのだ。

いつからこうなったんだろう？

うーん、記憶にない。

気がついたら、首も動かせない金縛り状態。

訳が分からないよ。

まるで体の周りをぐるぐる巻きにされているみたい。

俺はどうなってしまったんだ？

いや、動けないだけじゃない。

なんだか、体も変なんだ。

食っちゃ寝の繰り返しでぶくぶくに太っていた俺なのに……ちょっとスリムになった気がする。

体中が節くれだち背中からは何やら奇妙なものも生えていた。

なんだこれは？

気持ち悪い！

俺はめまいがしてきた。

だが、その時。

ちよつと、ご近所さんであるあぶら虫君が固まった俺の所にやってきてこう言ったのだ。

「やあ、ついに君も変身する日がきたんだね」

「変身？」

「そう、変身さ。キャベツ畑に住む君たち芋虫は時間が経つと変身するんだ。別の言い方をすれば大人になるってことかな」

「あ、あぶら虫君。俺はどんなものに変身するんだい？」

「知らないの？ 芋虫はまずさなぎに変身し、その後蝶々になるもんなんだ。君の場合は美しいあのモンシロ蝶さ」

俺は驚いた。

芋虫の俺があひらひら空を舞う美しい蝶の子供だなんて……

「さあ君、いよいよさなぎから蝶に変身するみたいだよ！」

あぶら虫君が叫んだ。

その瞬間、俺は金縛りから抜け出し全身を外気にさらしていた。体が軽い。背中をパタパタさせるとふんわり宙に浮く。

おお、これが変身か…… すごい格好良いよ！

「やあ、うらやましいなあ。美しく変身した君はあの人間たちだって可愛がってくれるんだよ」

「ええっ、人間たちが？」

あぶら虫君のこの言葉に俺は驚いた。

なぜって…… 時々キャベツ畑にやってくる人間たちは、俺たちを見つけるとすぐにその大きな手で握りつぶしてしまうからなんだ。

時には殺虫剤を撒き散らし、挙げ句の果てには俺たちの寝床&えさ場であるキャベツを取っていつてしまう。

まさに天敵。

その人間がまさか？

すると……

「あっ、ちょうど人間の女の子が来たみたいだよ。嘘だと思っんなら飛んで行って確かめておいでよ」

「う、うん」

俺はあぶら虫君に言われた通り人間の女の子の鼻先にまで飛んで行った。

「やあ、元気？」

言葉が通じない事は承知してたが、精一杯の笑顔で俺は挨拶をした。

すると女の子は手をあげてこう言ったんだ。

「嫌だ、蛾！」

女の子は上げた手を思いっきり俺に向けて振り落した。
全身を強打され地面に落ちた俺は思った。

「ちよっ、蛾じゃなくて蝶……」

第十四話 病魔

別れたとはいえ、昔の女房に男ができれば流石に焦るもんだ。

自分はそれほど嫉妬深くはないと思っていたが、目の前に突きつけられたこの現実には参ってしまう。

私と向かい合わせに座る妻と男。

どうやらまだ若い。

私と妻は同じ年だから、親子ほども年が離れているに違いない。

若いツバメというやつか……

「元気にしてた？」

朗らかに笑いながら妻が聞く。

私は軽く頷くことで答えとした。

だが、内心は腹が煮えくり返る思いである。

病気になった自分を捨て、男とよろしくやっておきながら元気にしてた？ はないだろう。

ここは病院の待合室であり、私は入院患者としてもう5年も閉じ込められている。

まあ、別れた後月に一度は見舞いに来てくれるのだから、ありがたいと思わねばならないのだろう。

しかし、よりによって男を伴ってとは……皮肉もいいところ。

私は怒りの衝動を抑えながら、できるだけ平静を装いこつ尋ねた。

「ところで、こちらの彼は？」

この私の言葉を聞くや否や、若い男の顔は強張り、妻の瞳は哀れみの色に覆われていった。

ああ、どうやら間違いないらしいな。

新しい男か……

だが、妻の答えは意外にもこうだった。

「何言ってるのよあなた。賢治君じゃない!」

さも私が彼を知っているかのような言いまわし。

私は改めて男を見た。

病気のせいだろうか……最近記憶に混乱がありますね、と医者には言われた事がある。

でも、それは先生の勘違いだ。

私の頭は今も昔もハッキリしている。

断言しよう、こんな奴見たことも聞いたこともない。

妻は嘘をついているのだ。

それとも私をからかっているのか?

それならば……この茶番につきあつてやろうじゃないか!

私は腹をくくった。

「ああ、思い出したよ。賢治君だったな。どうだ元気にしてたかい?」

私の言葉に若い男は安堵の笑みを浮かべて大きく一つ頷いた。

ふん、こうして見れば可愛いじゃないか。

どことなく若い頃の私に似ている。

妻の男を選ぶセンスも、まだまだ捨てたもんじゃないという事か。

一方、妻は相変わらず悲しげな表情。

昔の夫に新しい男を見せるといふ行為に、幾分かでも罪悪感を感じているかのようだ。

優しいところもあるじゃないか。

少し見直した。

まあ、いい。

治る見込みのない私よりも、新しい男と添い遂げる。

諦めがついた私は、それから小一時間ほど昔の妻と新しい男の三人で楽しい会話を繰り広げた。

あつという間に時は過ぎ……

「じゃあ、また来月来るわね」

「おお」

「僕もまた一緒に来るよ」

「……そうか」

こうして妻と男は去っていった。

「ねえ、母さん。父さんだいぶん良くなっただんじゃない？」

「逆よ。もうあなたのこと覚えてないみたいだったわ。怖いわねえ、アルツハイマーって……」

第十五話 迷子

「これはまだオフレコにしてほしいんだがね……実はうちの病院で脳の移植手術が成功したんだよ」

知り合いの病院長からこう切り出されては、私もジャーナリストの端くれとして関心を持たざるをえなかった。

ここは東杏大学病院の院長室。

私はそこで革張りの高価なソファーに院長と向かい合って座っている。

「ほほう、ついに成功しましたか！ おめでとうございます先生」
脳の移植……それは長年にわたる人類の夢。

何故かって？

何故ならこれは人に永遠の命を約束する医療だからだ。

老化した臓器を新しいものに取り替える……ただそれだけで人はずっと生きていける。

だが、科学の進歩が目覚ましい21世紀末のこの時代に至っても脳の移植だけはどうしても難しかった。

それはあまりにも複雑でデリケートな器官。いまだ神の領域なのである。

それなのに今……不可能とされていた技術が遂に完成したと彼は言うのだ。

私は興奮して叫んだ。

「いやあ、凄いですよ先生！ 欧米やインド中国を差し置いての快挙ですね」

このビッグニュースを発表すれば、間違いなく世界は震撼する。今年のノーベル賞はいただきだ。

私は立ち上がると椅子に掛けてあった背広の上着を取り上げた。

「さっそく記事を書かせていただきますよ院長先生！」

こんな素晴らしいニュースを報道できるなんて、マスコミ関係者

として僥倖である。

格好の良い見出しの言葉は何がいいかしら？

そんな事を脳裏に浮かべながら、私は数歩進む。

だが、その時であった。

「オフレコだと言ったろう？」

意外な言葉が投げかけられた。

そう言えば開口一番、院長がそう言ったような気もする。

だが、何故？

「問題が発生したのだよ。だからその問題が片づくまではオフレコで頼む」

「問題？」

私はソファーに座り直すと怪訝な顔で尋ねた。

「いったいどんな問題が生じたんです？」

「心の迷子だよ」

院長は苦々しく答えた。

「つまり人格が変わってしまったのだ。もちろん、脳を移植するんだから我々も細心の注意を払ったさ。移植する脳は最新技術で元の持ち主の記憶をいっさい消し、新しい持ち主のあらゆる情報を書き加えている。だが……残念なことに移植した脳には、全く別の心が生まれてしまったようなんだよ」

「ほう、不思議ですね」

院長に詳しい話を聞くと……移植された脳の元の持ち主は普通のサラリーマンで、新しい持ち主は金持ちのドラ息子らしい。

では新たに生まれた人格とはいったい？

院長は言った。

「どうやら新進気鋭のジャーナリスト気取りらしいな。つまり君だよ……」

第十六話 好物

これを罪と呼びたければ呼ぶがよい。
私はまったく後悔していないのだから……

ことの発端はこうである。

家族団らん中の日曜日の夕方。
まず義理の母がこう言った。

「はあ、たまにはお好みが好き食べたいなあ」

「それ、ええやん。うちもばあちゃんに賛成」
すかさず娘も同意する。

「せやなあ。俺も、もうずいぶん食ってへんわ」
夫もどこか嬉しそう。

私も異存などあるはずなかった。

「分かりました。じゃあ夕飯はお好み焼きにしましょう」
「やったー！」

家族の声援に見送られ私は準備を始めた。

関西の家に嫁いで10年。

私もお好み焼きの一つや二つ、簡単に作れるようになっていた。
私は東京生まれの東京育ち。

小麦粉文化とは程遠い家庭で育ったのだが、10年間の関西在住
で生地に山芋を練り込むという高度な技まで取得していた。

私は手際良くお好み焼きを焼いていく。
うーん、いい感じだ。

これなら生粋の関西人である義母も文句はないだろう。
すると案の定……

「あら、いい匂いやねえ。あんさん、腕を上げましたなあ」

義母が鼻の穴を膨らませて満足そうにキッチンに近づいてきた。

「たまらんなあ。このソースの焼ける香り」

6歳になる娘の溲はお好み焼きが大好物。

義母と同様、匂いにつられてやってくる。

「うふふ、もう二人とも食いしん坊なんだから。じゃあ、少し早いけど食べちゃいましょうか。溲、お父さん呼んできて」

「俺ならここにおるで」

呆れた事に夫までキッチンにやってきていた。

やれやれ、いつもは呼んでもなかなか来ないのに……みんなそこまでお好み焼きが好きなんだ。

二つのフライパンを使って焼き上げた4つのお好み焼きを、私はそれぞれの皿に取り分ける。

山芋にキャベツにタコ、イカ、豚肉も入った豪華なお好み焼きだ。これだけじゃ寂しいのでマカロニサラダとコーンスープも添える。これで完璧。さあ、いただきましょう。

私はキッチンの椅子に座り手を合わせた。すると、その時だった……

義母がポツリと呟いたのだ。

「なんや、米はないんか？」

「う、嘘やん、お母はんご飯は？」

すぐさま娘も文句を言う。

「えっ、ご飯？……そ、そうか。関西人ってお好み焼きをご飯といっしょに食べるんだっけ？」

しまったなあ。久しぶりだったから忘れていた。後悔したがもう遅い。

「ふん、しょうもなし！」

いつもは優しい夫の冷たい一言。

そして、家族の冷たい視線。

私は下唇を噛んだ。

炭水化物を炭水化物で食べるなんて……

いまだに納得できないわ。

あれから3日。家族はいまだに口をきいてくれない。

でも、私は悪くないんだからね！

第十七話 世襲

世襲制度特別法が制定されてからというもの、世の中は何だか穏やかに変わった気がする。

そりゃあ昔はねえ、やれ国会議員の二世はズルイだの、歌舞伎の世界は閉鎖的だの世論は世襲制度に批判的でしたよ。

でも実際にこの法律ができてからは、ずいぶん平和になったと思うんです。

まず無用な競争が無くなりましたね。

私立幼稚園のお受験とか有名大学の受験戦争なんかはもう過去の遺物。

だってどんなに勉強したって医者の子しか医者になれないし、大工の子は大工になるしかないんですから。

だから自分の将来に必要な勉強をする理由はどこにもないんですよ。

不必要な競争原理から解放されて、あくせくする必要もなく伸び伸びと成長できる子供たち。

実に素晴らしいじゃありませんか。

幾分、アイロニカルな視点になりますが……

江戸時代が300年もの間、平和を保てたのはまさにこの世襲制度のおかげなんですよね。

武士は武士、農民は農民。

これが無用の争いを避ける最良の取り決めなんですよ。

私はこの法律は、現在の平和な日本国のために必要だったと思いますね。

それから……

この制度ができて良かったと思う別の理由は父権の再生でしょうか。

父親（もしくは母親）の職業を息子が継ぐ。
つまり父（もしくは母）と子が親方と弟子の関係になるわけです。
そりゃあ、親の威厳は向上しますよ。

サラリーマンの息子とかなら、まだいいんですけどね。
別に親に教えを請わなくても、サラリーマンなら普通に学校行つてれば簡単になれますから。

でもねえ、大工とか左官とか技術職系の親を持つと大変です。
普通に学校行つてるだけじゃ絶対になれません。
やはり親方、つまり親に聞くしかないわけです。

そこでもし、子供がオヤジ（またはオフクロ）の機嫌を損ねようものなら……

もう絶対に教えてやらん！ ってことにもなりかねません。
そうなると子供は困りますよう。

その時点で将来プー太郎になることが決定するわけですからね。
もう、ごますりにみんな必死。

こうして、親の命令に絶対服従という古き良き日本の伝統家族（いわゆる父権）が再生されるというわけです。

ただ困るのは……

うちの場合みたいに親が特殊な職業をしてる場合ですな。
何せうちのオヤジは世界中を飛び回っててめったに会えませんし、
近寄るとすごく怒るんですよ。

この間なんか、うっかり後ろに立っただけで殴られちゃいましたから。

それに無口ですしねえ……どうやってオヤジの技術を盗めばいいのを見当もつきません。

えっ、オヤジの職業ですか？

殺し屋です。

名前はゴル……って、おや？

誰か来たようだな……

第十八話 落胤

彼女は恋をしていたのです。

ただ彼女の場合、その恋は許されざるものでした。

まるでロミオとジュリエットのように禁じられた恋。

それゆえに甘く切ない究極のラブだったのです。

さて、彼女の名前をまずお知らせせねばなりませんまい。

ソフィア。

それが彼女の名。

そしてこの国の王女でございました。　まだ18歳のうら若き乙女。

年の離れた国王に見初められ、半ば無理矢理に正妻とされてからもう2年になります。

あの日……彼女はお城の中で一人の男に出会いました。

名はゴドフリー。

勇敢でたくましい若者。

代々続く貴族の出身で王家に忠実なる騎士。

彼女が正妻として来る前までは、国王のお気に入りでした。うお城に入り浸っていたと聞きます。

ソフィアはそのゴドフリーを一目見ただけで、恋に落ちてしまったのです。

しかし彼女は老いたとはいえ夫ある身。

ですからこれは禁じられた恋でした。

でも、火照る体を持て余した若いソフィアにとって、ゴドフリーという若者は看過できない異性だったのでございます。

ソフィアはこっそりゴドフリーを呼び出して言いました。

「わたくし、あなたのことが好きになりましたよゴドフリー」

「あ、ありがたき幸せにございます。しかし……」

「今晚、10時にわたくしの部屋に来てちょうだい」

「えっ？ でも国王様が……」

「大丈夫。あのお爺ちゃんは8時には寝てしまいますから」

「は、はあ」

「約束よ」

こうしてソフィアは愛するゴドフリーと密会の約束をしてしまったのです。

さて、約束の時間になりました。

扉をノックする音がします。

ゴン、ゴン、ゴン。

「お入りなさい」

ドキドキしながらソフィアが言いました。

しかし返事はありません。

その代わりまたノックの音。

ゴン、ゴン、ゴン。

「お入りなさい！」

今度は少し大きな声で言いました。

けどやっぱり返事はありません。

その代わりまたまた扉をノックする音。

今度はかなり力を込めて……

ゴン、ゴン、ゴン、ゴン！

「ちよっ、ちよっとゴドフリー。力を入れすぎよ」

慌ててソフィアは扉に駆け寄ります。

「まったく耳が遠いんだから。さあ、お入り……って、あれ？」

ソフィアは首をかしげました。

だつて扉が開かないのです。

まるで外から釘付けにされたみたいに……

すると突然、扉の向こうからゴドフリーの冷たい声が響きました。「王女ソフィア。あなたは姦通未遂の疑いで監禁刑に処せられました……ちなみに私は国王陛下の落胤です。公にはしてないが心から父を愛している。陛下を裏切る者は絶対にゆるせない！ この淫売婦め、一生この部屋で反省するがいい」

第十九話 赤線

「なあ、かあちゃん、僕どうしても欲しいんや」

健太はいつもそう言っつて母親を困らせていた。

「なあ頼むわ、かあちゃん買ってえなあ」

「あかん、双眼鏡やなんて……高すぎやわ」

健太の母親は怒ったような、それでいて少し悲しそうな顔をして言った。

「うちとこ貧乏や」

夫を事故で亡くし、女手一つで子育てしていかなければならぬ彼女にとつて金銭的なゆとりはない。

もちろん、できる事なら買ってあげたいと思う。

されど、ようやくありついた掃除婦の給金ではとてもじゃないが高価な双眼鏡など夢のまた夢。

もっと割の良い仕事もあるにはあるが、しかし……

母親は健太に尋ねた。

「あんた、なんでそんなに双眼鏡なんか欲しいねん？」

「あんな、僕、衛星が見たいねん」

「衛星？」

「そう、スプートニクや」

「あのけつたいな飛行機もどきか？」

「飛行機ちゃう。衛星や」

そう言えばニューズでやってた。

ソ連が人類初の人工衛星を打ち上げたとか……健太はそんな賢そうなものに興味があるのか。

意外ではあったが、なんだか少し嬉しくもある。

ひよつとしたらこの子は偉い学者になるのかもしれない。
そんな気がした。

彼女は子供のころ、家庭の事情でまともな教育を受けられなかつた。

それだけに息子には思いっきり勉強させてあげたいと思っている。
たとえこの身をすり減らして働いたとしても……

彼女は決心した。

「よつしゃ、ええで」

「ほ、ほんま？」

「ほんまや。そのかわり、ちゃんと勉強頑張るんやで」

「うん！」

健太が真新しい双眼鏡を手にしたのはそれから三日後のことだつた。

あたりが薄暗くなると、さっそく近所の小高い丘へと出かけた。
少しでも宇宙に近い方が衛星がよく見えるだろうと考えてのこと。
母親は一昨日から残業するようになった。それで健太は一人で行けた。

その日は生憎の曇り空。スプートニクどころか星さえ見えなかつた。

残念だが仕方ない。

「ほな、あそこ見たるか」

健太にはもう一つ見てみたい場所があった。

それは赤線と呼ばれる所。

学校の先生からは絶対に近寄っちゃいけないと言われていた謎の街である。

好奇心にかられた少年は、小高い丘の上から赤線の街を覗き見た。

「すげー、よう見えらあ」

ピカピカの双眼鏡から見えてきた景色で、少年は全てを悟ることができた。

(ふーん、そういう所なんかあ。なんやがっかりや)

小学三年生の健太にはあまり興味のない街であった。

人工衛星の方が百倍楽しいと思う。

翌日、健太は何の気なしに先生に言った。

「あんな、先生、僕、赤線ってどんな場所か分かってしもたわ」

すると教師は少し顔を赤らめながらこう言った。

「そうか、おかあちゃんから聞いたか……頼むからこのことはみんなには内緒やで。俺も内緒にしとくから……あつ、それからな健太、おかあちゃんに伝えといてくれ。昨日はとても良かったです。またお願いしますってな」

第十九話 赤線（後書き）

赤線とは政府公認の娼婦街。ちなみに非公認のそれは青線と呼ばれたらしいです。どちらも昔の話ですが……

第二十話 犯人

警視庁捜査一課の首藤浩二しゅとうこうじ警部が殺人事件の現場に到着したのは、5月も半ばを過ぎた暑い昼下がりのことだった。

「こりゃあ、酷いな」

扇子でパタパタと顔を扇ぎながら首藤は思わず唸った。
無理もない。

そこには顔を何度も強打された無惨な男の亡骸があつたからだ。
仏の名は尾礼賀おれいがよしと義人、24歳。
無職の遊び人らしい。若い頃は陸上の選手だったらしいが、今では立派なロクデナシ。

まあ、生前はどうあれ死んでしまえばみな仏だ。首藤は両手を合わせしばし黙祷する。
すると……

「失礼します警部。第一発見者をお連れしました」
制服姿の巡査があばた面の若い男を伴ってやってきた。
名前は尾礼賀おれいがほんと犯人、年は24。
なんと被害者とは双子の弟だという。
一流大卒のエリート銀行マンだ。

「ちくしょう、誰が兄貴にこんな事を……」

「心当たりはありませんか？」

「もしかしたらという奴はいる」

「ほう、それは？」

「兄貴は金遣いが荒くてサラ金に手を出していたんだ……街金融の
榊原さかきばらという奴が怪しいな」

「ふーん、なるほどね」

首藤はうなずいた。

「さっそく調べてみましょう。ところで尾礼賀さん、これに写っているのはあなたとお兄さんですか？」

首藤がそう言っ指差したのはタンスの上にある写真立て。

仲が良さそうな二人の少年が、セピア色に写し出されていた。

「ああ、そうだ……あの頃はまだこんな笑顔ができたんだよなあ」
尾礼賀がぼつりと呟く。

それを首藤は聞き逃さなかった。

「ほう、つまり最近はあまり笑顔は無かった。つまり仲が悪かったんですね？」

「ま、まあ、そうだ」

「お気持ちは分かりますよ。あなたのお兄さんはどうみてもクズ。最低の人間ですからね」

「えっ？」

「まあ、こんな奴と身内だなんて、あなたもずいぶん恥ずかしい思いをしたことでしょうな」

「お、おい……」

「隠さなくつても大丈夫。むしろ同情してるんです。こんな馬鹿と兄弟だなんて本当に可哀想だ」

「だ、誰が馬鹿だ！」

「いやいや、あなたじゃなくてあなたのお兄さんの話」

「あ、いや、確かにそうだけど、ちよつと言い過ぎだぜ刑事さんよ。

俺……じゃなくて兄貴は良いところもいっぱいあった」

「へえ、そうですか」

力説する尾礼賀犯人に生返事で答える首藤警部。

正直、どうでも良かった。

いい加減にこの茶番を終わらせよう。

彼は言った。

「ところで、今日のトピックス（東証株価指数、TOPIXのこと）はいかほどでしたか？」

「えっ、ドーピング？」

この答えで首藤は確信した。

「おい巡査。こいつが殺人犯だ！ ついでに言えばこいつは尾礼賀おれいが犯人はんとじゃなくて義人よしひと、双子の兄貴の方だ。借金で首が回らなくなつたから、出来の良い弟とすり替わろうと考えたんだろう……捕まえて留置場にぶち込んだけ」

「な、なぜ分かった？」

「分らないでか、この馬鹿！」

第二十一話 弱肉

密猟者の男二人が貴重な動物たちを乗せた船もろとも大嵐にあい、あえなく難破してしまいました。

幸い近くに無人島があり、二人は捕まえた動物たちと一緒になんとか泳ぎ着くことができました。

島には飲み水になりそうな泉や美味しそうな果物がたくさん自生しています。

これなら何日でも生きていけそう。

二人はほっとしてここで救助を待つことにしました。

さて難破して二日たち、三日がたち、あっという間に四日がたちました。

されど救助どころか漁船すら通りません。

二人はさらに待ちました。

五日たち六日たち七日がたちました。

でもやっぱり助けはきません。

こうなると問題になるのが……

そう、性欲です。

二人はまだ若くあちらの方も現役バリバリ。

遂に我慢できなくなった二人はあることを決めたのです。

それは……どちらかが女役になり性的欲求を満たそうというもの。

でもこんな時……

女役になるのはたいてい弱い方なんですよね。

この二人も例外ではなく、喧嘩して負けた男が哀れ無理やりやられてしまったのです。

「こ、こんな屈辱には耐えられない!」

レイプされてしまった男は思い悩み遂には自殺してしまいました。立場が逆なら自分だってそうしたでしょうに……人間とは罪深い生き物です。

しかし、神様は寛大なお方でした。

なんと死んだ男を天国に招待してくださったのですから……

さて、男は今天国の前で待たされています。

そこで、門を守る天使がこう言いました。

「しばし待たれよ。すぐにあなたと同じ境遇の男が来る。二人そろって天国に入るがよい」

「はい、もちろん。喜んで待たせていただきます」

するとしばらくして遠くの方から雲の上を歩いてくる人影が見えてきました。

男はどこかで見覚えがあるなと感じます。

さらによくよく観察してみると……

なんとそれは自分をレイプした相手ではありませんか！

男は叫びました。

「な、なんでこんな奴を天国に行かせるのですか？」

男の問いかけに天使が答えました。

「あなたが自殺してからというもの、彼は毎日苦しんできました。そして遂にあなたを追って自殺してしまっただのです。あなたの怒りも分かりますが、彼の苦しみも分かっています。あなたを怒り

「えっ……では私をレイプしたことを後悔して？ けっこういい奴ですね」

しかし、男の言葉に天使は首を振りました。

「そうではない。実はな……」

天使は続けます。

「あなたたちが密猟したあの野生動物、確かマウンテンゴリラでしたね。あれ、全て雄だったでしょう？ 困った事に彼らもあなた方同様、性欲が抑えきれなくなったようなんですよ。そして遂に雄同士でやるうということになったのですが、こういう時って弱い者が女役になるんですよ。あの島であなたの次に弱い雄は……あの彼だったのですよ」

男は小さくため息を吐くと言いました。

「本当に神様はお優しい方ですね」

第二十二話 言葉

「あつ、糞！」

「こら、フライメイ。糞なんて下品な言葉を使っちゃいけません。何度言えば分かるの？」

ママはいつもそう言ってフライメイを叱ります。

でも、まだ小さなフライメイにはどうして悪いのか分かりません。「ねえ、どうして汚い言葉を使っちゃいけないのママ？ ビッチお兄ちゃんもサノバお姉ちゃんもよく言ってるよ」

ビッチもサノバも近所に住むフライメイより少し年長の子供たちです。

どうやらフライメイに汚い言葉を教えているのは彼らみたい。

「まったくあの子たちときたら……こんどホールとアスに言っとなきゃ」

ママはビッチのママ（ホール）とサノバのママ（アス）に、自分の子供たちをしっかりと躾るようにきつく言っておこうと心に決めました。

でも、今大切なのは我が子の教育です。

「いいことフライメイ。よその子供たちが何を言おうと、あなたは汚い言葉を使っちゃ駄目」

「だから、なんでさ？」

フライメイにはやっぱり分かりません。

ママは言いました。

「汚い言葉を使うとね、心まで汚くなってしまふからよ」

「心まで？」

「ええ」

「嘘だあ」

フライメイは笑います。

「だって言葉は口から出てくるんだよ？ 心は胸にあるんでしょ？」

「じゃあ、やつぱり嘘だ。口と胸は全然ちがうもん！」

「あら、そうかしら？」

ママはフライメイを諭すように言いました。

「じゃあ……あなたは頭だけビッチちゃんの家に行き、その他の体はサノバちゃんの家に行けるの？」

「そ、そんなのは無理だよ。僕死んじやう」

フライメイの返事にママは満足します。

「そう、体はつながっているから無理よね。だったら、あなたの口が汚い言葉を使ってるのに、あなたの心は関係ないと言えるかしら？」

「うーん、そっか」

「分かってくれた？」

「うん、よく分かったよ。これからは汚い言葉は使わないようにする」

「まあ、フライメイ。ママは嬉しいわ」

二人はしっかりと抱きしめあい親子の絆は深まったのでした。

しかし、フライメイには気になることがあります。

これはどうしても聞いておかなければなりません。

フライメイは言いました。

「それじゃあさ、ママ。糞って言葉を使っちゃいけないんだったら……これから僕は餌を見つけた時、なんて言ってママに教えたらいいんだろっ？」

「えっ、ひよっとして糞を見つけたのフライメイ？」

「うん、あそ」

そこにはできたてほやほやの人間の野糞が……

「まあ、素敵。良い子ねフライメイ。こういう時は糞って言葉を使ってもいいのよ」

「うん、分かった」

こうしてフライメイとママは、人間の糞を目指して飛んでいきましたとさ。

これは、蠅の親子のお話です。

第二十三話 嫉妬

木の棒をぐるぐる回す珍しい月の輪熊がいるというのでやって来たのだが、柵の前には僕と彼女の二人だけしかいなかった。

テレビであれほど取り上げられていたのに、これはどうしたことだろう。

僕たちは近くを通りかかった飼育員のおじさんに聞いてみることにした。

「そりゃあ、タケシのせいですよ」

「タケシ？」

「ああ、こいつのことね」

飼育員は熊を指差した。

「月の輪熊のタケシ。こいつが悪いんです」

「というと、何かしでかしたんですか？」

「しでかしたんじゃないくて、しでかさなかつたわけなんですわ」

おじさんはニヤリと笑うとタケシの方を見た。

「ほら、あんた方もわかるでしょう。あいつ、じつとこつちを睨んでる」

「わあ、本当だあ。かわいい！」

彼女が歓喜の声を上げた。

いつも思うのだが、女性の美的感覚にはついて行けない所がある。かわいいだって？

僕が見た熊の視線は、なんだかひどく恐ろしく感じられた。

「へえ、あれがかわいいとは……お嬢さんいい度胸してるね」

どうやら飼育員も僕とおんなじ意見だったようで、彼女の発言に目を丸くしていた。

「あら、かわいいですよ。ほら、今もこつちを見た！」

彼女は僕の腕にしがみついて、かわいいを連発する。

「ねえ、ちゃんと見てる？　かわいいわよね？」

「あ、ああ、かわいいね」

だが、どう見ても熊は不機嫌そうに僕たちを睨んでいる気がしてならない。

木の棒を回すところではない。

「わははは、こりゃあタケシのやつ久しぶりにカンカンだな」

「カンカン？」

相変わらず訳が分からない様子の彼女。本当、女性は鈍いよ。

すると飼育員がようやく僕の最初の質問、すなわち何故木の棒を回さなくなったのか教えてくれた。

「嫉妬してるんですよ、あいつ」

「嫉妬……ですか？」

「そう、嫉妬。ほら動物園ってけっこうカップルが多いでしょ。あいつそれが気に入らないみたいなんです。あいつ独身だから。それで自分の前にカップルがいると絶対に棒を回わさないんだ。回すとお客さんが喜ぶの分かっているからね」

「へえ、そうなんですか」

「だからカップルじゃない客、例えば小さい子供連れなんかには見せてくれるんだけどね」

飼育員はそう言つとまた仕事に戻っていった。

なるほど、それで客が少ないんだ。

僕はようやく納得する。

彼女は少しがっかりしてたけど「じゃあ来年は子供連れで来ようか」と照れながら言った。

僕たちはもうすぐ結婚する。

「ああ、そうだね」

僕も少し照れくさそうに返事をした。

「じゃあ、次の動物を見に行こう」

「そうね。今度はヤキモ子焼きじゃない動物がいいわね」

「君みたいに？」

「あら、知らないの？ 世界で一番ヤキモ子焼きな動物は私。浮気

なんかしたら許さないんだからね」

「き、気をつけるよ」

僕たちは歩き始めた。

第二十四話 女房

お前の奥さんは本当に美人だなあ、とみんなが誉めてくれるのがなんだか嬉しくて、僕はこの悪循環から抜け出せないでいた。

僕の名前は尾藤豊。

都内のコンビニでバイトしているうだつの上がないフリーターだ。

今年で35歳。

フリーターで女房を養っていけるのかって？

そりゃあ無理だ。

だから今、彼女にアルバイトをしてもらっている。

どんなバイトかっていうと……大変言いにくいんだが、女房のレンタルってやつだ。

一日二万円で友達に貸している。

おっと、勘違いしないでくれよ。

レンタルって言っても売春じゃあない。

れっきとした人助け。

なんかのパーティーとかダブルデートとかで、自分の奥さんやガールフレンドを連れていくくんじゃ見栄えがよくないってことあるじゃない？

ここは美人の代役でもたてたいところだつて時。

(まあ、うちみたいに美人の奥さんがいれば別だがね……)

そんな連中に僕は自慢の女房を貸しているというわけ。

まあ、女房ばかり働かせて自分はフリーターで暇なときは日がな一日遊んでいるんだから気は引けるのだが……

でも彼女にもバイト代はあげているし費用はもちろん向こう持ち。結構、いい飯もおごってもらってるようで彼女も満足していた。

そんな僕たちの生活に異変が生じたのは、僕の両親が自殺をしてからだった。

けっこうな金持ちで不自由なく暮らしているものとばかりに思っていたのに……いったい何故？

不振に思つて調べてみると、なんとあれほどあつた財産がまるで無いのだ。

遺産に期待していた僕は拍子抜けをしてしまった。

両親の遺言には一言「豊、すまん」とだけ。

まあ、遺産が無いのはがっかりだが……僕の方こそすまない気持ちでいっばいである。

こんな事ならばやく孫を見せてあげたかつたよとつくづく思う。女房がまだ早いというから我慢してたんだが……

そんな彼女も僕の両親が死んでからというものかなりシヨクだったようで食事もなくに取らない有り様である。

女房は早くに両親を亡くしたそうで、僕の両親を実の親のように慕つてしょっちゅう遊びに行っていたから悲しみもひとしおだろう。そもそも、彼女を紹介してくれたのは両親だ。僕の知らない所でつながりがあったようである。

さて、葬式も終わりホツと家でくつろいでいたら女房が自分の部屋から出てきた。

それも大きな旅行鞆を持って。

僕は慌てて聞いた。

「お、おい、どこに行くんだ？」

「はい、雇い主が死んじゃったんで……もう家に帰ります」

「雇い主？」

「ええ、あなたのご両親よ。私、一日四万円でレンタルされてたの

……」

第二十五話 日記

7月17日、今日から夏休みだ。

ウチはお母はんとお父はんとお姉ちゃんの三人で、近所にある神社のお祭りに行ってきた。そこで金魚すくいをした。変な色の金魚をすくった。飼ってもいいってお父はんが言ってくれた。名前はポニヨにした。だってポニヨに似てるから。夏休みの自由研究にポニヨの観察日記をつけたらとお母はんが言うからつけることにした。これから大変だ。

7月25日、ポニヨは金魚のくせによく食べる。今日はホルモン焼きを食べていた。明日はお好み焼きも食べさせてみよう。「なんでこんなに食べるんだろう。ひよっとして……」と、お父はんが首をひねっていた。

7月30日、今日は登校日だった。ポニヨの体が最初の三倍くらいになった。よく食べるから仕方がない。もう金魚じゃなくて鯉みたいだ。水槽からお庭の池に移してあげたら喜んでいた。お母はんが不安そうな顔をしていた。

8月6日、今日は広島に原爆が落とされた日。ポニヨに足が生えてきた。お父はんは不安そうな顔で「た、多分ポニヨは金魚じゃなくて大きなカエルの子供だったんだ」と言っていた。お母はんはため息をついていた。

8月9日、今日は長崎に原爆が落とされた日。ポニヨに手が生えた。最近の水の上によく顔を出してパクパクしている。何か言いたいみたいだ。そんなポニヨを見てお母はんがまたため息をついた。

8月15日、今日は終戦記念日。ポニヨがしゃべった。「ウチは約束通りアンタらの所に来た娘や。可愛がってえな」と言っていた。お父はんが「やっぱりこうなったか」と言った。お母はんは「またですか」と言っていた。ポニヨは池から出されてウチとお姉ちゃんがいる部屋で一緒に暮らすことになった。部屋がちよつと魚くさくになった。

8月31日、今日で夏休みも終わり。ポニヨが正式に家族になったそうだ。女の子だからウチの妹になる。「役場に出生届を出してきた」とお父はんが言った。お母はんは「もう子供はたくさんですよ」とため息をついていた。「やっぱり三人は無理か……じゃあ上の方からやるかな」とお父はんがつぶやいていた。

9月1日、学校から帰るとポニヨの歓迎会が開かれた。豪華なお寿司だった。何のお魚かはお父はんもお母はんも教えてくれなかった。家族4人で食べた。なぜかお姉ちゃんはいなかった。食べながらポニヨが言った。「ウチ、金魚、飼いたい」ウチはポニヨのほっぺたを思い切りつねった。「あんた、ウチを殺す気か！」食事中、ずっと気まずい空気が漂っていた。

第二十六話 裁判

これより判決を言い渡す。

被告人は前へ。

そう、君だよ君。

ええつと、名前は……神だったね。

えっ、なに？

ニツクネームがあるからそっちで呼んでくれ？

めんどくせえなあ。

で、なによ？ 君のニツクネーム？

ヤ○ウエって言うのか。

よろしい、では被告人ヤハ○エ。

当裁判所は君が犯した数々の犯罪に死刑を宣告することに決めた。
以上。

はあ？

不当判決？

やれやれ、困ったなあ。君はまだ自分がしでかした罪の重さに気づいておらんのか。

よろしい、では私が詳しく説明してあげよう。

まずは……殺人罪から。

君は最初の人間アダムとイヴが、君の庭で作ってたリンゴを食べたというだけの理由でかつとなつて殺したね？

本当に酷いよなあ。彼らは生まれたばかりだったんだよ？

まあ、同情の余地なく死刑だね。

さてと……次なる君の罪は内乱罪だな。

君は昔、エジプトという国に10の禍わざわいと称した犯罪行為をしたね？

最終的にエジプト人の長子を全て殺害し、国内を大混乱に貶めた。君、これは立派なテロすなわち内乱罪だよ。これも立派な死刑相当の罪だね。

ええつと次は……そうそう放火だったな。

君、ソドムとゴモラって街を焼いたでしょ？

理由は、街の住人が腐敗していたから。

分かりやすく言えば同性愛に耽っていたからってだけの理由。短絡的だよなあ。

じゃあさ、テレビでお馴染みのお〇ぎとピー〇はどうなるの？

春〇愛やイ〇コーはどうなのよ？

殺すの？ たったこれだけの理由で？

あのさあ君、性同一性障害って知ってる？

本当に酷いことするよねえ、まったく。これも死刑確定の罪だよ。

次……激発物破裂罪。

君、エリコの城壁を破壊したよね。

爆弾（もしくはそれに類する何か）で一夜にしてエリコを壊滅させたこと、ちゃんと聖書に書いてあるよ。

記録があるんだ。とぼけてもだめ。

はい、これも死刑相当の罪ね。

最後に……現住建造物等侵害罪について考えてみようか。

えっ、現住建造物等侵害罪ってどんな罪なのかよく分からない？

まあ、ようするに家を水浸しにする罪。

そんなことした記憶がない？

バカ言っちゃいかんよ。

ヤハ〇エ君、水で世界を滅ぼしたことあるでしょ？

ほら、ノアの大洪水。

ノアとその家族以外の全ての人類と、わずかな例をのぞき世界中

の動植物も含めて皆殺しにしたじゃない。

ナチスのホロコーストなんか目じゃあないよ、これは。何か言い開きでもある？

ないよね。

はい、全部合わせて絶対死刑確定。

じゃあ、お疲れ様でした。

死刑の執行は来週の頭にでもやるんでよろしく。

こうして……神は死んだのである。

第二十七話 味噌

カオルが恋人……すなわち現在の配偶者であるアキラからつけたプロポーズの言葉は「三年は子供をつくらず二人だけの生活を目一杯楽しもう」というものだった。

この言葉どおりカオルとアキラは子供のいない生活を目一杯楽しみ、三年をとうに過ぎ五年目を迎えた今もまだ二人だけの暮らしを続けている。

そして今後も子供をつくる予定はない。

もちろん、つくれないんじゃない。

つくらないのだ。

理由はある。

ちよつとした夫婦の記念日に、10万円のワインを簡単に買って帰るアキラの経済力だ。

夫婦二人だけならかなり贅沢な暮らしができる。

その生活にカオルは満足していた。

だが、はたして子供ができたらどうなるだろう？

それが不安なのである。

年に一度は海外旅行（旅行会社の格安ツアーなどではなく行きたい所に行くスタイル）に行くし、国内旅行も年に二度行くゆとりがある。

食事はたいてい外食だ。

居酒屋やファミレスなんかもたまには行くが、高級なフレンチやイタリアンの店にもよく足を運ぶ。

掃除や洗濯は週に5日も来てくれる家政婦に任せっぱなし。

働いてもないくせに家事はほとんどしないカオル。

その代わりといっては語弊があるかもしれないが、習い事や趣味

に精を出す毎日。

我ながら怠け過ぎかなとも思うのだが……

「子供ができるまではこのままでいいよ」とアキラも言ってくれていることだし、カオルはこの気楽な生活を存分に楽しむつもりだった。

そんな二人だけの生活に、このたび終止符がうたれる。

それは、アキラの次の言葉から始まる驚天動地の知らせであった。

「ねえ、そろそろ子供欲しくない？」

はにかんだようなアキラの言葉。カオルは少し違和感を覚えた。

「い、いきなりどうしたの？」

「実はさ……」

「実は、なに？」

「実はさ、できちゃったみたい。赤ちゃん！」

「は、はあ？」

まさに寝耳に水の台詞。

いつなの？

気をつけて避妊してたのに。

戸惑う夫に妻はニコリと笑うところ言った。

「これからは私が主婦をするから、あなたが働いてちょうだいね」

「あ、ああ……」

やれやれ、パチンコや競馬に明け暮れた気楽なヒモ生活は終わったのだ。

これからは辛い毎日になる。

カオルはため息をついた。

しかし、それにしても……

「どうしたのよ、怪訝な顔して？」

「あ、いや、お前の名前さあ。アキラって男みたいだなんて思って
な」

「それを言うならあなたの名前、カオルだって女の子みたいじゃない
」

それがこの小説のミンなのである！

第二十八話 檸檬（前書き）

梶井基次郎の作品「檸檬」へのオマージュ。

第二十八話 檸檬

その日、私はいつになくその店で買物をした。
というのはその店には珍しいチャカ（ピストルのこと）が出ていたのだ。

チャカなど極くありふれている。がその店というのもみすぼらしくはないまでもただあたりまえの八百屋にすぎなかったもので、それまであまり見かけたことはなかった。

いったい私はあのチャカが好きだ。レモンエロウの絵具をチューブから搾り出して固めたようなあの単純な色も、それからあの丈の詰った紡錘形の恰好も。

——結局私はそれを一つだけ買うことにした。

何をつて？

もちろんチャカをである。

えっ、チャカ？

八百屋にチャカ……

おいおい、嘘だろう！

私は二度見して確認する。

間違いない、チャカだ。

大根や人参、アボカドやレタスなんかの野菜に混じって物静かに、
それでいて堂々とそれは鎮座していた。

ド派手な黄色の銃身をキラキラ光らせて……

私は手に取ったチャカを狐につままれたような気分で見つめる。

まさか、そんな馬鹿な。高校を中退してヤクザになったばかりの
私でも、現物を見るのは初めてだ。

私は恐る恐る店主に聞いた。

「おいオヤジ、なんだこれは？」

「へえ、今朝在庫したチャカでさあ」

「チャカって……チャカなんか売ってるんかよこの店？」

「へえ、八百屋ですから」

「八百屋ですから……普通チャカなぞ売らんだらう？」

「いやあ、たいていの八百屋は扱ってますよ」

「まさか！」

だが、チャカは厳然たる存在感を示しながら私の手のひらにある。その冷たさはたとえようもなく心地良く、握っている手のひらから身体にしみとおつていくように思えた。

その頃私は対立する暴力団組事務所へ単身襲撃せよと命じられていた事もあり、身体に熱が出ていたのかもしれない。

チャカの冷え冷えとした清涼感に不思議と心が満たされてきた。

終始私の心を押さえつけていた不吉な塊がそれを握った瞬間からいくらか弛んで来たとみえる。

あんなにしつこかった憂鬱が、そんなものの一顆で紛らされる――

―或いは不審なことが、逆説的な本当であった。

私は買ったばかりのチャカを持って店を出た。

どこをどう歩いたのだらう。

いつの間にか私は対立する暴力団組事務所の前にいた。

襲撃は組長から預かった長ドスを持って明後日にでもと考えていたが、せつかくチャカが手に入ったのだ。

善は急げ。

早鐘のようになる心臓を押さえ、私は殴り込みをかけることを決意する。

手には買ったばかりの黄色いチャカ。

私は組事務所の玄関扉を開けると叫んだ。

「○×組のもんじゃあ。貴様ら手を上げんかい！」

「な、なんやこいつ？ 檸檬なんか突きつけて……」

第二十八話 檸檬（後書き）

好きだなあ、梶井基次郎の檸檬……独特な美がある。

第二十九話 童貞

俺の所に突然やって来て「子供ができたから認知してよ」と騒ぐ女は、顔馴染みの小夜子だった。

近頃、ずっとこうなんだ。

何を馬鹿な事を……思わずため息がついて出る。

俺はまだ童貞なんだっての。

だが小夜子は聞いちゃいない。

やれ俺の両親に紹介しろだとか、やれ自分の両親にきちんと挨拶に来てだとか一人で騒いでやがる。

お前、俺の両親くらい知ってるだろうが！

家、隣なんだから。

それにお前の両親には毎朝挨拶してるよ！
隣なんだから。

しかし、俺はようやく理解した。

ああ、こいつ俺のこと好きだったんだ……

今更だがようやく気づく。

だけど、残念だ。俺にはもう好きな子がいる。

小夜子には申し訳ないけど、俺はキツパリと断ることにした。

「ごめんね、さよちゃん。ぼく、好きな女の子がいるんだ」

「ええ、そんなのいやだ。じゃあ、あたしたちの赤ちゃんはどうするの？」

「あのね、さよちゃん。手をつないだくらいじゃ赤ちゃんはできないんだよ。ママが言ってた。パパが言うには僕はまだ童貞だから大丈夫なんだって」

「あら、バカねえ。赤ちゃんはチューしたらできるのよー！」

「そ、そうなんだあ。だけど僕たちチューもしたことないよね？」

「ふふふ、この前保育園のお昼寝の時間にチューしたわ」

「ぼ、僕が寝てるあいだに？」

「ええ」

「そ、そんなあ、ひどいよ、さよちゃん」

「あたしより先に眠ったあなたが悪いのよ。さあ、チューして赤ちやんができた以上……あたしと結婚してもらおうよ！」

ああ、なんてこった。俺は5歳にして父親になるのか……
童貞だった頃が懐かしいぜ。

第三十話 聖母

とあるミッションスクールで、ウサギを飼おうという話が持ち上がった。

実は一人の児童の祖父母が田舎で沢山のウサギを飼育していたが、世話も大変で高齢ということもありそろそろ手放したいと願っているとのこと。

話を聞きつけた女校長が詳しく事情を尋ねてみると……引き取り手がいない場合は保健所で処分してもらうしかないという。

それは可哀想だと博愛に富む校長が同情し、児童の祖父母から沢山いるウサギのうち半分を引き取ることになったのだ。

それ以上は流石に多すぎて無理だったが、それでも20頭を超す群れである。

日曜日を利用して教師保護者双方が協力し、校庭の一角に大きなウサギ小屋を建てた。

あとはいよいよウサギを入れるだけなのだが……児童の保護者の一人がこんな事を言い出す。

「校長先生、20頭もいると来年は子供ができて4、50頭にはなりそうですな」

「えっ、そんなに増えますか？」

「増えますよ。奴らはけっこう子供産みますもん」

「だけど……これ以上は困ります」

「うーん、それじゃあ事情を話してメスばかりもらってきちゃあどうですか？ 流石にメスだけなら子供はできませんからな」

「それはグッドアイデアです！」

こうして、ミッションスクールにメスばかりのウサギたちがやって来た。

ウサギたちは可愛らしく子供たちのかっこうの遊び相手。メスばかりなせいかほとんどのウサギは大人しく、優しい性格をしていた。

子供たちが撫でたり抱っこしても嫌がることはない。

一匹、乱暴なのがいたが……たかがウサギの力。子供たちに怪我をさせるほどではないので放っておくことにした。

そして、時は流れて一年後。

「先生、先生！」

校庭から発せられる子供たちの呼びかけに女校長が気づいた。

「どうしたの？」

校長室の窓を開けるとウサギ小屋の前に人だかりができているのが見えた。

「ウサギに赤ちゃんできたよ！」

児童の一人が興奮して叫ぶ。

「たくさん産まれてる！」

その言葉に女校長が動揺した。

そんなバカな。

全部メスのウサギばかりなのに……

まさか聖母マリアのごとく奇跡でも起きたというの？

校長は慌ててウサギ小屋に駆けつけた。

そこにはすでに何人かの教師がいて、一人の男性教師が小屋の中に入ってウサギを調べていた。

女校長は言った。「いったいどういう事？」

調べ終わった一人の男性教師が校長の問いかけに返答する。

「やあ、一匹をのぞいて全部子供を産んでますね。そしてその子供を産んでない一匹なんです……こいつ実はオスでした」

女校長は唾然としてしばらく突っ立っていたが、ようやく何かを思い出したようでこう反論してきた。

「で、でも、あの時お爺さんに一匹一匹きちんと確認してもらったのよ？ オスカメスカを」

男性教師は肩をすくめると、すまなさそうに呟いた。

「まあ、なんといいいますか、男にも個体差つてのがありませんね。中には十二の小さいのもいるんですよ。年寄りなら見逃してしまうほどの小さなイチモツの持ち主が……」

第三十一話 春樹

夏場の楽しみと言えば買ったばかりの文庫本を持って釣りに行くことだ。

読書と釣り。

そう聞くと何だか奇異に思われるかもしれないが、実はなかなかどうして相性抜群の組み合わせなのである。

休日、僕は近所にある海によく釣りに行く。歩いて10分もかからない場所。

その堤防で釣り糸をたらすのであるが、流行りのルアーフィッシングみたいなせかせかした釣りは決してしない。それはナンセンスというものである。

どっしりと腰を落ち着けてのんびりと獲物を待つ。そんなタイプの釣りが僕はたまらなく好きなのだ。

そこにビーチなんかでよく見かけるでかいパラソルと、冷えた缶ビールが二本入った小型のクーラーボックスを持っていく。

行つてすぐ、じりじりと焼けつくコンクリートの堤防上で僕はパラソルをひるげ、夏の日差しを少しでも和らげるためその陰に素早く逃げ込む。

それからクーラーボックスを開けて冷えたビールを一本取り出すと、再び蓋をしめてからそれにどっかりと腰掛ける。

もちろん椅子がわりだ。

そして、取り出した缶ビールをプシュッと開けてグビりと一口。

「ぶはっ、うまい！」

釣りの準備に取りかかるのはその後だ。

難しい仕掛けなんかはない。市販の小アジ用釣り針と小さなおも

りを取り付けたらすぐ海中に投入。簡単なものだ。

そして餌のオキアミ（ビールと一緒にクーラーボックスに入れてきた）を海にばらばら撒く。あとはのんびり待ちの釣り。

竿先を眺めながらグビリ、グビリとビールを飲む。

竿先が揺れるとリールを巻き、釣れたアジを針からはずしてクーラーボックスに放り込む。そしてまた海中に針を垂らす。

こんなものんびりとした感じでもそこそこは釣れるから海とは思議なものである。

僕と妻の二人分の夕食には十分なくらい。

だが……実は別にあたりはこなくてもいいのだ。

僕はただ、潮の香りを鼻腔に入れ、波の音を鼓膜に感じるだけで何だか幸せな気分になるのである。

でも、まったくあたりがないのも暇で仕方ない。

そこで単行本が登場する。

する事なくぼんやりと海を眺めている時、僕は無性に本が読みたくなるのだ。

あらかじめ購入しておいた本を読んでも、やはり釣りに来ている近所のじいさんが寄ってくる。

気のいい人で、彼と世間話するのも僕の楽しみの一つ。

じいさんは何の本を読んでいるのかとよく尋ねる。

聞いたってわかりやしなくせに、いつも懲りずに聞いてくるのだ。もはや習慣。年中行事である。

僕は村上春樹だと答えた。

じいさんは「へえ」とだけ。やっぱりわかつちゃいない様子。

僕はいつものようにクーラーボックスを開けると、中に入っていた最後の缶ビールを取り出して言う。

「良かったらどうぞ」

じいさんは嬉しそうに受け取ると、「そういや、三丁目の山下さんの坊主がハルキって名前だったな」と答えた。

「ねむいしものことなのである。」

第三十二話 カバ

嫌な予感はしてたんだ。

うだるような暑さの夏の昼下がりに。

日曜日だからすることもなく扇風機の前で裸になってくつろいでいたら、けたたましいだみ声と共に玄関のチャイムが鳴り響いた。

「ごめんくださいごめんください。水際党です。選挙前のご挨拶にまいりました」

ああ、やっぱりなと僕はため息をつく。

カバだ。

僕は慌てて起き上がった。

奴らは僕が玄関に出るまではずっとそこに居座るだろう。そしてアホほどチャイムを鳴らし続ける。

カバとはそういう生き物なのだ。粘着気質も甚だしい。うるさいチャイムを何度も鳴らされてはたまらないので、僕は仕方なく裸のまま玄関を開けた。

案の定、そこにいたのはカバが四匹。

狭いアパートの廊下に窮屈そうに突っ立っている。

裸の僕を見てメスのカバが「きゃっ」と声をあげるが僕は気にせず本題に入った。

「何でしょう?」

すると四匹の中で一番年配そうなカバがこう言った。

「はい選挙の事です。今回の戦いは非常に厳しいものになりそうです……そこで是非とも我が水際党にあなた様の一票をいただきたいのですが?」

やれやれ、毎度のことながら何故カバ達はこうも必死に頼みにくるのだろう。

僕は選挙など行かないし、行ったとしても水際党なんかに入れるわけない。

カバは自分達だけのことしか関心がないからだ。

選挙が終われば自分達の住む川の水質改善や自分達が食べる水草の輸入増加なんかには多量の税金を投入する癖に、僕らの暮らしに役立つことなどは何一つしようとしない。

そんな党に何故協力しなけりゃならん？

だが、その所をカバはまるでわかっちゃいない。

直に会って投票をお願いすれば自分達の党にみんなが一票を入れてくれると勘違いしている。

だから選挙の度にこうやって家々をまわるのだ。

最初のうちは僕も「いや投票には行かないんで」とか「今回は窓際党に入れようと思います」などと真面目に答えてた。だがそれは大いなる過ちであった。

カバ達はそんな僕の答えを聞くと興奮して体中から真つ赤な汗を滴らせ「選挙には行かなきゃ駄目ですよ。そもそも民主主義とはねえ……」とか「なんで窓際党なんかに投票するんですか？ あの党はとても悪い党なんですよ！ 例えばねえ……」などと話が長くなる。

かといって下手に逆らったり話を遮ることもできない。逆ギレされる恐れがあるからだ。

カバは怖い。

一見すると草食だし大人しそうにも見えるのだが、とんでもない間違い。

あの鋭い四本の牙は人間なんか簡単に貫き通してしまう。

クロコダイルすらかなわない獰猛な動物。そんなカバに対して僕ができることは一つである。肯定するのだ。

「分かりました。今回は水際党に入れさせてもらいます」

もちろん嘘。

だが、その言葉を聞くとカバは満面の笑みを浮かべて「ありがとうございませす」と一礼し去っていく。

四匹のカバ達を見送ると僕は再び扇風機の前に戻った。

さっきまでより風が生ぬるく感じられた……

第三十三話 3210

火星へ向けた宇宙船に二人のハイジャック犯が乗り込んだのは2009年8月29日のことであった。

多量の貨物に紛れ込んだの密航である。

警備の意外な手薄さに拍子抜けしたほど簡単だった。

そもそもNASAは今回のミッションにさほど力を入れていない気がする。

これほどの大事業なのにどこか投げやりな感があるのだ。

本来であれば世界中のマスメディアを集めて記者会見を開くプロジェクトだろうし、関連グッズなども売り出して世界経済を動かす一大事業になり得る計画だろう。

それなのに今回のミッションではそれが皆無。ニュース番組は最近の異常気象は伝えても火星の事なんか目にならないようで歯牙にもかけない。

世間の注目を浴びることなくプロジェクトはただ淡々と進められていった。

しかし……世間の関心とは裏腹にその規模たるや凄まじいものがある。

この宇宙船の開発にはアメリカの国家予算の三倍もの金が費やされているのだ。

その最大のスポンサーは日本。

これだけの事業が失敗に終わればそのダメージたるや凄まじかるうと、極秘に情報を嗅ぎ付けたハイジャック犯二人は自らの政治的要求を通すため、長い時間かけてこの乗っ取り計画を企んでいた。

日本に恨みがあるのだ。彼らは待った。そして、ついに……

二人は今、宇宙船の潜入に成功しコクピットに入り込んでいる。付属するインカムを頭に付け管制室を呼び出す。

「こちらは動物愛護団体のセパードである。この宇宙船は我々が乗っ取った。返して欲しければ我々の要求をのめ。すなわち、日本は今すぐ捕鯨をやめろ！」

しばらく沈黙があったのちに管制室から応答があった。

「ハイジャック犯に告ぐ。これまで各国の研究機関は隠していたが……世界は間もなく滅びようとしているのだ。太陽の異常活動により地球は灼熱の星となる。計算では太陽系で生命が生存可能な星は火星だけ。そこで我々は火星を新たな居住地とすべく、地球上のありとあらゆる動植物を宇宙船に乗せて運ぶことにした。それが今君たちの乗っているシャトルだ。言わばノアの箱舟だな。だが人間は乗せていない。何故なら……多大なる混乱を引き起こしかねないからだ。世間に知らせた瞬間に大パニックだよ。だから我々は事情を知らない全ての人々と同じく、地球と運命を共にする事に決めただ。しかし、まさか君が乗り込むとは……今一人かね？」

「い、いいや二人だ。恋人と一緒になんだ」

「そうか、それは良かった。ぜひ生き延びて火星で新たな子孫を増やしてくれ。君たちこそ新世界のアダムとイヴだ。動物たちの世話を頼んだよ。ああ、それから君の要求の件は承知した。今後、日本人はだれも鯨を食べることはないだろう。みんな死ぬんだから……では、さようなら」

通信が切れたとたん、カウントダウンが始まった。

10、9、8、7、6、5、4……

第三十四話 幽霊

仕事でアメリカに行くのと仲良くなった商談先の方に必ずといっていいほど聞かれるのは「奥さんは何をしているのか？」という質問である。

専業主婦の私の妻が何をしているのかなんて決まりきっているではないか。

家事だよ、家事。

それが終われば後はテレビをみたり昼寝したり友達と遊んだり……まあ、いろいろとやっているのだろうが、いちいち説明するのが面倒くさいので「何もしてないよ。専業主婦だから家事だけ」と答えていた。

ところがである。

しかしこの答えは彼らには受け入れがたいもののように……

「家事しかさせないなんて君は奥さんを奴隷にしているのか？」とくる。

そんなわけないだろう。

どちらかと言えば尻に敷かれているのは私の方なのに。

日本ならまず問題にならないような日常会話がアメリカでは通じない。

さて、困った。

さらなる説明を加えたいが私の英語力には限界がある。

相手は多少日本語ができるものの、難しい言葉はまだ理解できない。

どうしよう？

私はこのジレンマにいつも苦しめられていた。

そこで……私は近頃そういう場面に出くわすと必ず「こう言う事にしていた。」

「妻は死にました」と。

すると「それはご愁傷様」とおぼしき英語が返ってきて、妻のこととはもはや話題になることがなくなるのだ。

このうまい返答を思いついて以来、私のアメリカでの商談は順風満帆。

だが、好事魔多し……

ある日、私が事務所でもコーヒーをご馳走になっていたら、血相を変えた商談先のアメリカ人がやってきた。

「君に電話だ」と言う。

「ありがとう。誰からだい？」

「驚くなよ……君の死んだ奥さんからだ！」

あちゃー、しまった。まさか妻がアメリカまで電話をかけてくるとは……

まともに対応すれば嘘がばれてしまう。

私はアメリカの友人たちが見守る中受話器を取った。

パニックになっている私に妻の言葉など耳に入らない。

だが何か言わなければ友人たちはおかしいと思うだろう。

仕方無い。後で叱られるのを覚悟で言うしかない。

しゃべっていた妻を遮ぎり、私は涙を浮かべる演技をしつつ諭すようにこう言った。

「お前はもう死んでいるんだよ。はやく天国へお帰り」と。

それから返事を待たずにそつと受話器を置く。

アメリカ人たちは私の言葉に感動したようで「幽霊になっても夫に電話をかけてくるなんてステキだ」とすっかり騙されてくれた。

ふう、これで何とか助かった。だが、あんな事を言っただけで妻になんと言われるか心配だった。

帰国後、私はすぐに妻にわびた。

「あの時はごめんね」

「何が？」

「お前の電話に変なこと答えてしまつてさ」

「ううん、あれで良かったみたいよ。北斗の拳のケンシロウの決めゼリフ。友達とだべつてたら話題にあがつてさ、どうしても知りたくなつてあなたに電話したのよ」

悪気のない妻の話に私はどうしようもない怒りがこみ上げてきた。

人の苦勞もしらないで……

(お前の血は何色だ——!!) 心の中で叫んだ。

第三十五話 探偵

「おいおい君、犬をつれてくるんじゃないよ」

板東警部補のいつもの小言を無視しながら、俺は事件現場を見まわしていた。

なるほど、事前に聞かされていた通り完璧な密室。

そう、密室殺人だ。

「日曜日だというのにやれやれだよ。ご覧の通り、現場は至る所に鍵がかかっている密室。犯人はどうやって侵入し彼女を殺害できたのか……我々には皆目見当もつかない。ここは一つ名探偵の誉れ高い君の見識を聞かせてもらいたいと思ってるね」

「分かっています警部補。しかしこの現場を見ると……やはり例の殺人鬼ですかね？」

「ああ、手口からして間違いあるまい」

俺はそんな会話を適当に聞き流し、いまだ床に横たわっている被害者の遺体に近寄ってみた。

東京都在住の23歳OL。よくみりや素晴らしい美人だ。死因はおそらく絞殺。

首にしっかりと巻きつけた紐の痕が残っている。

実はここ一年、若い女性を狙った連続殺人事件が都内で頻発していた。

警察も常時50人以上の捜査員を導入し探しているのだが、犯人の目星すらつかない有様。

それを良いことに殺人犯は月に一度は女性を毒牙にかけている。まるで、警察をあざ笑うかのよう。

「ああああ、いかんいかん！ 明智君、その奇妙な犬から目を離さなくてくれ」

「ははは、警部補。奇妙な犬じゃなくて、これはバグですよバグ。血統書もあるんです」

「パリだろうがパブだろうが何だっでもいい。それより現場を荒らさないように犬を見張っててくれ。ほら、今も被害者の匂いを嗅いでるぞー!」

俺は（匂いをかくくらいは別にいいだろうがくそ警部補）と心の中で悪態をついた。

いや、しかし……今はこんなうすら馬鹿はどうでもいい。それよりも事件だ。

完璧なる密室で何故殺人が？

ここは都内にあるワンルームマンション。

窓も玄関も鍵がかかっている。

第一発見者は母親。死後三時間しか経っていない遺体。

日曜日の真つ昼間にオートロックのある警備厳重な部屋に忍び込むのは容易ではない。

被害者自身が招き入れる以外、ここに入るのとは不可能だ。

だとすると彼女と親しい者の犯行か？

「被害者の交友関係を洗ってみましょう警部補」

「一応、簡単には当たってみたが……駄目だな。彼女は孤独を好む女性のように肉親以外はだれも部屋に入れたことがないようだ。まあ、あの母親が嘘をついていないという前提だがな」

この二人の話を聞き、俺は自分の推理を改めることにした。

親しい者が犯人という説はお蔵入りだな。

そもそも連続殺人犯が友達だったなんてできすぎてる。

ならば犯人は彼女が疑いなくドアを開ける職業の者だ。

例えば郵便、宅配、集金……あとは警察!

俺はじろりと板東を睨んだ。

彼は言った。

「なあ、明智君。このバグ犬腹でもへってるんじゃないか？俺のことじつと睨んでるぜ……」

第三十六話 百万

風光明媚で知られる尾場香山でガイドの仕事をしているA・ホーという青年がいた。

祖国にいる家族に仕送りしようと必死に働いている勤労青年。

来日して一年。日本にも仕事にもようやくやくなれてきたところ。

でもそんなホーに大問題がおこる。母親が重い病になってしま

……手術すれば治る見込みはあるが、費用は日本円で百万円。

来日して一年のホーにはとても払えるお金ではない。

色んな人に相談しましたが良い考えは何も浮かばず。

今はただ仕事に精を出してお金をためるしかない、ホーはやるせない思いでガイドを続けるのでした。

そんなある日のこと……

ある大金持ちのお爺さんをホーがガイドする事になった。

尾場香山を順調に登り始めた二人だったが、目的地の山小屋まで

あと少しという所でお爺さんがへたり込んでしまう。

「ドウシタ、ジジイ？」

「おお、ホー君。わしゃあ疲れてしもうた。うまいビールを飲まなきゃ、もう一步も動けんわい。ほれ、あの山小屋にビールを売ってる店があつたじゃろ？ すまんが買ってきてくれ。買ってきてくれたらお礼に百万円をやるわ」

実はこのお爺さん、彼の母親の話を伝え聞いて何とか助けてあげようとしていたのです。

でも、ホーはそのことに気づきません。逆に変な勘違いをしてしまい……

「オオ、ビール、ヒヤクマンモスルノカ。ワカッタ、カツテクルヨ」

「え……ちょっと違うよホー君」

だが、ホーはもう駆けだしています。

お爺さんからお金ももらわずに……

山小屋についたホーはさっそくビールを注文。

売店のおばちゃんが持つてきたビールを見て「アノ……コレ、500エンノビールダヨネ？」と聞く。

「ああ、そうだけど」

「ソウジャンナイヨ。ヒヤクマンエンズル、ビールガホシインダヨ。ジジイ、ヒヤクマンズル、ビールヲノミタイテ、ソウイツタネ」

「あんだ、お客さんにジジイて……そんなことより百万円のビールつてどういう事？」

実は、この売店のおばさんはお爺さんと同じ穴の貉^{むじな}。示し合わせて一芝居ついているところ。

それにしても百万円のビールとは……筋書きにはありません。

ですがなんとかビールを彼に持たせなければ話にならない。おばさんは言います。

「ああ、忘れてた。このビール値上がりしたんだった」

「ツマリコレハ、ヒヤクマンエンノビールナノカ？」

「ああ、そうさ」

売店のおばさんの言葉にホーはうなずくとポケットをさぐります。

「アツ、オカネモラウノワズレタ」

「いいよ、ツケにしといたげる。早く持つていっておあげ」

「アリガトー、オバハン」

「あんだ、おばはんで……」

親切な売店のおばさんにもらったビールを持って、ホーは来た道に戻ります。

ですが、その時。ホーにいけない考えが浮かんだのです。

「コンナビールガヒヤクマンモズルノカ……ママノシユジュツダイトオナジ……コノビールガアレバ、ママハタスカル……」

彼は百万円のビールをしっかりと握りしめると、お爺さんを残して

すたごらさつさと山を下りてしまいました。

その後、A・ホーの姿を見た者は誰もいません。

第三十七話 死体

車に跳ねられ重傷を負った少年が救急病院に運び込まれてきたのは9月5日土曜日の昼過ぎのことだった。

財布に入っていた学生証から身元が判明。

近くに住む高校一年生中原秀樹16歳とわかる。

すぐに自宅に連絡。電話に母親が出てこれこれこうだと事情を説明すると、すぐに病院に来ること。

警察官と病院関係者は母親を待つことにした。

だが哀れにも少年の容態は急変し、電話してすぐに息を引き取ってしまったのだ。

そうこうしているうちに母親が到着。髪を振り乱して顔色は青ざめている。

開口一番、彼女は聞いた。

「息子は……剛はどこ?」

「ああ、お母様ですね。まずは落ち着いてください。私はこの事件を担当する警察の者です」

「いつたい、何があつたんですか!」

「剛君は車に轢き逃げされたんです。現在犯人は逃走中ですが、警察が全力で後を追っています」

「まあ……酷い……それで息子は……剛は無事なんでしょうね?」

「それが言いにくいことなんです」

「まさか……まさかそんな!」

泣き崩れる母親を支えて警察官が少年の遺体がある部屋まで連れて行く。

すでに白い布が顔にかけられ枕元では線香がたかれていた。

警察官が布をめくる。

幸い顔の傷は少なかった。

「ご確認ください」

「うつつ、た、剛……今日は映画に行くのを楽しみにしてたのに、何でこんな姿に……うつつ」

「剛君に間違いありませんね？」

「はい……間違いありません」

母親は我が子のベッドにしがみつきながら、おいおいと泣き続けた。

警察官と病院関係者はこの哀れな光景に目を背けた。可哀想で見られなかったのだ。

するとその時、どこからともなく携帯電話の呼び出し音が聞こえてくる。

曲は今時の若い母親らしく「ポップの明るい曲。この部屋の雰囲気にはそぐわないものであった。

だが、その時。泣き続けていた母親の涙が止まる。

「こ、この音は！」

彼女はすくつと立ち上がると慌てて自分のバッグを探る。

「どうしました？」

警察官が不安そうに尋ねた。

尋常ならざる母親の様子に、息子を失った悲しみに気でもふれたかと心配したのだ。

母親は首を振って叫ぶ。

「私の携帯の音……この音は、息子からかけてきた時だけ流れる曲なの！」

「なんですって？」

ようやく母親が自分の携帯電話を取り出すと発信先を確認した。

それは確かに彼女の息子からだった。

その場に冷たい空気が流れる。

もしかして犯人からか？

いや、ただ偶然拾った人間がかけてきただけかも。

いやいや、ひよつとしたから死んだ少年が……

母親が震える指先で通信ボタンを押し電話に出る。

「はい、もしもし」

「あ、お母さん？ 電話にでるの遅かったね。なんかしてた？」

「なんかしてたって……あなた……」

「まあ、いいや。実はさっきね、ガラの悪そうな高校生にカツアゲされちゃってさ、財布ごと取られちゃって電車賃も無いんだわ。と
りあえず映画見終わったから悪いけど迎えに来てくれない？」

第三十八話 Y談

今までセックスした中で一番良かった女は誰だという話になった。晴彦は高校生の時つき合っていた女を上げた。

「いやマジすげーんだって」

興奮気味の晴彦が言うには、彼女の体の柔らかさに驚いたという。

「あいつ新体操部だっただろ？ だからさ、足なんか頭の上まで上がる訳よ。でさ、セックスの時もすげーのよ。体位で47手ってあるじゃん。あれ全部試せたもん。やっぱ体が柔らかい女が最高だよ」
だが、晴彦の言葉に笑いながら反対したのは満男だった。

「晴彦はまだ女ってもんが分かつちやいなえな。本当にいい女つてのはな、アソコの具合なんだよ」

満男曰わく、最近やった女が素晴らしいアソコを持っていたというのだ。

やれ数の子天井だ、やれミミスズ千匹だと僕にはよく分からない言葉のオンパレードで力説する満男。

よくよく聞いてみるとその女は商売女で、今通い詰めている怪しげな店の従業員らしい。

「あの味を知ったら他の女にはもう立たないね。そいつと結婚したくなっちゃったよ」

僕はため息がついて出た。

「あのなあ、晴彦に満男。お前たちは間違ってるぞ」

「何だよ英司、俺たちのどこが間違ってるっていうんだよ」

「そつだそつだ」

僕は言った。

「お前たちの話を聞いてると……体だけの繋がりしか大切にしていじゃないか。最高のセックスつてのはな、体位の種類やアソコの良し悪しで決まるんじゃないんだぜ」

「はあ？」

「じゃあどこで決まるんだよ？」

不満そうな顔で見つめる二人に僕は自分の胸を叩いてみせる。

「ここだよ、ここ、心が大事なんだ」

そう、セックスとは深い信頼関係。つまり心こそが重要なんだ。

快感を得るだけなら自慰で十分。

子孫を残すだけなら猿でもできる。

だが、僕らは人間。霊長類の長、ホモサピエンスなのだ。

動物のようなセックスはしたくない。

そこに至るプロセス。

至った後のフォロー。それらすべてを兼ね備えたセックスを心がけるべきなのである。

お互いが深く愛しあい、お互いが誠実に尽くしあう。これらこそ最高のセックス。

「だから僕にとって最高の女性は……女房なんだよ」

「ビュービュー、既婚者は違うねえ」

「アツイアツイ。ごちそうさまでした」

晴彦と満男がおどけた調子で僕をからかう。

そう言えば結婚しているのは僕だけか。彼らが真のセックスを知らないのも無理はない……

すると、思い出したように晴彦が言った。

「そついやさ、お前はどなんだよ鉄平」

このY談でまだ発言していなかった最後の一人に意見を求めた。

「今までセックスした中で最高の女は誰だ？ やっぱ体の柔らかい女だろ？」

「いやいや絶対アソコの具合が良い女だって！」

満男も加わったこの争いに鉄平はこう答える。

「俺は……英司に賛成だ」

僕は思わず目を丸くした。まさか独身の鉄平に真のセックスの何たるかが分かっていたなんて。

彼は言う。

「いや、英司の奥さんは最高だ。体は柔らかいしアソコの具合もすげー良いんだ。数の子天井っていうのかなあ、ああいうの……」

第三十九話 執念

水面にポツポツと雨粒の波紋が広がりはじめた。

と思いきや、いきなり本降りの雨。

ザザア、ザザアとたたきつけるような大粒の水滴が曇天から滝のように落ちてくる。

止む気配はない。

ここはとある川の河川敷。

少し上流にはダム湖がありバス釣りを楽しむ人達には有名な場所。平日の昼間だというのにバスフィッシャーがちらほら見える。

しかし、生憎のこの雨だ。

三度の飯より釣りが好きなフィッシャー達も、流石に店じまいして三々五々帰り支度を始めていた。

そんな矢先のこと……

いまだ平然と釣り糸を垂らしている者がいるのは、なんとも奇妙奇天烈な光景であった。

人影は二つ。

レインコートも羽織らずこの雨の中でも平然と釣りを続けている。顔を上げるのも辛い土砂降りの雨なのにおかしなことだ。

そして、いま一つおかしなことはバス釣り天国のこの川でルアーフィッシングとは違う特殊な釣りをしていることだろう。

それはひっかけと呼ばれる釣り。大きなかぎ針を使い特に冬場のボラなどをひっかけ釣るのだ。

もちろん今は夏場だし、しかも河川の上流域であるここに海の魚であるボラなどいるはずもなく……まったく不思議な光景であった。実はこの二人は親子連れ。

ただ、釣りに熱心なのは父親だけのようで、息子の方はさっきか

ら何か言いたげに父親を見上げていた。

「ねえパパ、雨が降ってきたよ」

ついに我慢できなくなった息子が言った。

されど父親の答えはそつけない。

「……ああ、降ってきたな」

一瞬、挫けそうになった息子だがなんとかこらえて話を続ける。

今日こそは言わねばなるまい。

「ねえパパ、ママは心配してないかな？」

「……ママは心配してるかもな」

父親の表情がわずかに曇る。

やはり気にはしているのだ。

だがそれでも彼は竿を握って離さない。

息子はさらに言った。

「もうずっとここにいるね」

「……もうずっとここにいるな」

そう、かれこれももう5年になる。

「いつまでいればいいのかな？」

「……いつまでいればいいのだろうか」

平行線をたどる親子の会話。

息子はため息をつくと口を閉じた。

これからもずっとこの釣りは続く。

そう思っていた。

だが、今日はいつとも様子が違っていたのだ。

「あれパパ、なんか竿がしなってるない？」

「……ああ、しなってるな」

そつけないセリフとは裏腹に父親の声は弾んでいる。

興奮がすぐに伝わったのだろう。

息子も嬉しそうに笑った。

重そうにしなる竿を持ちつつリールを必死に巻き上げる。
ついに獲物が見えてきた。その糸の先についていたものは……

「あ、僕だ！」

「……ああ、お前だな」

ようやく見つけ出した。

息子の遺体。すでに白骨化した子供の頭蓋骨を釣り上げたのだ。

「……これでもう行けるな」

「うん、ありがとうパパ。ママによろしくね」

そう言つと息子はすつと消えていった。

翌日の新聞にこんな記事が載った。

【5年前川遊びをしていて行方不明になった息子の遺体を父親が発見！ 執念の釣りに警察も脱帽】と。

第四十話 泡沫

その日……

私は皇帝の座する帝都を離れ、自らの領地の見回りと称しライン川べりを散策していた。

我が名はフルトブランド。

皇帝より爵位を与えられた帝国騎士である。

私の眼前に広がるのは豊かな緑と水のせせらぎ。

光輝く水面では水鳥たちが優雅に羽を休め、岸辺に咲き誇る花々はまるでペルシャ絨毯のように私の目を楽しませる。

なんとも美しい。

この景色をナターシャにも見せてやりたかったな……

私は川べりに座ってぼんやり思い出に耽ることにした。

ナターシャとは私の妻のことだ。

一 昨年の春にこの世を去った最愛の女性。

私とナターシャの間には遂に子供ができなかった。

だからだろうか……

彼女はいつも悩んでいた。

そのことが、少なからずナターシャの病を進行させたと思う。

気にすることはないと励ましたのだが、真面目な彼女は最後まで

悩みながら逝ってしまった。

ああ、ナターシャ。

君さえいてくれてたら……

私の目が涙で濡れる。

私の両親や親戚は早く再婚して後継ぎをつくれと急かす。

名誉ある帝国騎士の家柄。

確かに後を継ぐ者は必要。
しかし……

どうしてもだめなのだ。
再婚などまだまだ無理。

私のナターシャへの想いは深い。
悲しみを紛らわせるかのごとく、私は大きなため息をついた。そ
してこう独りごちる。

「ナターシャ……君に会いたいよ
するとその時。」

私の独り言に反応があった。
聞き覚えのある声。
私が待ち望んだ一瞬だった。

「あなた、私です。ナターシャです」
「そ、その声はナターシャ？」
「はい、たった今天国から帰ってまいりました」

驚いた。
死んだはずの彼女が私の目の前にいる。
私の眼前、ライン川のただ中にだ。
生前とまったく同じ優しい微笑みを投げかけている。
だが、その体はあまりにも変化していて……

「いったいどうしたのだその姿は？」
「ああ、この尻尾のこと？ 神様がくださったのよ。天国で泣き暮
らしていた私にお情けをかけてくれたの」
驚くことに彼女の姿は人魚に変わっていた。
「人の姿にはしてもらえなかったのかい？」
「ごめんなさい、決まりがあるみたいなのよ」

ナターシャが言うには、これは彼女の心残りを叶えるための一時的な措置。

願いを叶えたら彼女はまた天国へ帰るといふ。

ナターシャの心残りとは何か？

「もちろん、私とあなたの子供よ。さあ早く子づくりしましょう！」

「今、ここでか？」

「もちろん」

そう言うとナターシャはライン川の川底へ潜ると卵を産み落とすた。

そして……

「さあ、あなたの精子を私の卵にぶっかけて」

私はしばし彼女の顔を黙って見つめた。

そして思わずこう言ってしまったのだ。

「……この魚類が！」と。

私のナターシャへの想いは急速に薄れていったのは言うまでもない。

第四十一話 痴呆

仕事中、携帯がなった。

オフクロからの電話だった。

オヤジの病状がかなり悪いと言っただ。

「お父さんも最近はずっかりボケちゃってねえ」

「そう……そんなに悪いの？」

「今日は病院に連れて行っただけだね。お医者様が言うには、そろそろ私の事も分からなくなるんじゃないかって」

「そうか大変だな。俺も今日はなるべく早く帰るからさ、それまで何とか頑張ってよオフクロ」

家で待つオフクロの姿を思い浮かべながら、俺は目頭が熱くなってきた。

老人性痴呆症。

悲しいがこれが現実。

オフクロを一人、家に残すのは気が引けた。

だが、俺にも仕事がある。

俺は一人っ子。

頼れる兄弟はいない。

おまけに独身だ。

奥さんでもいたらなとつくづく思う。

ついでに言えば面倒を見てくれる親戚も皆無。

近所の人たちが親切な方々ばかりなのが不幸中の幸いだっただ。

俺が仕事で留守にしている間、何かと目をかけてくれている。

有り難いことだ。

だが、頼りっぱなしも悪い。

前言通り今日は早く帰ろうと心に刻む。

でも、オフクロはいたって脳天気だ。

「あら、いいのよ晴彦。あなた仕事があるんでしょ？」
「でも……」

「まあ、お父さんもかなり変になっちゃったけど、けっこう可愛いところあるんだから」

「可愛いとこ？」

「ええ。最近のお父さんね、犬のマネが凄くうまいのよ。おかしいったらありゃしない。あ、こっちに来た。あははは、やだあお父さん。今も犬の物まねしてる。そうだ、晴彦にも聞かせてあげようか？」

オフクロは俺の返事も待たずになにやらごそごそ始めたようだ。
不安である。

「いったい何をしているのか……」
俺は「別にいいよオフクロ。モシモシ、聞いてる？」と必死に呼びかけた。

だが反応はない。

時折、オフクロの笑い声がするだけ。

まあ、危ないことにはなるまい。

俺はオフクロが受話器にでるのをひたすら待った。
すると、しばらくして明るい声が聞こえてくる。

「お待たせ晴彦。じゃあ、お父さんと代わるね」

「あ、ああ……モシモシ？」

「ワン、ワンワンワン！」

「ほらね、犬にそっくりでしょう？」

「ああ、そっくりだね。じゃあオフクロ、今日は早く帰るから大人しく待っててな」

「はいはい、じゃあ待たねー」

オフクロが電話を切る。

俺は一つため息をつくと携帯電話をたたんだ。

それにしても……さっきの吠え声、かなりイライラした調子だったな。

「すまんポチ」

俺は心の中で飼い犬にわびた。

あの様子だと毎日迷惑をかけているようだった。

だが、ポチは賢い犬。

嫌々ながらもオフクロのわがままに付き合ってくれるに違いない。頼りになるよ。

しかし、それにしても……

「オヤジが生きてたらなあ」

老人性痴呆症になったオフクロの面倒を見てもらえたのに。

俺は残業ができなくなったことを報告するため、上司のもとへ重たい足を向けた。

第四十二話 獅子（前書き）

以前書いた「ライオンとネズミ」を少し変えて短くしてみました。
どうぞご覧ください。

第四十二話 獅子

アフリカに住む雄ライオンのハサウエーは悩んでいました。
ここ数ヶ月の間……

サバンナは日照り続き。

動物たちの大切な水飲み場の水もすっかり蒸発し、ライオンの餌になるシマウマやヌーといった動物たちも次々と死んでしまいます。
ハサウエーはお腹がペコペコ。

もう何日も食べていません。

そんなある日のことでした。

久しぶりに獲物を捕まえたハサウエー。

小さなネズミが一匹。昔なら見向きもしない動物です。
でも今のハサウエーには大切な食事。

しっかり食べて力をつけなければ。

いつものようにペロリと食べてしまおうと思いきや……

その日のハサウエーはそうしなかつたのです。

どうしてなのでしょう？

ハサウエーはこう呟きます。

「このネズミを食べたところで、お腹一杯なんかなれやしない。いつそのことコイツは逃がしてやって俺はこのまま断食しよう。そしてそのまま死んでしまったほうがいい。そうすればもう苦しまずにすむのだから……」

餌を前にしてこんなことを呟くライオンは、世界広しと言えどハサウエーだけかもしれません。

すると、その異様な様子に気がついた者がいました。

捕まってブルブル震えていたあのネズミです。

「あ、あのう……もしもし、ライオン様？」

恐る恐る百獣の王に呼びかけるネズミ。

「なんだいネズミ君？」「先ほどお話を聞かせていただいたのですが……私を助けて下さるといっのは本当でしょうか？」

ネズミの言葉にライオンはうなずきます。

「ああ、そうだ」

「な、なんとお優しい方なのでございましょう！ あなた様のよう
なライオンは見た事も聞いた事ありません。噂に聞くお釈迦様
やキリスト様と同じ聖人。いえ、聖ライオンです！ ありがたや、
ありがたや」

大げさに喜ぶネズミにハサウエーは照れてしまいます。

「いやいや、よしてくれよう」

これまで仲間からもこんなに誉められたことはありません。もち
ろん餌になった動物たちからはなおさらです。それなのに、このネ
ズミはこんなにも自分を讃えてくれる。悪い気はしません。

「さあネズミ君、行きたまえ。君の仲間の所へお帰り。死ぬ前に一
つでも良いことが出来て良かったよ」

ハサウエーの心は晴れ晴れとしていました。

「ありがとございます。このご恩は一生忘れません」

何度も頭を下げるネズミ。

そして、喜んで走り出します。

しかし……

その時です。

ガッ！

ハサウエーの一撃。

ネズミの柔らかい腹にライオンの鋭い爪が食い込みます。

「……な、なんで？」

「嘘だよーん！」

まさに外道。ハサウエーはペロリとネズミを平らげたのです。

第四十三話 恋文

群青の山々はいつしかその姿を隠し、落葉樹たちが紅色に山を染める頃。

僕は彼女に告白した。

場所は学校の校庭。

今時、どうよ？

そう思われるのを覚悟の上で僕は彼女にそれを渡した。

そう、ラブレターだ。

もちろん直筆。

しかし、シラノ・ド・ベルジュラックならぬ非才の身である。

しかも、初めてのラブレター。

何の文才もない初心者がお手本もなく書いたものだから、そりや目を背けたくなるほどの出来栄だった。

気のきいた言葉も無ければ、美しい詩編の欠片すらもない。

だけど……

スタンダールはこう語っている。

恋する技術とは結局、その時々陶酔に応じて自分の気持ちを正解に言うことに尽きる、と。

とにかく自然に、ありのままの自分を出す。それで良いのだ。

必要なのは勇氣。

売れない作家である僕の兄も、いささか下品な例えだが「思いやりと真剣さがあれば童貞と処女でも気持ちの良いセックスは可能だぜ」と語っていた。

思いやりと真剣さだけは自信がある。　ありのままの自分を真剣に……

その思いの丈をぶつけるかのように恋文をしたためたつもり。

僕は、放課後の夕陽が照らす校庭でそれを彼女に渡した。

彼女の名前は工藤英子。

とてもちっちゃくて可愛い中学二年の女の子。

僕と同級生だ。

彼女は少し上気した顔でラブレターを受け取ると「ここで読んでもいい？」と聞いた。

予想外の反応だったけど僕はうなずく事です承する。

目の前で彼女がどんな表情をするのか……

その仕草、一挙手一投足を見たかったからだ。

僕の返事を確かめて彼女は手紙を開封した。

便箋20枚の力作である。

二人っきりの静かな校庭。

時折、ラブレターをめくるカサカサという音だけが響く。

まるで時間が止まったみたい。

いや、本当に時間が止まったらいいのにとさえ思う。

だが宇宙の始まり以来、時は常に流れ時計の針は元には戻らない。

楽しかった一時は終わりを告げ、彼女はついにラブレターを読み

終えた。

その顔は紅葉より赤く心なしに震えているように見える。

そして、その目は……明らかに怒りの感情を帯びていない

か！

僕は不安になる。

怒らせるような事書いたっけ？

彼女は便箋を僕に突き返すところ言った。

「あたし、こんなエッチじゃありません！」

駆け足で去り行く彼女を茫然と見送ったあと、僕は慌ててラブレターを読み返した。

なんと……

そこにあつたのは僕が書いた直筆の恋文ではなく、作家の兄貴が新しく書き始めたフランス書院用の原稿。

のっけから、ハードな内容の官能小説だ。

やりやがったな兄貴。

僕のラブレターとすり替えたんだ！

この悪戯好きめ。

しかし……

こんなものを最後まで読み切るなんて、英子って意外とエッチだよなあ。

新たな発見に僕の恋心はさらなる高まりを見せるのであった。

第四十四話 寿命（前書き）

以前書いたロボット物を短めに見てみました。

第四十四話 寿命

朝。

僕は、さち子に起こされて目が覚めた。

「オハヨウゴザイマス、ゴシユジンサマ」

電子音がまだ寝ぼけまなこの僕の耳に届く。

電子音？

そう、電子音。

不思議に思うなかれ。さち子は機械なんだ。

彼女は僕が生まれた時から家にいるお手伝いロボット。

僕にとっては乳母みたいな存在。

「アサゴハンノ、ジュンビガ、デキテマス」

「ありがとう、さち子」

僕の返事を聞いたさち子は、旧型ロボット特有のうるさい金属音を響かせながら部屋を出て行った。

帰りぎわ、肩をドスンとぶつけるオマケ付き。

やれやれまたか。さち子のせいでへしゃげた木製のドアを僕は呆れた面もちで眺めやった。

最近センサーの故障なのか、こういう事がよくあるんだよね。古いから仕方ないんだけど。

さち子は普通の家庭ではもう見かけなくなった旧型。

西暦2110年の現在……自我こそ持たないが、AI（人工知能）搭載のお手伝いロボットが一般家庭でも主流となっていた。

ちなみに自我を持つAI搭載ロボットを僕らはニューマンと呼んでいる。

そんな進歩した世界で、さち子のような旧型ロボットはもはや骨董品。

もちろん彼女に人工知能等はなく、プログラムされた事しかできないアナログ。

だけどさ、丈夫さだけは誰にも負けやしないんだ。

製造後100年近くたった今でも動いているなんてまさに奇跡。ちなみに世界のソニー製。いやはや、昔の人間は仕事が丁寧だわ。まあ、さち子の寿命がくるまではと思ってるだけだね。でも、こんな調子が続くならスクラップにして新しいのを買い替えたいなあとも思ってしまう。

さて、そろそろ起きるとしよう。

今日は仕事。僕はとある電機メーカーに勤めている。急がなきゃさち子の作った朝飯（高級フルードをふんだんに使った豪華なもの）を食べ、僕は小走りで玄関へと向かう。

外に飛び出すと、そこはいつもと変わらぬ風景が広がっていた。ニューマンとロボットが忙しそうに働いている機械世界。

人間が滅んだ後、我々が作り出した歯車のように正確で緻密な最高度に進化した文明社会だ。

いや、そんなことはどうでもいい。時間がないんだ、少し走ろう。そう思った矢先。

「つつっ！」

急な胸のさしこみに襲われた僕は、たまらずその場にうずくまる。どうしたんだろう？

12ヶ月点検も済ませたばかりなのに……

駄目だ、目がかすむ。

「ドウシマシタ、ゴシユジンサマ？」

異変を察知したさち子がやって来る。

だが、その問いかけに僕は何も答えられない。喉のスピーカーがうまく機能してないようだ。

ああ、意識が遠くなってきた。

くそ、今日がニューマンたる僕の寿命なのか？

壊れそうな僕の記憶チップに、さち子の最後の言葉が刻み込まれた。

「ヤレヤレ、ダメデスネ、サムスンセイハ……」と。

第四十五話 お鍋

久しぶりに会う兄貴との集合場所は、人形町にあるちゃんこ屋に決めた。

兄貴は下戸だから居酒屋はちょっと嫌がるだろう。

かと言って喫茶店やバーは何か男らしくない気がする。

それに比べてちゃんこ屋はいい。男の息吹きを感じるではないか。しかも、兄貴は鍋が大好物。ちょうどいい。そう考えての選択であつた。

待ち合わせ時間より先に着いた俺は、先に入って待つことにした。そこでまず驚いたのは店の内装である。

前に何度か来たことがあるのだが……

ずいぶん新しくなっていた。

以前の小汚く男臭い雰囲気が好きだったのにな。恰幅のよかった元力士の店主も、ダイエツトしたせいに見えるも無残にガリガリ。

ああ、こりゃ失敗したな。男らしさの微塵もない。

俺は幾分がっかりしながら案内された席につく。

気を取り直してちゃんこ鍋を注文することにした。

内装は変わったが味は大丈夫だろう。

ここの鍋は最高だ。

良質の鰹に昆布そして炒り子でとった出し汁に、鮭や鴨それから伊勢海老をぶち込んだ豪華なもの。

特に秘伝の辛味噌が最高。

ガツンとパンチのきいたその味はまさに男の料理。

俺は期待しつつ鍋と兄貴の来訪を待つ。

(もうかれこれ10年以上になるなあ)

待っている間、俺の脳裏に懐かしい思い出が浮かんでは消えていく。

確か、俺が海外旅行でモロッコに行った時だ。

あれ以来、まったく会ってない。

まあ、俺が悪かったんだ。とある理由で……俺が実家に出入り禁止をくらったせいで、兄貴にまで会えなくなっただからね。

父親も母親も頑固一徹。死ぬまで俺を許そうとしなかった。

だが、遂に……

二人ともあの世に行ってしまう。俺が二度目の海外旅行に出かけている間に。

帰国した時には通夜も葬式も全てが終わっていた。

今日、兄貴と会うのは遺産相続等の話し合いと、両親の死に際なんかの報告のため。

(ああ、死ぬ前に一度会いたかったな)

深いため息を吐いた俺の前に、注文しといた料理が出される。

ちゃんこ鍋だ。

だが、何かがおかしい……

そっだ、色だ！

なんだ、この吸い物みたいな透明なスープは？

辛味噌はどうした？

具も野菜ばかり。

鮭は？

鴨は？

伊勢海老はどこにいったんだ？

店員に文句を言おうと俺は振り向いた。

でも、振り向いた俺の視界に店員ではない変な中年女が映り込む。しかも、俺に手を振ってやがる。

誰だ、あいつは？

女は俺の所まで息せき切って駆け寄るところ言った。

「あらー真理子、久しぶりー。って今は哲平に名前かえたんだっけー？ 元氣ー、お兄ちゃんよー。あ、今はお姉ちゃんかー？ この間さー、あなたを見習ってモロツコ行つて性轉換しちゃったー。そしたら、お父さんもお母さんも驚いちゃってねー。そのまま帰らぬ人に……」

第四十六話 林檎（前書き）

ギリシャ神話「パリスの審判」より黄金の林檎をモチーフに書きました。

第四十六話 林檎

恋の話をしよう。つまり、僕が経験した壮絶な四角関係の話を。まず、多少自慢することを許してもらいたいのだが……僕はモテる。それもかなり。手前味噌ながら顔もスタイルもかなりのもの。何度かタレント事務所からスカウトされたこともあるくらいだ。頭の出来もまずまずだと思う。国立大に入り就職も大手ゼネコンに決まった。卒論も無事終え、今は悠々自適の毎日である。

さて、そんな僕には三人の彼女がいた。二股ふたまたならぬ三股みまた。大学一年生の頃からだ。

三人ともみな美しく僕好み。僕はみんなと仲良く平等に付き合ってきたし、バレないように最新の注意を払ってきたつもり。

だけどダメだった。彼女たちはついに僕の浮気を発見し、三人そろって僕をとがめはじめたのである。

悪いのは僕なのだから仕方ない。まあ卒業も近いし、そろそろ一人に決めなきゃならないかなと思ってた頃。よし、この中の一人と真剣な交際を始めようじゃないか。

その旨を皆に伝えると、さっきまで僕を罵っていた彼女たちが今度は一人一人自分をアピールし始めた。まず一人目はお嬢様タイプの彼女。

「私のパパは会社の社長ですよ。東証一部上場企業だし私と結婚すれば将来の安泰は間違いないですわ」

ほほう、それは知らなかった。金持ちだろうとは思ってはいたが、詳しく話を聞くと、なんと彼女の父親が経営する会社は超がつく有名企業だということが分かった。テレビやラジオのCMでおなじみの会社である。

これは素晴らしい。僕が内定をもらっている大手ゼネコンも確か

に優良企業だが、出世するという保証はない。

だが、この娘をがっちり捕まえておけば将来は確かに安泰だ。うん、悪い話じゃないよな。

それに社長ともなれば美人秘書とオフィスラブは当たり前。社長室であんなことやこんなことも……うーん、いいかも。

僕の気持ち社長令嬢に大きく傾きかけた時、もう一人の女性が鼻息を荒くしこう言い出した。眼鏡が似合う真面目タイプの彼女だ。

「あら、そうわいかわいいわよ。あたしのお父様、この大学の学長なんだからね。もし、あたしをふつたら……お父様に言いつけて卒業させてあげないわよ！」

え、ええー？

長いこと付き合ってきたけど全然知らなかったなあ。いや、まずい。それはまずいぞ。卒業もできなくて就職もなにもあつたもんじやない。これはきくなあ。

だが、ものは考えようだ。もし、彼女と結婚すれば……僕は学長のコネでこの大学に講師として採用してもらえるかもしれない。そして、将来は教授もあり得る。しがないサラリーマンよりはよほどいいかも。

それに、教授ともなれば若い女子学生とあんなことやこんなことも……ぐふふふ、パラダイスだ。

僕はすっかり真面目タイプの彼女に気持ち固まりかけていた。だが、その時である。最後の一人、スタイルのいいモデルタイプの彼女がこう言った。

「うちは、みんなみたいにコネになりそうなもんはあらへん。お母はんは未亡人やし、嫁いだお姉ちゃんたちの旦那も普通のサラリーマンや。うちにはなんにもあらへん。せやけど……あんたのことが好きやねん。めっちゃ好きやねん。この気持ちだけはだれにも負けへんよ」

この一言で僕の気持ちは決まった。もちろん、モデルタイプの彼女を選んだのだ。

何故って？ 決まってるじゃないか。未亡人や人妻ってのはさ…
…男の夢なんだぜ！

第四十六話 林檎（後書き）

パリスの人妻好きはガチ。

第四十七話 犬猿

もしって言葉、小説を書く者にとって非常に魅惑的な響きを持つ言葉だよ。だって想像力をかき立ててくれるじゃない。例えばさ

……

もし、春という季節が来なかったら世界はどうなるのか？ とかね。

たぶんずっと冬になるか、あるいは春をすっ飛ばして夏になるんじゃないかなと俺なんかは思う。

ろまんていっくな人なら「もう別れの寂しさで泣く人はいなくなるね。だって冬の日本海はもう見れないんだから」とでも答えるのだろうか。

うまくもないし、たいしてロマンチックじゃないかもしれない。まあ、気にしない気にしない。とにかくもって言葉、俺は大好きなんだ。だけども……

のばなしに出来ないのは昔話だね。おいおい、そりゃ突飛過ぎるだろう！ って展開が多すぎ。もし大好きっ子の俺もついていけないよ。

おとなになってから気づいたんだ。いや、子供の頃は普通と思ってたよ。

ともするとスルーしがちだけど、よくよく考えてみると「あれ、これ変じゃね？」ってやつ。

もも太郎はそのいい例だね。

にんきのある昔話だからたいていの人は知ってると思う。

きいた事のない人はいないでしょ？

じいさんが山へしば刈りに、ばあさんが川へ洗濯に行くってやつ。

はずかしながら子供の頃の俺、しばって芝だと思ってた。

いみ不明だよなあ、山へ芝刈りだなんて。

らんだ（懶惰）をらいだと誤読するくらい恥ずかしいよ。

なまけ怠るさまっていう意味らしいね、懶惰。

いや、それなら怠惰でいいじゃんと思うんだが……

と、話が飛んじやったね。

おれが言いたいのはそのんな事じゃないんだ。

ももたろうに話を戻そう。要するに桃太郎は鬼退治に行くわけじゃない？ 一応、武装して。あとキビ団子なんか持つちゃったりして。テクテク、テクテク、歩いて行くわけだよ。すると突然、犬が出てくるの。そして言うんだ。「お供しますから、お腰につけたキビ団子を少し私にくださいな」ってね。桃太郎も犬なら戦いに役立つだろうと考えて連れて行くことにしたんだ。しばらく歩くと今度は猿が現れるんだよ。やっぱりこいつも犬と同じセリフを吐く。「

お供しますから、お腰につけたキビ団子を少し私にくださいな」ってね。まあ、猿も戦いに役立ちそうだ。桃太郎も連れて行くわけ。さて、ここからが俺的、WHY？ なんだけど……

うーん、なんか書くのが面倒くさくなってきたな。俺の言いたいことは、縦読みで分かるように書いたから。段落ごとの文頭を繋げて読み返してみてね。それじゃあ、また。

第四十八話 結婚

親友の加奈子かなこが結婚する事になった。すでに結納を済ませ、あとは挙式を待つだけだという。

会社のお昼休みに入った近くのファミレスでその知らせを聞いた時……井上麻子いのうえあさこは愕然とした。

事前に相談されていなかった事もそうだが、あの加奈子という気持ちでいっぱいだった。

「あ、あんたみたいな女を気に入るなんて、いったいどの外国人よ？」

いささか失礼な言い方で親友を問い詰める。彼女みたいな個性的な顔は外国人でもなければ受け入れられないわよと、仲間内で噂されていたからだ。

「ばか言わないでよ、失礼ね」

口を尖らせる親友の加奈子。だが、そんな彼女にお構いなく麻子はたたみかける。

「で、どこで知り合ったの？ 顔は？ 人柄は？ 学歴は？ 職業は？ ねえ、はやく教えなさいよ！」

「ちよ、ちよつと、落ち着きなさいって麻子」

苦笑いしながら加奈子は持っていた煙草に火をつけた。節約のためしばらく止めていたはずだが、また吸い始めたらしい。

もともとヘビースモーカー。不思議ではないが……ひよつとするとこれも結婚効果なのだろうか？

余裕しゃくしゃくで煙草の煙を吸い込んだ後、加奈子は結婚相手の事を詳しく語り始める。

話だけ聞くと普通の相手のようだ。麻子が想像するダメ人間とはかけ離れた男。

二人が知り合ったのはとある結婚相談所の紹介。顔は若い頃の明石家さんま似。人柄は明るく向上心があり学歴は高校卒業だが公務

員をしているという。

極々普通だ。麻子はますます動揺した。

そんな友人の様子を知ってか知らずか、加奈子は話の最後をこっぴどく締めくくる。

「ま、あたしくらい良い女になると男は放っておかないものなのよ。あんたもせいぜい頑張りなさいな」

「は、はあ？」

悔しさ半分だが、麻子は奇妙な違和感を感じていた。

おかしい。何か変だ。加奈子が普通の男と結婚？ いや、正気の沙汰じゃない。

だいたい彼女は片思い専門の女だったはず。勝手に男を好きになり、すぐに振られ、落ち込むだけ落ち込んでから、また他の誰かを好きになる。この繰り返しだった。

加奈子は恋に関しては必ず負け組であり、それは揺らぐことのない規定路線。

麻子は疑惑の眼差しを加奈子に向けた。

「あなたの相手……結婚詐欺じゃないでしょうね？」

「もう、バカにしないでよ。あたしのダーリンはそんなんじゃないわよ。だって、デートの費用は全部彼持ちだもん。それに海外旅行にも連れて行ってくれたのよ」

「へえ、どこに？」

「イタリアよ。ACミランっていうチームの試合を見に行ったわ。

彼、サッカーファンだから」

「ああ、それでか」

麻子は納得した。そういうことなら大丈夫だろう。ブスの親友の結婚生活も安泰というものだ。

「良かったわね、あんた、ロナウジーニョに似てて。きっと彼から大切にしてもらえるわよ」

キョトンとする加奈子に麻子は言った。

「私もいい人探さないとなあ」

もう春がすぐそこまで来ている2月の昼下がりであった。

第四十九話 万引

儼かなチャペルでの結婚式は私の夢だった。鳴り響く教会の鐘の音色の中、今にも泣き出しそうな父親と歩くバージロード。それから神父様の優しいお説教。続いて愛する彼との誓いのキス。指輪の交換はすぐその後だ。そして、出席者全員で立ち上がり賛美歌の大合唱でフィナーレ。何もかもが理想的。そんな夢が今、叶った。非行少女だった私がこんな幸せな結婚式を挙げられるなんて嘘みたい。最高に幸せ。それもこれも全て彼のおかげ。

あれは、そう、私がまだ高校生の頃だった。彼はとあるスーパーの店長で、私はその店の万引き常習犯。もちろん貧乏だからという訳じゃない。スリルが欲しかったのである。

そんなある日……彼に捕まった。当然、警察に通報されると思った。でも彼はそうしなかった。当時の私に不安は無い。警察沙汰になるのは初めてじゃなかったから。逆に、警察に通報もせずただ懇々と私を諷める彼の態度に不安を感じたものだ。

(ひよつとして、私の体目当て?)

本気でそう考えもした。だけどそうじゃなかった。彼は若い私がこのまま道を踏み外すことが心配だっただけ。懲りずに万引きしては捕まるというシーソーゲームを繰り返していくうちに、ようやく彼の性格が分かってきた。本当に不思議だった。赤の他人にここまで気を配れる人がいるなんて……

私がこのお人好しの店長に恋するのは、そう時間のかかることではなかった。いつしか心の奥底深く片思いしていた私は、ついに十七回目の補導の時に告白したのだ。

「好きです、付き合ってください！」

目を白黒させて驚いていた彼だが、最後はこくと頷いてくれた。もちろん二度と万引きをしないことを条件に。以来、私はキツパリと足を洗った。そして付き合いはじめて三年目の今日、念願の結婚

式をあげたのである。

しかしだ。今、私は絶体絶命のピンチに陥っていた。昔のヒットソング“三年目の浮気”じゃないが、彼と約束して三年目の今日……私の万引き癖が再び鎌首をのぞかせてしまったのだ。

結婚式の後に開かれる結婚披露宴。そのわずかな間に、お色直しの済んだ私がふと関係者控え室を見ると……彼の上司である常務さんの高価なハンドバックが目にとまった。彼は私たちの披露宴にてスピーチをしてくださることになっている。

ハンドバックがすっかり閉まっていれば気にもしなかつたろう。でも、なぜか全開状態。そこから高そうな封筒の白い肌がのぞいていて……

ああ、今、披露宴の席に座る私の胸元にはその封筒が挟まっている。何人も友人知人が長々と挨拶してくれたが、私は上の空だ。やってしまったことへの後悔と彼に対して申し訳ないという気持ち。それからいつバレるやもしれぬ恐怖感で他の事などへ気を回す余裕はない。

見れば……会場の片隅では常務さんが困ったような顔で奥様と話し込んでいる。チラチラこちらを見るのは何でだろう？ いけない、そろそろ常務さんの挨拶が始まる。あつまた私を見た。やっぱり気づいているんだわ。足がガクガク震える。

私の万引き癖のことを彼から聞いているに違いない。ああ、どうしよう。こっちに来る。ステージに登りマイクに手をかけた。そしてニヤリと笑う常務さん。間違いない。知ってるんだ。そして、私のしたことをみんなの前で発表するんだわ……

「オホン、ええ、申し訳ありません。実はですね……長い時間をかけて準備していたスピーチ用の原稿を入れた封筒を無くしてしまいました、いやはや面目次第もございません。家内に聞いても確かに

ハンドバックに入れたはずなんだがと言うばかりでして、いったいどうしたものかとさつきまで思案に暮れていた次第です。でも、まあ、神様が私の長いスピーチを嫌って原稿を取り上げてしまわれたのかなと、今は思うようにしました。ですからこのスピーチは極めて簡潔に済ませたいと思います。では、改めて、ええ、二人ともご結婚おめでとございます。私からは以上です」

割れんような拍手が会場を埋め尽くした。私は気づかなかつたが、今までさんざん長めのスピーチが続いてお客さんたちみんな退屈だったらしい。彼の上司の簡潔な挨拶は大歓迎された。

披露宴も無事終わり、私はこっそり常務さんの原稿が入った封筒を開いてみた。便箋に125枚の大作が出てきた。内容も退屈極まりないものである。もし、このスピーチをされていたら卒倒を起さず人もいたやもしれぬ。恐らく本当に神様が私を使ってこの封筒を盗ませたのだわ。

そう思うと気が楽になった。このことは彼には内緒。余計な心配をかけたくないから。私は今、幸せです。

第五十話 fish

なあ、機嫌直せよ。忘れてたんだよ、お前が魚苦手だったこと。何年いつしよに暮らしてるんだって？

いや、だからさつきから謝ってるだろ。もう作ってしまったんだから食べようぜ。この時期の焼き魚もうまいよ。

なに、絶対にいや？

ああ、もう、わがままだなあ。だいたい、お前、なんで魚ダメなの？

別にアレルギーってわけじゃないよな？

寿司ネタは結構平気でパクついてたじゃん。

うん、うん、なになに、ああ、新鮮なやつは良いけどその他はノーセンキューだと。

って、やつぱりただの贅沢じゃんか。しかもこのサンマ、スーパーの人が新鮮だって言ってたんだぜ？

え、たかがスーパーの店員の言うことなど信じられるかって？

うわっひどー。

じゃあ、誰を信じりゃあいいんだ。

はあ、自分の目と鼻を信じると？

あ、それなら大丈夫だよ。この焼きサンマ、新鮮だ。俺の目と鼻が問題ないって言ってる。

全然なってないだって？

鼻づまりなのかだって？

いや、風邪はひいてないけど……

まるで風味が違う、そんなのも分からないのか？

おいおい、グルメかお前は。

魚は魚だろう。食わず嫌いって言うんだよお前のはさ。そっいや、昔から高い物しか食べさせなかったもんなあ。でも、今からでも遅くない。大丈夫だ、一回食べてみてよ。うまいぜー。

……つて、ダメか。ああ、もう、くそ。あのねえ君、好き嫌いが多いと成長できないよ？

いや、もちろんお前は大人だけでもさ。

なんか、お前を見るとスパゲティが苦手なイタリア人を思い出すな。

そんなイタリア人いるわけない、嘘だろうつて？

これが本当なんだよ。テレビでやってたもん。

日本人で言えばお米が嫌いな新潟県民って感じだよな。ま、要するに君はそのくらい変わってるってこと。

能書きはいいから早く何か食わせろつて？

分かったよ。うーん、あと君が食べれそうなものと言えば、買い置きしているキャットフードくらいだね。これで良いかい？

あ、でもこれフィッシュミックスって書いてる。あちゃー、ダメじゃん。

え、ニャーニャーつて……これは良いのか？

魚が入ってるけど、大丈夫？

なになに、キャットフードの魚入りは別だ？

ふう、やっぱり君って変わった猫だよなあ。

第五十一話 種馬

時計の針が12時を指した。そろそろ仕事の時間のようだ。僕に与えられた時間は24時間。つまり丸一日。でも、それだけあればおつりがくるほど。十分間に合うだろう。おニユーのタキシードに袖を通すと、僕は無骨なマシンに乗り込んだ。

行き先は日本の東京である。あ、いや、ここも日本の東京なんだけど……時代が違う。今から遡ること28年前、西暦2110年3月15日の東京へ僕は行くのだ。先ほど乗り込んだ無骨なマシンは時間航行装置。要するにタイムマシン。僕は過去の日本にタイムトラベルするのである。

この時代、人類は驚異的な科学技術の進歩により時間すら征服していた。もちろんこれは核兵器を超えた危険な力。扱いには細心の注意が払われている。時間航行装置、いわゆるタイムマシンは国家の嚴重なる管理下に置かれ使用者は幾つもの資格試験に合格した国家公務員があたる。僕もその一人。法務相直属の司法官だ。

今回の任務はただ一つ。凶悪なテロリスト、或貝田太郎あるかいだたろうに対する死刑執行。わざわざタイムトラベルしてまで死刑執行に向かうと聞くと驚かれるだろうか？ だが、これが実に合理的な方法なのである。

現在、世界中で凶悪な犯罪を繰り返している或貝田太郎は住所不定。当然ながら所在も不明だ。まあ、テロリストが居場所を特定されているようでは話にならないが……とにかく、まともに捜査していたのではいつまでたっても捕まらない。

しかし、過去ならばどうだろう？ どんな凶悪犯とて子供時代は存在したはず。例えば、或貝田太郎は東京都出身。高校まで過ごしたという記録がある。つまり過去ならば住所不定の凶悪テロリストでも簡単に捕まえることができるという訳だ。

いや、捕まえるというのは語弊があるな。実は時間管理法により、

過去の物を現在または未来に持ち出すことは絶対に禁じられている。質量保存の法則という1774年にアントワーヌ・ラヴオアジエが発見した化学の基礎が、このタイムトラベルの世界でも確かに適用されるのだ。計算によると24時間程度の時間航行ならば影響はないが……それ以上の時間、過去と現在の質量が変わると時間線の分岐が生じ異世界が誕生する可能性が起こる。

故に、僕が過去に行ける時間も丸一日に限られてくるし、もし現代に或貝田を連れてこようとするならば、時間線分岐という危険を避けるため同じ質量（又は同じ素材）のものを過去に送り込まねばならないのだ。つまりは人間を……そんなことは人道上、絶対にできない。だからその場で死刑を執行するのである。

さて、時間だ。僕は時間航行装置に乗り込むと赤いボタンを押した。これがタイムトラベルのスタートボタン。H・G・ウエルズが書いたSF小説よりはるかに簡単に、そしてあっという間に過去に着く。

そこでは、ちょうどパーティーが開かれていた。宴もたけなわ、かなり酒に酔い乱れてきた頃。タキシードでバッチリ決めた僕は、女性に超モテモテ。まあ頭も良いがルックスも良いからね。

僕はその中から一人の可愛い女の子をナンパすると、すぐにラブホテルにしけこんだ。十二分に愛を交わしたあとそのまま一泊し、昼までには別れた。ここまでの所要時間わずか11時間。僕は再びタイムマシンに乗り込むと時間内に現代へと戻る。こうして任務は完了。完璧な仕事だった。

え、死刑はどうしたって？ もちろん、執行してきましたよ。だって僕がナンパした彼女は……本当ならあのパーティーで別の男性とセックスし、或貝田太郎を身ごもることになっていたんだからね。つまり彼女こそ凶悪テロリストの母親という訳さ。それが、僕と朝までしつぱりやってたわけだから……これで或貝田太郎は産まれてすらこないことになる。

いやあ、実にスマートな死刑執行だろ？ イケメンの僕はこの方法で、108人も凶悪犯に罰を下してきたのだ。僕のあだ名は死神。でも最近では種馬とも呼ばれている。

第五十二話 文化（前書き）

異文化をテーマにしました。

第五十二話 文化

うらぶれた商店街の片隅で人目につかないようひっそりと商売している——そんな感じの飯屋だった。客はランチタイムでも二、三人。夜は居酒屋に早変わりするので多少は増えるが、それでも十人以上の客は見たことがない。いかにも小汚い店である。

普通なら近寄りたくもない飯屋。そんな場所に俺が足繁く通うようになったのは、何も会社から歩いて5分という立地条件の良さだけの問題ではなかった。実は、そこにチャーミングな看板娘がいたのだ。まあ、娘と言っても人間じゃなく……犬なだけどね。

黒と茶が混ざったミニチュアダックスの牝。それがこの店の看板娘。どうやらこの店主は愛犬家らしく、他にも何種類かの犬を飼っているようだった。だが目についたのはこの娘だけ。さして犬好きではない俺が虜になるほどの殺人的な愛らしさである。

最初は、会社の行き帰りに店先に繋がれている彼女を撫でるだけで満足していた。しかし、段々物足りなくなってくる。首を傾げちよこんと舌を出し俺を見つめるその姿。それはまるで詩人ホメロスが描いた海の怪物セイレーンの歌声のように、俺を深い恋の深みまで引きずり込んだ。もっともっと仲良くなりたかった。そのためには彼女の飼い主たるこの店の主と仲良くなるしかない。

こうして、俺はこの小汚い飯屋に入り浸るようになったわけ。もちろん、彼女目当てとは気づかれぬよう最新の注意を払った。軟弱な男と思われなくなかったからだ。

変なプライドが邪魔してなかなか看板娘の事を聞き出せなかったが、何度も来店するうちに店主も俺に好意的になり、遂に彼女の情報を引き出すことに成功した。まず名前はタンだと聞いた。変なネーミングセンスだなんて思ってたなら、店主の国の言葉で“甘い”という意味らしい。なるほど、スイートハニーか。良い名だ。

外見からは分からなかったが、彼は外国の人なんだそう。そん

な飯屋の主人が「明日、仲間内で郷土料理を食す会を開く。本当は日本人呼ばないのだが、あなたは良い人だから是非来なさい」と言ってきた。何でそこまで好かれたのかは知らないが、そう言われたら嬉しくなるのが人情だろう。俺はすぐに了承した。帰り際、店先に繋がれた看板娘タンちゃんに挨拶する。彼女は短い尻尾をこれでもかというくらい振り喜んでくれた。俺はまた明日来るからねと言つて別れた。

さて次の日、俺が店に行くとタンちゃんはいなかった。散歩にも行っているのかと気に止めず店に入ったところ、店主をはじめ何人かの人間がすでに郷土料理らしきものをつついていた。すっかり酔っ払つて上機嫌の店主が俺を見つけると、自分のそばに招き寄せたと言った。「さあ、タンゴギと一緒に食べよう」と。

タンゴギつて何だと尋ねたら「そんな事は後でググれ。今はとにかく食え」と言われた。何の料理かは知らないが確かに美味い。たらふく食べてから家路についた。その日以来、俺がタンちゃんを見かける事はなくなった。そして、もう二度とあの店に行く事もない

……

第五十二話 文化（後書き）

日本人が鯨を食べるのと一緒に犬を食うのが……やっぱり犬を食べるのは引くよなあ。

第五十三話 ジン（前書き）

カクテル大好きなんでつい書いてみました。

第五十三話 ジン

そこは、いかにもといった雰囲気のある老舗のバーだった。重厚なレンガ造りの建物、マホガニー製の天井、磨き抜かれたオークのカウンターは年季が入り、椅子やテーブルはイタリアの職人技。まるで異国の地に足を踏み入れたような錯覚すら引き起こす。真正正銘の高級店だ。

働くバーテンダーたちも素晴らしい。純白のバーコートに黒の蝶ネクタイをビシッと決め、手際よくカクテルを作るその様はハリウッド映画のワンシーンにでも紛れ込んだかのような錯覚を引き起こす。

ああ、なんて素敵な空間だ。俺はウツトリしながらカウンター席で注文していたマティーニを啜った。うーん、これがまた最高の味である。マティーニはドライ・ジンとドライ・ベルモットのシンプルな組み合わせであるがゆえ、その店の色というか哲学がモロに出してしまう。

ここのマティーニは辛口ながらも繊細で……例えば、そう、ラフマニノフのピアノ協奏曲第二番を初めて聞いた時のような衝撃を与えてくれる。いつもそうなんだ。この酒は魅力的なピアニッシモと力強いアルベジオで俺を甘美の世界へ誘ってくれる。

ああ、だが、楽しい時間が過ぎるのはあっという間。もうすぐ12時。シンデレラの魔法もとける頃だ。要するに閉店。カボチャの馬車も美しいドレスも全て無くなる。残るはガラスの靴ならぬ借金の山。

俺は今日、全てを失った。経営していた会社が倒産し、20年連れ添った妻にも逃げられ、子供たちも彼女について行ってしまった。生きる張り合いがない。大切なものはみな、無くなったのだから……精算するためにカウンター席から立ち上がった。最後の一万円札がポケットにある。これで支払いは間に合うだろう。マティーニ2

杯と干しぶどうのブランデー漬けしか頼んでない。高級店とは言え、恐らくは7千円程じゃないかと思う。

本当はもう1杯飲みたかったのだが、足が出て恥をかくのがいやだった。最後までいかっこつきたいじゃない。そう、俺は高級なバーでマティーニを飲んで死ぬつもりだった。戦いに敗れた初老の男に明るい未来は似合わない。そして、名誉が失われた時に死は最良の隠れ家となるのだ。

店のバーテンダーがにこやかに精算をはじめめる。6500円だと彼は言う。予想通りの金額。やっぱりもう1杯、マティーニを飲みたかったかな。でも……もう十分。最高の気分を味わえた。後は心静かにあの世へ行くのみ。

俺はポケットを弄った。あれ、何かがおかしい。俺の右手に何の感触もないのだ。冷たい汗が背中を流れ落ちる。ない、ない、ない、一万円札がなくなっている。どうしたというのだ？

もしかして、落としたのか？ ああ、神はかくも意地悪な苦しみを俺に与えたまうのか！ 死を前にした人間にさらなる恥をかかせるとは。だが、ないものは仕方ない。俺は正直に全てを話した。バーテンダーはおもむろに電話をかけはじめ……

という訳で俺は今、無銭飲食の罪で刑務所に服役中。だが、この飯はけっこう美味くて、なんだか死ぬのが馬鹿らしくなってきた。人間、堕ちれば堕ちるものだなあと苦笑しながら生活している毎日である。それにしてもあのバーテン、よくぞ警察に連絡してくれたものだ……

第五十四話 Chef

洒落た感じのウェイターが「ラストオーダーです」と知らせに来たので、私は最後の注文を告げたところだった。頼んだのはダッチコーヒーとブッシュ・ド・ノエル。近頃これが食後の定番なのである。

7時間以上かけて抽出された香り豊かな水出しダッチコーヒー。そして、甘さ控えめながらも濃厚な味わいが楽しめるロールケーキの一種、ブッシュ・ド・ノエル……

まさにパーフェクトな組み合わせ。デザートとしてここまで美味しいものはないと私が個人的に確信している味だ。ウェイターによって運ばれてきたお洒落な珈琲カップとケーキ皿を見て、私の高揚感 highest peak に達した。

それにしても……… いったい、いつからだろう？ この店がこんな“良いレストラン”になったのは。去年の改装前は酷いものだったのに驚きである。あの時は「もう二度と来ないわ」と捨て台詞を吐いたくらい酷い味だった。

私は料理評論家。でも、仕事とは別に近所のレストランを食べ歩きするのが趣味。しかし、何の因果か私の家の周りには行くでもない店ばかり。いいかげん、うんざりしていた。

でも、そんな私に転機がおとずれたのは一年前のこと。一度は見放したこの店がボヤ騒ぎの後に改装され新しく生まれ変わったというのだ。なんでもシェフがフランス帰りの若手に変わったらしい。

あの最悪な食事のあと二度と行くまいと固く誓った私だったが、最近よく耳にするこの店の評判に半信半疑で足を運んでみた。それが大正解。ついに私は最高のレストランを近所に見出したというわけなのだ。

ブッシュ・ド・ノエルをたいたらげ、ダッチコーヒーを飲み干した。今日もおいしかった。自然とにこやかな表情になる。さて、帰ると

しよう……だが、立ち上がった私の目に異様な光景が飛び込んできた。いつの間にかレストランに警官が溢れているではないか。これはいったい？

「すみません、ちょっと失礼しますよ」

そう言って声をかけてきたのは私服の刑事。でも警察が何の用なの？ その刑事いわく「実は最近、ここ周辺で放火事件が相次いでいたんですよ。それもレストランばかり。そこで我々が各店の防犯カメラを確認すると全ての店にあなたが映っていた訳なんです」とのこと。

私は憤慨した。よりもよって放火犯として疑われてるのだ。ひどい話、そんなことしてないのに。濡れ衣よ！ すると、憤って叫ぶ私に男はニヤリと笑い首を振る。

「いやいや、もちろんあなたに罪はないですとも。ただ、美人料理研究者としてのあなたの熱烈なファンがいますね。まあ、言ってみればストーリーカーですが……彼があなたをつけまわして、あなたを怒らせたレストランに復讐したわけなんですよ。あなた、料理にはうるさい方なんですよ？」

「そ、そんな事……でも、いったい誰が？」

「ああ、奴です」

彼が指差したのはレストランの厨房。ちょうど手錠をかけられ連行されている若い男が見えた。あれが新しく入ったというシェフのようだ。

「あなたのためにフランスで修行して、ここのシェフになったらいいですよ。ある意味、見上げた男です」

まったくである。私は彼に良い弁護士をつけてあげようかと今悩んでいる。

第五十五話 欠片

薄墨色の空からポツリ、またポツリと雨粒が落ちてきた。どうやら天気予報はハズレたらしい。こういう「にわか雨」の類は、いろいろと予想しづらいのだろうか？ 私は家事の手を休めて窓から見える景色を眺めやった。

舗装された白っぽいアスファルトの道を黒い雨粒の紋様が覆っていく。まるで、オセロゲームみたい。そここうするうち、遂に白が敗北。いよいよ本降りの雨になってきたようだ。

私は、沛然として大地を打つ驟雨にじっと心耳を澄ましてみる。バシャバシャバシャ、バシャバシャバシャ。バシャバシャバシャ、バシャバシャバシャ。規則正しいリズムを刻む。私は上から降る雨水とアスファルトにぶつかって跳ね上がる水滴、その二つが重なり合う所を凝視していた。いや、別に意味があるわけじゃない。ただ、ぼんやりと考え事をしたかっただけ。小気味よく続く雨音のリズムに合わせ、私は深い思索の旅へと出かけていった……

実は、今日、私は子供を酷くぶってしまった。言い訳しようのないほどのDVである。ドメスティック・バイオレンス気づいた時にはもう引つ込みがつかなくなっていた。独裁者の専横の嵐が我が家に吹き荒れる。手当たり次第に物を投げつけた私。今はその後片付けの真つ最中なのだ。

息子はすでに自分の部屋に戻っている。凄く怖かったのだろう。息をひそめてじっとしているようだ。部屋からは物音ひとつ聞こえてこない。そんな彼の様子に申し訳ない気持ちでいっぱいになる。どうして、いつもいつもこうなるのかしら？

あの時……最愛の息子はまるで鬼か悪魔でも見るかのようにおびえた瞳で私を見つめていた。いや、もしかすると本当に鬼か悪魔だったのかもしれない。人間の皮を被った獣にトシカ思えない所業を、私はしてしまっただけだから。

きっかけは息子の何気ない行動だった。壁にクレヨンで落書きしたのだ。赤と青と黄色で書いた抽象画。仕事から帰ってきた私はその絵を見た瞬間、怒りのマグマに胸を焦がした。あの時、もし私のこの胸を切り開いて見るのができたならば……きつと今日の空よりまだ黒い私の心が見つかったに違いない。

雨はまだ激しく降っている。きつと離婚してからなんだろうな、と空を見上げて私は思う。夫と別れた頃から堪忍袋の緒が極端に短くなった気がする。再婚でもすれば少しは良くなるのだろうか？

いや、でも、そんなのは子供に関係のないことだ。私の不安やイライラを彼にぶつけるのは筋違い。悪いのは全て私ではないか。

やっぱりキッチンと謝ろう。ごめんねって言おう。息子は今度も許してくれるよね？ そう決意すると、私は息子の部屋へと続く襖をそつと開けた。すぐに思う。ああ、物音ひとつしないはずだと……

彼は眠っていた。いや、ただ静かに横たわっていたと言い換えた方が良いのかもしれない。あれほど酷くぶつたあとなのに、その顔は驚くほど穏やかだった。微笑みを浮かべた息子を見た瞬間、私の中で何かが粉々に砕けた気がした。

雨はまだ激しく降っている……

肩まで浸かり10まで数えたら僕はここから出て来ても良いことになつていた。もちろん、お風呂の話。きちんと浸かつてないと体の垢が落ちないんだって。でも、これがなかなか難しい。

だって、僕はまだ小さくてよく数を数えられないんだもん。1、2、3、4、えと次は……あつた、それから6に7、それから……ああ、だめ。ここから先がどうしても出てこない。いつもそうなんだ。

だから、7までいくと僕は湯船の中で足踏みして悔しがるのさ。靴底をキュツキュツと鳴らしてね。そして、また1からやり直し。え、変？ どこが？ ああ、お風呂なのに靴つてところね。

実は、僕がいるおばあちゃんのお風呂は少し変わっていて、湯船の中に靴を履いて入る仕組みなんだ。お行儀が悪いって言われるかもしれないけど仕方ないよ。だって、そうしないとお風呂の底が熱くてじつとしてられないんだもん。

こつこの、五右衛門風呂ごえもんぶろって言うらしいね。おばあちゃんが教えてくれた。名前の由来は安土桃山って時代に生きていた石川五右衛門って人。何でもその人はドロボーで、長い間逃げ回ってたけど遂に逮捕されてしまったらしい。そして、京都の三条河原って所で釜ゆでの刑になったんだって。その石川五右衛門を茹でた釜に似てることから、こつこのお風呂を五右衛門風呂と言うようになったんだ。

このお風呂、横は木製だからいいんだけど底が鉄なんだよね。そしてその下で薪を焚いてお湯を沸かす。だから下は熱くて熱くて仕方がない。本当は下駄を履いて入るんだけど、僕はまだ小さいからお風呂用の下駄はぶかぶかで履けないの。だから靴。

さあ、最初から数えなおそう。1、2、3、4、5、6、7……

ああ、やっぱりだめ。ねえ、誰か7の次の数知らない？ おばあちゃんは絶対に教えてくれないんだ。いつもニコニコしてるから気づかなかったけど本当は怖い人みたい。そして、10まで数えないでお風呂から上がると容赦のない罰がある。

それは、ずっとずっと昔のこと。お風呂があんまり熱くてたまらず僕が飛び出したら、それ以来おばあちゃんに無視された。ご飯も作ってくれない。口もきいてくれない。おばあちゃんは、ただじつと五右衛門風呂の傍らで座っているだけ。それは今でも続いている。だから……僕も反省してずっとお風呂の中で10数えるまで頑張ってるんだ。

さあ、いくよ。1、2、3、4、5、6、7……ああ、やっぱりだめか。知らないものは知らないよ。ねえ、誰か7の次を教えてよ。いいかげんに出たいんだ。え？ きちんと浸かってないと垢が落ちない？ っていうか、もう、僕もおばあちゃんも垢どころか肉も全部取れちゃって骸骨なんだけど……

第五十七話 起源（前書き）

なぜ、男は自分の一物にあだ名をつけたがるのか？

第五十七話 起源

ダーウィン著【種の起源】によれば、生物は環境に適応しながら進化するという。しかし近年、それが誤りであることが図らずも証明されてしまった。時として生物は環境とはまったく関係のない奇妙な方向へと進化するのである！

西暦2110年の現代。人類を取り巻く環境は昔とさほど変わってはいなかった。少しだけオゾン層の穴が広がり、ほんのちよつぴり温暖化が進んだくらい。ほぼ現状維持だ。それなのに人類は驚くべき進化を遂げたのである。

では、どんな風に進化したのか？ これは少し言いくいのだが……要するに我々の臓器の一部が大胆に進化した。人類全体がじゃない。半分の人間、男だけが進化したのである。

これで、お分かりいただけただろうか？ まだ分かりづらい？ もっと詳しく言えば下半身の進化だ。まだ、いまいち？ じゃあ、はつきり言おう。つまるところ我々の……き、金玉が進化したのである！

いや、申し訳ない。下品な単語は使いたくないのだが、事実なのだから仕方がない。では、いったい金玉がどう進化したのか、疑問に思う方もおられるだろう。実は、我々の金玉は考えることができるようになったのである。言わば第二の脳。いや、精子を製造する機能はそのままだ。でも、金玉は大腦と同じく物事を考え体の一部すら制御できるようになっていた。ちなみに、右の金玉が右脳、左が左脳である。しかも、この金玉脳は大腦に宿る人格とは別人格を有するのだ。だから心の中で会話も可能。例えばこんな感じ。

「おい、ちよつとあの子可愛くね？」

「やめとけよ。今、仕事中」

「ふん、俺には関係ないね！」
「あ、こら、まてつて」

え、その後？ もちろん、第二の脳は己の制御する体の一部をギンギンにおっ立たせる。そう、男性のシンボル。ペニスをね。世の女性は、真つ昼間からあそこを立たせている男性を見るとドン引きするかもしれないが、自分では制御できないのだからお許しいたください。

しかし、このくらいならまだ良い方だ。この金玉脳と大脳とが、もし相反する性別だとしたらどうなると思う？ はつきり言って悲惨。例えばこんな感じになる。

「ねえねえ、ちょっとあの子、素敵じゃない？」

「おいおい、ありや男だぜ」

「ふん、なによ、悪い？ あたしは男がいいの！」

「参ったなあ。金玉がオカマだなんて」

「オカマじゃなくて、あたしは女なの！」

心と体がバラバラ。頭では男なんか抱きたくないのに、下半身はギンギンムラムラ。逆にいい女を口説き落としてホテルに入ってもあっちの方はさっぱりなんてこともあるわけだ。まさに最悪。でもつて、こんな感じに会話が続く。

「あのさあ、いいかげんにしてくれよピーコ。俺は女の子が好きな
の」

「だ、誰がピーコよ？ あたしはピーコじゃなくてオスギです！」

「どつちでもいいよ」

「きいいいい、踏んづけてやる！」

第五十七話 起源（後書き）

今でも、男の下半身は別人格だからな……

第五十八話 実況（前書き）

女は嘘つき……

第五十八話 実況

井上夫妻には四十を過ぎてようやく授かったひとり娘がいた。名前は清美^{きよみ}。清く正しく美しく育てて欲しいという願いを込めてつけた名前だ。今年で四歳になる。その名の通り清く正しく美しく、順調に育ってきていたのだが……

残念なことに彼女は障害を持って産まれてきた。医者の話では発達障害の一種、あるいは言語障害のない自閉症のようなものだとか見かけは普通だが成長するにつれかなり奇妙な言動をとる病氣らしい。

そして現在、清美はその兆候を如実に表し始めていた。どんな風にな？ まあ、簡単に言えば実況中継みたいなものと理解してほしい。彼女は自分の見たもの聞いたものをそのまま口に出してしまう病癖があるだ。例えば……

母親がスーパーに清美を連れて行った時のこと。前方から頭の薄い中年男性が歩いてきていた。すると彼女はたちまちこう言う。「ハゲ接近、ハゲ接近」と。

じろりと男性ににらまれた母親はただただ詫びるしかない。言っただけでも彼女には馬の耳に念仏。こればかりは仕方がない。病気のからだ。だから母親がひたすら頭を下げる。でも、このくらいなら良い方で……

「ただいま妊娠三カ月。避妊に失敗、避妊に失敗」とか「不倫が妻にバレそうで浮気相手と別れるかを考え中、考え中」とか、およそ普通の子供が思いもつかないことを言うのである。しかも、なぜかその内容は当たっているようで、清美に言い当てられた人はみんな一瞬ビクツとすると赤面しながら去っていった。これは何か神がかり的なものが働いているのだろうか？ 薄気味悪かった。

「ねえ、あなた。あたし最近怖い」

「何がだい？」

「清美のことよ」

「どうしたの？」

「あのね……」

妻は娘の特殊な能力について夫に話して聞かせた。「なるほどね」と夫は一人で納得する。「もう、何かなるほどねなのよ？」詰め寄る妻に夫が話して聞かせた。

「昔、お医者さんが言ってたよ。こういう種類の病気の患者には、時々、信じられないくらい記憶力や洞察力が増す人がいるって。清美もきつとそうなのさ」

「じゃあ、何かに取り憑かれてるとかじゃない？」

「もちろん」

「ああ、良かった。あたし、もう清美の前で嘘はつけないと怯えたのよ」

「あははは、それは怖かったね。いや、でも、待てよ……あの子の洞察力をもってすれば、僕たちの嘘なんかたちどころに見抜いてしまつかも」

「ええ、じゃあ、やっぱり嘘はつけない？」

「そうなるね。これからは、なるだけ二人とも嘘はつかないようにしようよ。ところで清美は？」

「うん、もう寝たわ」

「ふーん」

娘が眠った以上、仲良し夫婦の行き着く先は一つだった。釣りバカ風に言えば合体。そう、夜の営みの始まりである。

「はあ、はあ、はあ、も、もういくぞ！」
「あ、あたしもー！」

二人が最高潮に達した時、不意に娘の声が寝室に響いた。どうやら目が覚めたらしい。彼女は言った。

「パパは気持ち良いからいつちゃった、いつちゃった。でも、ママはそうでもない。いったぶり、いったぶり……」

第五十八話 実況（後書き）

この場合は嘘も方便だな。

第五十九話 ナノ

私は大きな間違いを犯したのかもしれない。良かれと思ってやったことが、今や自分の首を絞めているのは皮肉な事である。実は、禁断の技術であるナノテクノロジーに手を出してしまったのだ。ああ、これからどうしよう……

きつかけは私の利己的な欲望だった。不老不死への憧れ、それが私を駆り立てたのである。神様から与えられた寿命という運命にどうしても納得がいかなかった私は、永久とわの命を求め一つの新しい生命体を作り出してしまった。そう、それがナノマシン。

彼らは、小さすぎて私ではどうすることもできない様々な病やまいを勝手に直してくれる素晴らしい医療マシン。文字通りナノ（極微）の世界の住人だった。苦勞はしたが、私はついに二体のナノマシンを作ること成功する。

たった二体で何ができるのかだって？ いやいや、侮るなかれ。このナノマシンは繁殖するのだ。最初の二体を親として子供が次々と生まれ、ついには私の体中でまんべんなく活躍するのである。便宜上、マシンと呼んだがその実態は生命体。

だが、ただの生命体ではない。彼らには私を大切にしようプログラミングしてあった。ゆえにどこへ行っても彼らは、自分たちの周りの環境（すなわち私の体）を大切扱った。かれこれ一万年ほどはこれで上手くいっていたのだが、しかし……

近頃、困った事が生じていた。ナノマシンが増えすぎたのだ。これは私の致命的なミス。彼らは十分な数に達したあととも繁殖を続け、ついには許容量をオーバーしてしまう。私の体は小さな極微の住人に占拠されてしまった。ああ、私がナノマシンに総数60億を超えたら自殺するようプログラミングしていれば良かったのだけ……

全ては後の祭り。

彼らは増えすぎたことで基本的なプログラムをも無視するようになってしまう。何度も言うがナノマシンはもともと、環境（私の体のこと）を大切に作る生命体。でも、あまりにも増えすぎたため、彼らは私より自分たちの都合を優先させるようになった。自然環境（くどいようだが、私の体）を破壊し、より楽な暮らしをするためオートメーション化を押し進めた。結果、ありとあらゆる汚染物質を垂れ流し私を苦しめるようになる。いやはや困ったことである。

これは、永遠を望んだ私に対する神からの罰なのだろうか？ 私は毎日毎日、ナノマシンに蝕まれていく体を指をくわえて見てるしかない。彼らはあまりにも小さすぎて手が出せないのだ。このままでは永遠の命どころか数千年で死の星となるだろう。ああ、これからどうすれば……

私は偉大なる神により創られた太陽系第三惑星地球。そして、ナノマシンは私の体に巣くう獅子身中の虫。彼らは自らを人間と呼んでいる。

第六十話 電撃

何が腹立つって、天気予報が外れた時ほど腹の立つことはない。楽しみにしていたゴルフの予定が狂ったり干した洗濯物が全滅したりと、やり場のない怒りで俺の十二指腸潰瘍は悪化しまくりだ。しかも、外れた次の日に予報士が「まあ、当たるも八卦当たらぬも八卦みたいなものですから」などと下らぬ言い訳をすると、脳梗塞でも起こすのではないかと思うほど頭に血がのぼってしまう。バカたれ、まずは謝れや！俺は、毎日毎日、天気予報が外れるたびに本当にムカついていた。しかしだ……

電撃天気予報が始まってからは、そんな俺のイライラも幾分解消されたように思う。それは、短気な視聴者のためにテレビ局が考え出した全く新しい企画。天気予報の時間、前日の予測が当たったかどうか報告される。そして、外れた場合は罰として予報士に電気ショックを与えるのだ。これまでと違い、バラエティー要素を備えた天気予報であった。

しかも、電気ショックを与える長さは視聴者が決定できる。ここが素敵だ。“今日の雷様”^{かみなり}という役柄で、毎日視聴者から抽選で選ばれる。携帯電話のインターネットサイトからも申し込みができるので簡単便利。実は何を隠そう俺もその一人。一度でいいからやってみてみたい。そんな思いであった。すると……

ある日、俺が自宅のテレビでニュースを見ていたら携帯がなった。もうすぐ楽しみにしている電撃天気予報の時間。着信は知らない番号からのものだった。そして、昨日の予報は見事に外れ……俺はひよっとしてと期待をこめて携帯を耳元にあてた。

「もしもし、夕日テレビの天気予報コーナーの者ですが、今日の雷

様に応募してくださった管様すがですか？」菅すがというのは俺の名字。

「は、はい、そうです」

「おめでとうございます。あなた様が今日の雷様に選ばれました。では、まもなく電撃コーナーですので、お電話そのままでおまちください」

「わ、わかりました」

やった、やったぞー！俺は携帯を片手に小躍りした。ついにこの時がきたのだ。念願になって今日の雷様……感無量である。

いい大人が喜びすぎだと思われるだろうか？実はこれには訳がある。それは、天気予報士の仲頼純子なからいじゅんこさんのせい。俺は彼女の大ファン。純子さんが苦しむのを見るとゾクゾクとするのだ。お察しの通り俺は多分にSっ気があった。ワクワクしながら待っていたら、ついにテレビ画面ではニュースからお天気コーナーに切り替わる。そして、アナウンサーが言った。

「ええ、残念ながら仲頼さんは昨日の電気ショックの影響で体調を崩してお休みです。その代わり、お笑い芸人の手川哲朗さんが代打として頑張ってくださいます。では、さっそく今日の雷様をお呼びしましょう。菅さん、聞こえますか？」

俺が携帯を床に叩きつけたのは言うまでもない。

第六十一話 厨二

突然、アンケートをお願いする失礼をお許し下さい。実は昨今、とある病やまいが日本中に蔓延している模様です。命に別状は無いものの、放っておくと深刻な事態に発展しかねません。このアンケートは、その病に感染しているか否かを判別するのに役立ちます。どうぞこの機会にご自身が発病しているかどうか御確認くださいませ。

各質問は「はい」か「いいえ」でお答えください。「はい」の数が0～5の場合は大丈夫、健全です。6～11は発病の疑いあり。12～20は完全なる発病です。それではアンケートを始めましょう。

Q1・公園で美人が子犬と散歩していたら、まずバター犬だと疑ってしまう。

Q2・AV女優の彼女がいると嘘をついたことがある。

Q3・田村亮子、落合信子、泉ピン子、一人以上とヤレル自信がある。

Q4・ある日、突然、超能力に目覚めるかもしれないと本気で考えたことがある。

Q5・処女が好き。非処女は嫌い。

Q6・特殊警棒あるいはスタンガンを買おうか考えたことがある。

Q7・修学旅行で行った京都で木刀を購入し、直後に教師に没収された経験がある。

Q8・趣味は人間観察と臆面もなく言える。

Q9・いつもは親に「プライバシーを尊重しろ」と突っかかるが、オナニー現場を覗かれた時だけは何も言えなかった。

Q10・ビンテージという言葉に惹かれる。

Q11・水泳の時間、見学している女子を見て「今日はあの日だな」と興奮したことがある。

Q12・朝礼の時間、校長の話が長すぎて貧血を起こした女子に萌えた。

Q13・母親のマニキュアを拝借して自分の爪に塗りたくり、「やべ、女の手みてえ！」と興奮。そのままオナニーした経験がある。

Q14・体が柔らかければ一人フェラに挑戦してみたい。

Q15・妹もしくは姉のタンスの引き出しは、隅から隅まで探索済み。

Q16・格闘技は自己流が一番だと思う。

Q17・包茎手術日には勝負パンツをはいていく。

Q18・もう母性本能の強い女と出会うしかないと本気で考えたこ

とがある。

Q19 バスガイドに恋すること三回以上。

Q20 小学校の頃、好きな子の縦笛を舐めたはいいが、他の男子が舐めた後だったという苦い経験がある。

以上でアンケートを終了いたします。「はい」の数が0～5の場合は大丈夫、健全です。6～11は発病の疑いあり。12～20は完全なる発病です。ただちに治療を開始した方が良いでしょう。

あ、まだ病名を言ってませんでしたね。お気づきの方もおられるとは思いますが……これは厨二病を判定するアンケートです。皆様はいかがでしたか？

第六十二話 秘密

田舎の国道沿いにある甘味所【毬藻】は、知る人ぞ知る名店であった。特に北海道の阿寒湖で取れた氷を使ったかき氷は絶品。中でも人気は茨城の小豆で作った餡と京都の宇治茶、そして秘密の素材を使って出来たかき氷。そう、スペシャル宇治金時だ。

甘味と苦味のバランスが絶妙。とりわけ秘密の素材がいい味を出している。このスペシャル宇治金時は老若男女すべての年齢層に支持されていた。夏休みなどは噂を聞きつけたファミリーたちで、狭い店内が芋洗い状態になる有り様。大繁盛である。

しかし……

甘味所【毬藻】店主の齋藤春夫は、この状態をあまり歓迎していないようだ。いや、むしろ困っていた。嫌いなのだ、目立つことが彼としては、食べていけるだけの儲けがあれば十分。宣伝などせず静かに営業したい。それが願いなのである。

だが、クチコミとは恐ろしいもので、春夫の思惑などそっちのけで客は増える一方。記録的な猛暑（残暑）も手伝ってか、スペシャル宇治金時は売れに売れた。そんなある日のことだった……

残暑厳しい昼下がり、一人の見慣れぬ客が入ってきた。春夫は一目でヤクザだ見抜く。それも、下っ端のチンピラではない。大物だ。用心深そうな目、死線をかいくぐってきたであろうたくましい体意志の強さを物語る太い眉毛。春夫はピンときた。こいつはヤクザ界でも有名な伝説のヒットマン、ゴルゴ十三^{ゴルド}ではなからうか？

実は……以前は彼も同業者だったのだ。もちろん今は違う。春夫はすでに足を洗っている。今は人気スイーツ店のしがたない店主にすぎない。だが、長年の極道暮らしで培った嗅覚は衰えていない。彼には絶対の自信がある。そして、ヤクザのヒットマンが来る心あたりもあつたのだ。

あろうことが春夫は暴力団を抜ける時、その組の金をくすねていた。その額、1億。大金である。その金で今の店を開いた。なんとか見つからずこれまで過ごしてきたのだが、ついに組からのヒットマンが追いついたのだ……

さて、男は席につくと黙って店内に張り付けてあるメニュー表を見ていた。春夫は恐ろしさで震えながら注文を取りに行く。男はしばらく考え込んでいたが、やおら低い声でこう言った。

「スペシャル宇治金時を一つ」と。

春夫は拍子抜けした。てっきり、有無を言わず撃たれるかと思っただからだ。しかし、ゴルゴ十三は静かにかき氷を待っている。なんだ、ただの偶然なのか。彼はお客様だ。ほっとした春夫は急いでスペシャル宇治金時を作ると男の元へ運んだ。そして、ついつっかり余計な事を口走ってしまう。

「いやあ、ゴルゴさんもかき氷とか食べるんですねえ」

すると、急に男は眉間にシワをよせるとおもむろに懐からピストルを取り出した。そして……

「貴様、秘密を知ったな」

甘味所【毬藻】に銃声が響いたのはそのすぐ後の事である。

第六十三話 滑舌（前書き）

ときは今 雨が下知る 五月哉

第六十三話 滑舌

足軽たちは思い思いの場所で持参の弁当を食べていた。若い彼らが、にぎり飯や味噌や香の物などを口いっぱいにはうばる様は何だか微笑ましい光景である。

足軽たちは、たいてい農家の次男坊や三男坊である。だが、中にはれっきとした武士の家系に連なる者もいた。皆が一旗あげようという野心にあふれ、士気は高まるばかりである。

ここは沓掛。丹波街道が京盆地の平野部に入った所。あたりに敵と呼べる存在はなく兵士らは安心しきった表情である。それもそのはず、彼らは総大将の前で武者揃えの儀式を執り行うべく京までやってきた部隊。ここは総大将の支配下にある安全な地なのだ。その後は遠く中国の毛利征伐へ向かう。まだまだ戦いは先の話。今から緊張しては体がもたない。

されど……

彼らの大将だけは、なぜか不安そうに濃い茶を啜っていた。目つきは険しく鼻息も荒い。口元には長らく笑みも浮かんでこない有り様なのである。深いしわが眉間に刻まれてもいた。

時折、大きなため息を吐いたかと思うと、今度は拳をギュツと握り締めたりもする。普段の彼からは想像もつかない落ち着きのなさ。大将の名は明智光秀。言わずとした天下人・総大将たる織田信長の誉れ高き重臣であった。

弁当を食べ終えた明智隊は沓掛を出て桂川を渡った。辺りは真っ暗。梅雨空ゆえ星すらも見えぬ。まさに闇夜という言葉が相応しい。そんな中、光秀は将兵たちにこう命じる。

「皆、火縄に火を投じよ。新しい草鞋をはき、戦いの準備を整えるのじゃ！」

はて、不思議なこともあるものだ。足軽たちは一様に首を傾げる。

なぜ、戦いの準備などするのだろうか？　ここは京、織田信長様の支配下ではないか。敵はどこにもいない。毛利は遠く離れた中国にいるのだ。こんな場所で火縄に火をつけてどうする？　動揺する將兵たちに明智光秀はこう言った。

「静まれ、皆の者。敵は毛利にあらず。我らが敵は……本にようじに……あ、ごめん、噛んじゃった」

ちっ、と言う舌打ちがそこかしこから聞こえてくる。何だよ、一番大事な所で噛むなよな。口にこそ出さないが、足輕たちの不満はかなりのものだ。そんな將兵の気持ちを知ってか知らずか、光秀は今一度セリフを言い直すと今度こそ織田信長の常宿・本能寺へ軍勢を進める。

さて、この戦い……

というより奇襲は無事成功し、光秀はみごと信長を討ち取った。だが、その後攻め寄せてきた羽柴秀吉には敗れ、彼の天下は三日で終わる。期待してた細川幽斎や高山右近、大和の筒井順慶らの武將は皆、光秀に味方してくれることはなかった。

さもあらん、大事なセリフを噛むなよな大將に誰が付き従うだろう？　明智光秀の負けは桂川で噛んだ時、すでに決まっていたのだ。やはり、天下を望むならば滑舌かっせつくらいは良くなければならぬと言える。

第六十三話 滑舌（後書き）

言ってる場合か！

第六十四話 歩く

僕は哀れでならなかった。何がって？ 蟹がだよ。発音すればたつた二言、漢字で書けばたった一字。そんな蟹の存在に、僕は同情の念を禁じ得ないのだ。どうしてかって？ それは……彼らの歩き方に起因する。蟹は横にしか歩けない。この厳然たる事実が僕の涙を誘ってならないのだ。蟹が横にしか歩けないことは誰もが知っている。世に【蟹歩き】という言葉があるくらい有名な話だった。

蟹とは甲殻類に属する節足動物である。五対の脚のうち第一の脚は八サミになつていて、餌をとったり攻撃したりするのに役立つ。残りの四対、つまり八本の脚で彼らは移動するわけなのだが……八本も脚があるというのに、彼らは横にしか歩けない。

いや、歩かないと言い換えた方が良いかな。蟹は縦に歩く能力があるのに、それを使おうとしないのだ。蟹の脚はまさに宝の持ち腐れ、豚に真珠、猫に小判なのである。

そんな蟹という存在を初めて知ったのは、僕がまだヨチヨチ歩きしてた幼い頃であった。両親に連れられ磯場へ遊びに出かけた僕は、偶然にも彼らを発見した。口からあぶくを吐きながら、横歩きをする得体の知れない生き物。それが蟹。

母親が「あれは蟹さんよ、仲良くしなさい」と言ったのを今でも覚えている。もちろん僕は蟹と喧嘩するつもりはなかった。彼らを虐めたり貶^{けな}したりするつもりも毛頭ない。ただ僕は、横にしか歩かない蟹を哀れに思うだけなのだ。

進化は時として、こつも愚かしい生き物を作り出す。彼らは前向きに生きることができない。むろん、後ろ向きに生きることすら許されない。蟹にできるのは横向きの生き方だけ。そんな言葉があるのならばだが……

かといって、斜め上にも行けやしない。それは空間を二次元的にとらえなければ無理な話。地べたをひたすら横に歩く蟹ごときに、

そんな芸当ができるはずない。

ああ、蟹はなんと哀れなのだ！ 奇妙奇天烈なその歩みは愚かしくも愛らしい。もし、創造主がいるのなら……何故、蟹などという変な生物を造りたもつたのか聞いてみたいくらい。でも、残念ながら僕の知り合いに創造主なる者はいなかった。そこで、僕は蟹本人に直線聞いてみることにした。

「ねえねえ、蟹さん」

「やあ、君か。なんだい？」

「一つ質問があるのだけど、いいかな？」

「言ってみなよ」

「何で君たちは横にしか歩かないの？」

「うーん、それは難しい質問だな。じゃあ、逆に聞くけど……何で君たちは後ろにしか進まないの、海老君？」

僕は海中で深いため息を吐いた。蟹の歩き方の次に僕が哀れに思うこと……それが、僕ら海老の歩き方なのだ。僕は返答を待つ蟹に対しこう言った。

「やっぱり、僕らがネガティブだからじゃないかな？」

「ほう、海老はネガティブなのかね？」

「まあ、たぶん」

「それは知らなかったなあ」

蟹は口から泡をブクブク吐き出しながら、少し厳しい顔でこう言った。

「もっと前向きに生きなきゃ駄目だぞ！」

第六十五話 原罪

はじめに……神は天地を創造された。光と闇、大空と大地、草木や魚たち、そして動物たち。ありとあらゆる物をお創りになられた後、最後に神は人間を創造された。その名はアダム。神はなぜ最初の人間をアダムと呼ばれたのであろうか？ なぜなら神は、アダマ（土の塵）を材料にして人間を創られたからだ。神はこのアダムをエデンの園に置かれた。

さて、エデンの園で暮らし始めたアダムに神は言われた。「園の全ての木から取って食べなさい。ただし、善悪の知識の木からは決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまうからだ！」アダムはその命令を忠実に守り、善悪の知識の木以外の木から食物を得た。しかし、果物だけの食事は栄養バランスが悪く、アダムはみるみるうちに体調を崩していく。マズい、このままでは死ぬ……焦った神は一つの決断を下した。

「人が一人でいるのはよくないよ！」

突然、こんな事を言いだした神。動物たちは全て雄と雌の“つがい”である。次の世代へ子孫を残せる。だけど、人間は何故か一人ぼっち。これでは困るのだ。病気がちな彼は今にも死にそう。早く子供を作って人間という種を次の世代へ伝えてもらわねば……神はそう考えた。ならなんで最初から“つがい”にしなかったのだろう？ 謎ではある。

しかし、まあ、とにかく神はアダムのためにパートナーを創ることに決めた。彼が眠っている間に肋骨の一部を抜き取り、雌すなわち女を造り上げたのである。そして、初めてのご対面。アダムは女

を見てこう言った。「これこそ私の骨の骨、私の肉の肉」と。肋骨を取られた恨みが垣間見える台詞だ。

こうしてアダムに与えられた女であったが……彼女はわがまま放題な人間であった。ある日、お気に入り蛇と遊んでいた女は、あるうことが善悪の知識の木の実を取って食べてしまったのである。そう、それは神が食べるなと警告していた禁断の実。

(うわ、アホやこいつ。マジで死ぬで)

アダムはハラハラしながら女を見守った。神が必ず死ぬと言われた木の実を食べたのだ。絶対に死ぬと信じていた。しかし、女はめちゃくちゃ健康であった。さもあらん、善悪の知識の木とは今で言うリンゴの木。医者いらずと呼ばれるほどその栄養価は高いのだ。それを見たアダムも女に倣ってリンゴを食べはじめた。

「なんやこれ、めちゃくちゃ美味しいやんけ！」

衰えていたアダムの体は見る見るうちに回復していった。彼は感動すると共にこの一件で一つの悟りを得る。そう、神はケチであり嘘つきであるという悟り。だって善悪の知識の木の実を食べても死なないし、逆に健康になったのだから。

こうしてアダムは神に対して罪を犯した。何て罪？ それは、神にとって都合の悪い真実を知ったという罪だ。キリスト教ではこれを原罪と呼ぶ。神は二人をエデンの園から追い出すことに決めた……

第六十六話 ハブ（前書き）

現政権に対する批判を行うものではありません。登場人物は全てフィクションです。あしからず……

第六十六話 ハブ

謝罪と反省の要求を華麗に蹴飛ばしてみせた僕に対して彼女が言ったセリフは「私たち、もう別れましょう」だった。うわ、めっちゃくちやハブてるやん。これは大変、一大事だ。ならば船長釈放？ 当たり前、APECが吹き飛んじやうよ。

別に胡錦濤を冒瀆するつもりは無かったけど、必死に挑発する中国について意地悪しなくなっただけなんだ。それなのに「南京大虐殺を思い出せ！」「卑劣なり三光作戦！」「田中上奏文断固反対！」と彼女は意味不明なことばかり。これが魔性の女ってやつ？

ああ、僕がもつと学生時代に勉強してれば彼女が言う「正しい歴史認識」てやつも理解できたかもしれないのに。でも、今更そんなこと言っただって分からないものは分からない。学生運動が忙しくて歴史なんかチンプンカンプン。あっけらかんのスツカラカンさ。僕にできることは彼女をなだめることと美味しい飯を奢ってやることだけ。

だって「尖閣饅頭を食べさせてくれたらレアアースを分けてあげる」なんて言われたら男なら一直線でしょ？ いや、そんなの聞くまでもないよな。だけど尖閣饅頭をくれてやつても、彼女はまだまだ冷たい気がするのよ。気のせいだと思いたい。

いちおう確認はしたんだよ？ 僕は靖国神社には行ってない。軍国主義は嫌いなんだってね。でも彼女の怒りはなかなか溶けない。たった一言、放ったセリフは「強詞奪理！」日本語に訳せば問答無用だ。ヤバい、このままじゃあ殺される。「こうなりや、沖繩サブレも奢ってやるよ」これでようやく笑顔が戻る。

今まで中国が東シナ海を潜水艦でうろついてても何にも言わなかったけど流石に南シナ海は黙ってられないぜ。そんな事を前原が言い出すもんだからこうなっちゃうんだよなあ。慌てて国交相から外相に替えてみたけど時すでに遅いだ。

なに、今度は「中国に九州ラーメンを食べさせてやれ」だって？
やれやれ、これまで貢いだODAはいったい幾らになると思っ
たんだよ。だけど、そんなことおくびにも出さず「ついでに四国もつ
けましようか、女王様？」と言ったらまたもや満面の笑み。

はあ、君はどうしてそうなんだ。一応、日本人だろう？ このま
まじゃあ中国の奴隷になっちゃうぜ。でもチベットやウイグルに比
べりやまだマシか。くそ、神も仏もありやしないな。核の恫喝だけ
は昔も今も健在だけどね。

さあ、これからどうしよう。でも彼女の答えは明朗快活。「中国
への隷属は今に始まったことじゃないわ」だって。素晴らしいね。
君は最高に頭の切れるオカマ……いや、官房長官だよ。僕は彼女が
ここまで入れ込む中国にちよっと嫉妬。少しハブてていると今度は
ロシアのメドなんとかが北方領土に御来光だ。もう、いい加減にし
てくれ。北海道もつけてやるから大人しくしてる。僕は消費税アツ
プに忙しいんだ。なに、国内が騒がしい？ ビデオを見せるだつて
？ ああ、分かった分かった、編集したのをちよつとだけ見せてや
るから、これでいいだろう？ 一応、中国人とロシア人には虚ろな
瞳で遺憾の意を伝えてみた。

第六十六話 ハブ（後書き）

ハブてるニふてくされる

広島弁です。

第六十七話 視線（前書き）

アラサー、恋の話。

第六十七話 視線

伊達^{だて}がまたフラれたといので、俺たちは今日も飲み会を開くことにした。今度の相手は駅前の喫茶店“ジュリエット”で働く希美^{のそみ}ちゃん。言わずと知れた美人のウエイトレスだ。あいつ、不細工のくせに高望みが過ぎるんだよなあ。

集まるのはやはり駅前にある居酒屋“濁酒^{どろく}”である。学生時代からここが俺たちのたまり場。だが、今回は変えてやりやあ良かったと反省する。なにせ“濁酒”は“ジュリエット”のすぐとなり。伊達には辛すぎる集場所だろう。

仕事で少し遅れた俺がガラリと引き戸を開けて店に入ると、すっかり出来上がった他の友達が泣きじゃくる伊達をからかっていた。案の定だ。どうやらフラれたばかりの希美ちゃんを思い出してしまったらしい。こいつは酒が入ると泣き上戸になる。

「で、今回の敗因はなんなんだ？」

俺は開口一番そう尋ねた。すると、伊達は空のグラスを握り締めながら言った。

「い、今時さ……ラ、ラブレターは……キ、キ、キモいつてさ」

あちゃー、いきなりラブレター出したのかよ？ 確かにそれはないな。まあ、三十代の俺たちには青春の思い出出なただけだね。ラブレターってやつはさ。俺も何人かの女子にもらったもんだ。でも、やっぱり今どきラブレターは古すぎだぜ。

「なあ野村、どうしたら良かったのかなあ？」

泣きはらした目で伊達に見つめられると、流石に哀れになってくる。そういやこいつ、彼女いない歴が年齢と同じだったな。仕方がない。

「じゃあ、一つだけ教えとく」

「う、うん」

「恋はな、目から始まるんだよ」

「目？」

「そう目だ。目は口ほどに物を言うってことわざがあるだろ？ 好きな相手に思いを伝えるためには、まず視線を合わせることから始めるんだ」

「そ、そっかあ。俺、恥ずかしくて目を伏せてたわ」

「そんなこつたるうと思つたよ。いいか、例えば喫茶店でコーヒーを頼むとする」

「う、うん」

「ウエイトレスの希美ちゃんが持つてきてくれるわな？」

「あ、ああ」

「そしたら目を見て微笑むんだ」

「そ、それだけで良いのか？」

「ああ、最初はそれだけでいい。それがラブレターになるんだよ」
「な、なるほど」

「そうやって徐々に自分をアピールしていけば、自然と会話も出来るようになる。いきなりマジモンのラブレター渡されるよりは好感度が高いはずさ」

「流石だなあ野村」

「まあな」

「だけど……」

すっかり感心して聞き入っていた伊達が、急に困つたような顔をする。いったいどうしたんだ？

「最初の注文のことだけだな……」

「どうした？」

「そのコーヒーにケーキを付けちゃ駄目か？ 俺、甘い物に目がな
くて」

伊達の言葉に俺はため息を吐いた。

「ふう、お前はまずダイエットからだな」

第六十七話 視線（後書き）

最初のラブレターは目から始まる。だから、近眼の奴は不利。そうやって自分を慰めるんだ！

第六十八話 冒険

膝上20センチのマイクロミニのスカートはさすがに冒険だった
ように、法子はデートの中盤まで終始うつむき加減であった。

決して細いとは言えない太もも。腰回りも最近はやバめ。そんな彼女だからこそ当然ミニスカートは大嫌い。ムツチリ感が倍増するような気がしてならないのだ。まあ、自慢である肌の白さが出るのは良いんだけど……

それでも、法子自身は自分を体で勝負する女だとは考えていない。むしろ、知性や品性といったトータル面で勝負する女だと考えている。それに、お嬢様学校を卒業し大手商社に就職したプライドもあった。ああ、こんなミニなど着るんじゃないかな。これではまるで水商売の女だと、デート中盤まで本当に後悔していたのだ。

おまけにメイクは濃いめ。洋服は肩の大きく開いたボーダーのニット。そして、ストッキング無しが生足。これじゃあ水商売を通り越して娼婦に近いかも。例えて言えば……そう、友人の小夜子にそっくりだ。彼女はキャバレーのホステスである。

まったく趣味が悪い服装。しかし、意外なことに恋人の晴彦には好評であった。彼の第一声は「今日はエロかつこいいね！」だ。幸田來未ファンの彼にとって、このエロかつこいいは最上級の誉め言葉。キラキラした少年のような瞳で見つめられると、法子としても（満更でもないかな？）という不思議な感情を抱かざるをえない。

彼氏に誉められた嬉しさと気恥ずかしさの狭間で、マイクロミニの太ももをモジモジさせながら（サンキュー、小夜子）と思わず呟

く。そして、デート終盤にはすっかり馴れて、この服装を楽しむ余裕すら出てくる。いやはや、恋というものは現金なものである。

実はこのコーディネート、先に紹介した小夜子さよこのチョイス。男好きの権化みたいな彼女が、オシャレセンスゼロの法子のために気張ってくれた結果なのである。最初は頑なに拒んでいた法子だったが、小夜子の自信満々な一言で折れた。それは……

「賭けてもいいわ！ これを着て、彼がプロポーズしなかったら100万円あげる」

もちろん比喻だ。ケチな彼女が100万円もくれるわけがない。長いつき合いの法子には分かる。そもそも、貧乏なくせにそんな大金むりに決まってる。給料は全部、洋服や貴金属に使っちゃうのだから。

その日も、腹が減ったという理由で法子のもとに駆け込んできたくらい。買い置きのカップ麺を奪われ、楽しみにしていたカニ缶を彼女に発見された。そして、強盗犯がカニ缶を平らげカップ麺の最後の汁を飲み干した時、こう言い出したのだ。

「だからさ、あんたは色気がイマイチなのよ。でも、そのマイクロミニなら大丈夫。きっと彼氏も喜ぶわ」

「晴彦さんはそんなエロくありません！」

「いいえ、男はみんなエロいのよ」

「でも、これじゃまるで……あんたの私服と瓜二つじゃない」

「だからいいのよ。あたしがどれくらいモテると思ってるの？ もっと信用しなよ」

「本当？」

半信半疑な法子であったが、小夜子の言う通りであった。

「法子、結婚しよう！」

デートの別れ際、これまでなかなか言ってくれなかったプロポーズを、とうとう晴彦が言ってくれたのである。答えはもちろんYES。ハッピーエンドだ。帰ったら小夜子に感謝のメールを打たなきゃ。法子は律儀にもそう考えていた。

後日談。

小夜子は晴彦とラブホテルで密会中。

「ねえ、晴彦……とうとう法子にプロポーズしたんだって？」

「ああ、彼女の父親はうちの会社のお得意様だからな。これは俺の出世のために絶対必要なイベントなのさ」

「じゃあ、あたしはどうなのよ？」

「だから言つたろう。今後も愛人として面倒見てやる。そして、俺が出世して法子が不要になったら、すぐに離婚してお前と再婚してやるから。それまで我慢してくれ」

「でも……バレないかしら？」

「あの鈍いお嬢様が俺たちの関係に気づくわけないだろ。だいたい、お前は彼女と古い友達だ。妻の友人と会ってる所を見られても、それほど違和感はないだろうさ」

「まあ、そうね」

「それに……作戦がうまくいったじゃないか」

「ああ、あれね。クソ真面目な法子をあたしみたいにセクシーにする作戦」

「これで、お前のアクセサリなんか車が車に落ちてたって、自分のものかと勝手に勘違いしてくれる。大丈夫、俺たちに死角はない」

「あんたって、本当に悪知恵が働くわよねえ」

「わははは、そう誉めるなよ」

二人は部屋の灯りを消すと燃えるようなキスをした。この関係を法子が気づくことは決してないと、あざ笑うかのように……

第六十九話 痴女

あたしの携帯電話に警察から電話があり、その時初めて親友の春^{るか}香が捕まった事を知った。

すでに取り調べは済ませ、もう釈放されるとのこと。

ただ、身元引受人がいないと留置場一泊コースになるらしく……

あたしがそれになってくれと、春香が泣きついてきたのだ。

あまりにも突然のことで驚いたが、それ以上にショックを受けたのは彼女の罪状を聞いた時。

容疑は電車内での強制猥褻。

要するに『痴漢』ならぬ『痴女』であった。

「いやいや、さっちんー迷惑をかけたわねえ。ごめん、ごめん」

警察に捕まった帰りだというのに、喫茶店でおっさんのような手刀を前後に振っている親友を見ると、本当に変わらないなあと感心してしまう。

中学校時代から数えると、もう十九年の付き合い。

無駄に明るく、無意味に元氣——それが彼女なのである。

「まあ、大したことじゃないのよ。ただ、ちょっとイケメンがいたもんで、ついね」

「何が、ついねよ!」

あたしは口をとがらせ抗議した。無罪放免と言えど、捕まったのは事実だし犯罪を犯したのも確かなのだ。

混雑した満員電車の中で男子高校生の体に触り、あろうことかズボンのチャックを開け性器を取りだそうとしたらしい。

下手をすれば、実刑判決が出てもおかしくないところ。

幸い、その高校生が被害届を出さなかったので事なきを得たが……

笑って済ませられる話ではない。

「とにかく、もう二度とやめてよね」

「えー、それは約束できないわ」

「何がいいのよ、あんなこと?」

「ふふーん、知らないの? 痴女って、とってもいいのよう。特に高校生以下は反応が初々しくてねえ。ちょっとした女王様気分」
「バカ!」

何が女王様気分だ。

あたしは注文していたブレンドコーヒーを一口すすると、つい声

を荒げてこう言った。

「とにかく、今度捕まったら友達やめるからね！」

「ええ、なんでよー？」

「当たり前でしょ。痴女の親友なんてカツコ悪いわ」

「そんなあ、病気の友達を見捨てるの？」

「病気？」

「そうよ。痴女って一種の病気なんだって。性嗜好障害って言うの」

「本当なんでしょうね？」

「間違いないわよ。診断書もあるし」

聞けば、そのことを理由に警察の同情も買ったらしい。確かに哀れではある。しかし……

「いくら病気でも、他人に迷惑をかけちゃだめよ」

「それは分かってる。でも自分でも抑えがきかなくて」

「早く彼氏をつくりなさいな」

「それが一番良いんだけどねえ」

駅前の喫茶店で頭を悩ませている二人。そんな所へ一人の若者が現れた。

「あ、あのう」

「あ、あなたはさっきの？」

「は、はい。先ほどはどうも……」

「いや、こちらこそ、どうも……」

顔を真っ赤にしたブレザー姿の高校生。春香が襲った被害者らしい。どうやら彼女のことを気になって探していたようである。

「突然すみません。あ、あの……ぼ、僕と付き合ってくれませんか？」

「はい、喜んで！」

強制猥褻が結んだ恋かあ。

素敵だわ。

ていうか、なんで痴女の春香に恋人ができて真面目なあたしにできないうのかしら？

あたしが二人の恋の成り行きをぶすくれた表情で見守っていると急に春香が振り向いてこう言った。

「ね、痴女っていいもんでしょ？」

あたしには、返す言葉がなかった。

第七十話 恋猫

学校の帰り道はいつもドキドキ。だって、大好きな翔太君と通学路が同じなんだもん。まあ、今まで特に会話する機会もなかったんだけど……でも、彼の後ろ姿を見てるだけで私は幸せ。そう、少なくともあの日までは。

異変を感じたのは夏休みが始まる直前だった。学校近くにある神社の境内へ翔太君が寄り道しているのを見かけたのだ。不思議な光景に思わず首を傾げる私。

寄り道なんて珍しくもない？ 普通の男の子ならそうだろうけど、翔太君に限っては違うのだ。だって、彼は近所のサッカークラブに所属するエースストライカー。毎日毎日、練習にいそしむ彼は寄り道など絶対にしない。

毎日、翔太君の背中を見続けた私には分かる。これは変だって。初恋相手の不思議な行動に好奇心いっぱいな私。勇気を振り絞って声をかけることにした。

「ねえ、何をしてるの？」

ランドセル姿の彼はマサイ族の戦士みたいにピョンと飛び上がると慌てて振り向き言った。

「な、なんだ歩美か。脅かすなよ……今、猫にエサをあげてるんだ」

私（歩美）がよく見ると、翔太君の手にはツナカンが握り締められている。そして、彼の足元からは白黒のブチ模様をした小さな猫が「ニャー」と鳴いて現れた。なるほど、親のいない子猫にエサをあげていたのか。

「優しいのね、翔太君」

でも、なぜか彼は海よりも青い顔をして震えている。

「どうしたの？」

「お、お前は平気なのかよ」

「平気って？」

「ね、猫だよ、猫」

よくよく聞けば、彼は極度の動物嫌いらしい。だけど、お腹をすかせた子猫を哀れに思い一昨日からエサをあげてるんだって。翔太君の優しさにますます感心する。だけど、こんなにかわいい子猫をかわいいと思えないのは何だか可哀想だ。

「私のお母さんが言ってたけど……そういう時は、自分の嫌いな物を好きな物に置き換えて考えれば良いんだって。私の場合はトマトだった。ずっと苦手だったんだけど、大好きなリンゴと思うようにしたらいつの間にか食べられるようになってたわ」

「そんなもんかな」

「翔太君も何かに置き換えたら？」

すると彼は、少し考えたあと真剣な目で私を見るとこう言った。

「じゃあ、俺サッカーが好きだから、この猫をサッカーボールと思うことにするよ」

「それが良いかも」

私は一も二もなく賛成した。すると突然、白黒ブチの子猫が翔太君の足に飛びかかってきたのだ。きつとお腹をすかせていたのだろ

う。翔太君は悲鳴をあげながら反射的に避ける。それを見た私は「ボールは友達！」と叫んで思わず子猫を踏んづけた。

翔太君は「あ、そうか」と言って私が踏んづけた子猫を思いつきり蹴飛ばす。白黒のボールは弧を描きながら賽銭箱へ突き刺さる。

「ナイスシュート！」

私は思わず翔太君に抱きついた。彼も嬉しそうに私をギュツと抱きしめる。子猫が結んだ恋のゴール。あの日以来……私たちは付き合うようになった。

第七十一話 シャネル

平成23年11月23日午前1時14分、交番近くの公園で爆発事故が発生した。全ての遊具が吹き飛ぶ大惨事だ。ただ、深夜だったおかげで利用客は少なく、死亡したのは中年男性一人だけ。公園を根城にする数羽のカラスも焼け焦げていたが……まあ、それを含めてもたったの一人と数羽。この程度の被害はむしろ不幸中の幸いと言っべきだろう。

それにしても、いったいなぜこんな事が起きてしまったのだろうか？ 何の変哲もないのどかな公園。ガス管などの危険物は何一つ無いというのに。後に警察の懸命な捜査で明らかとなるが、実はこれには複雑な事情があった。では以下にその一部始終を記すとしてしよう。

まず最初に言っておくが、この爆発は単なる事故ではない。強力なプラスチック爆弾を使った破壊工作。そう、テロリズムだ。犯人の名前は長谷川三平。年齢は48歳、国際テロ組織アルカイル（仮名）の一員で、そもそもの狙いは日本の警察だった。

三平は小型で精巧な時限爆弾をシャネルのバッグに仕込み、それを大胆にも公園近くの交番へ落とし物として届けたのだ。爆弾は小さな建物など跡形もなく吹き飛ぶ威力。交番にいる警察官は死を決して免れないだろう。爆発の二日前の話である。

交番は小なりといえど立派な警察施設。それが爆破されれば社会の不安はいやが上にも高まるに違いない。安全かつ巧妙。三平の計画は完璧と思われた。しかし、この時すでに運命の歯車は狂い始めていたのだ。

最初の誤算。それは三平から落とし物を受け取った若い巡査がそれを着用してしまったことだ。彼には最近熱を上げている女性がいってプレゼントにいつも悩んでいた。そんな時、高価なシャネルのバッグが目の前に転がり込む。ついつい魔が差しそれをかすめ取ってまったというわけ。

だが、事態はこれだけで終わらない。次なる誤算。それは、この若い巡査から貢ぎ物を受け取った女性が、ひっそりにあつてしまつたことだ。被害はもちろんシャネルのバッグ。三平の作つた爆弾はまたしても人手に渡つたわけである。

いや、人手という言葉には語弊があるやもしれぬ。なぜなら、そのひっそりたる犯人は人間ではないのだから。犯人は都内を徘徊するカラスたち。この真つ黒な空飛ぶ窃盗犯が、シャネルのバッグをどうするつもりだつたのかは不明である。ただ、彼らがそれを自分たちの巣に持ち帰つたのは確かな事実であつた。

さて、事件の夜。三平は標的とした交番にほど近い公園に来ていゝる。派手に爆発する交番を自分の目で確かめたかつたのだらう。彼はベンチに腰掛けた。それはカラスの巣がある大きな榆の木の真下にあつた。そして、タイムアップ。彼の作つた爆弾は見事に爆発し、周囲の物を吹き飛ばし焼き尽くしていつた。三平自身とカラスたちを含めて……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3249e/>

後藤詩門短編集

2011年12月11日22時48分発行